

註
枚
日
本
永
代
藏

325

195

048



始



特230
678



永代藏



凡 例

一、「日本永代藏」は西鶴が町人物に筆を染めた最初の作で、その版本の奥附によれば、貞享五戊辰年正月、大阪北御堂前の書肆森田庄太郎によつて出版された。その題簽には「日本永代藏」の下部左側に「大福新長者教」とあり、丁附の上の柱にもやはり「大福新長者教」とある通り、寛永四年刊の「長者教」に因んで、分限長者となつた人々の話を集めたものである。いはゞ一種の商人立志傳ともいふべきものである。但し寛永の「長者教」は單に教訓書で、本書はその題號と本文中に二三語句を引用した外には直接の關係はない。

一、本書は大本六冊、數種の版があるが、その初版本は書肆森田庄太郎の外に京二條通麩屋町金屋長兵衛と江戸神草屋町西村梅風軒との二書林の名が奥附にあるものがそれだといふ。次に右の中江戸の書林の名だけ削つて再版され、又更に外題を「大福新長者鑑」と改めて出版されたものもある。是等は皆板下は同一で本文に異同はないが、なほ後年卷の順序や話の順序をかへ、板下も挿繪も改めて出した偽版一二種がある。以て本書がいかに世に行はれたかゞ分る。今この翻刻に際しては、金屋長兵衛森田庄太郎版のものを底本として用ひた。

一、原本は假名遣・送り假名等の誤りや不備な點が多いので、今翻刻するに際し、なるべく正しい用法に従つて改めた。但し語法や宛字などで、西鶴特有と認めらるべきもの、若くは當時一般に慣用されたものなどは、濫りに改削を加へず、原本の面目をそのまま傳へる事にした。

一、原本には各巻の始めごとに目録がついてゐるが、今便宜上最初に一括して掲げる事にした。

一、原本には卷一に「本朝永代藏卷之一」とある外、他の巻には内題がないが、今各巻毎に内題を附し、且つ「日本永代藏」といふ稱に統一した。

一、原本の挿繪中興味多いもの五六を選んで、巻中にこれを挿んだ。

一、讀者の便をはかつて、簡単な頭註を加へておいたが、紙面の都合上意を盡さない所が多い。しかし從來研究者の間に難解視されて居る語句等に對しては、努めてその解釋を試みる事にした。

一、附録として添へた「井原西鶴」は、西鶴研究の初心者に對するほんの手引に過ぎない。しかしこれによつて正しく西鶴が理解され、深くその作品に同情が注がれる機縁を作り得たならば、編者の喜びこれに過ぎるものはない。

昭和四年若葉の頃

穎原退藏

校註 日本永代藏 目次

卷一

初午は乗つて來る仕合……………一
 江戸にかくれなき俄分限……………一
 泉州水間寺利生の錢……………一
 二代目に破る扇の風……………七
 京にかくれなき始末男……………七
 一步拾うて家亂す忤子……………七
 浪風靜かに神通丸……………三
 和泉にかくれなき商人……………三
 北濱に簾の神をまつる女……………三
 昔は掛算今は當座銀……………一八
 江戸にかくれなき出見世……………一八

世は欲の入札に仕合……………二二

一寸四方も商賣の種……………二二
 南都に隠れなき松屋が跡式……………二二
 後家は女の鑑なる者……………二二

卷二

世界の借屋大將……………二七
 京にかくれなき工夫者……………二七
 餅搗もさたなしの宿……………二七
 怪我の冬神鳴……………三三
 大津にかくれなき醬油屋……………三三
 何をしても世を渡る此浦……………三三
 才覺を笠に着る大黒……………三三

江戸にかくれなき小倉持

身過の道急ぐ犬の黒焼

天狗は家名の風車……………三

紀伊國に隠れなき鯨えびす

横手ぶしの小歌の出所

舟人馬たか燈屋の庭……………四

坂田にかくれなき亭主振

明くれば春なり長持の蓋

卷三

煎じやう常とはかはる問藥……………五

江戸にかくれなき箸削

小松さかえて材木屋

國に移して風呂釜の大臣……………六

豊後かくれなきまれの長者

心を疊み込む古筆屏風……………七

筑前にかくれなき舟持

蜘蛛の絲のかゝるためしも

仕合の種を蒔錢……………八

江戸にかくれなき千枚分銅

そなはりし人の身の程

茶の十徳も一度に皆……………九

越前にかくれなき市立

身は燃杭の小釜の下

伊勢海老の高買……………一〇

堺にかくれなき樋の口過

能は棧敷から見えてこそ

卷五

廻り遠きは時計細工……………一〇三

程なくはげる金箱の三の字

世は抜取の観音の眼……………一〇二

伏見にかくれなき後生嫌ひ

質種は菊屋が花ざかり

高野山借錢塚の施主……………一〇一

大坂にかくれなき律義屋

三世相よりあらはるゝ猫

紙子身體の破れ時……………一〇〇

駿河にかくれなき花菱の紋

無間の鐘を聞けば突きそこなひ

卷四

祈る印の神の折敷……………九九

京にかくれなき桔梗染屋

わら人形の夢物がたり

長崎にかくれなき思案者

火を喰ふ鳥も身をじりぬ

世渡りは淀鯉のはたらき……………九八

山崎にうち出の小槌

水車は仕合を待つやら

大豆一粒の光り堂……………九七

大和にかくれなき木綿屋

借錢の書置めづらし

朝の鹽籠夕の油桶……………九六

常陸にかくれなき金分限

人はそれくの願ひに叶ふ

三匁五分曙のかね……………九五

作州にかくれなき格氣煙

藏合さいふは九つの藏持

卷六

銀のなる木は門口の柵……………一三二
 越前にかくれなき年越屋……………一三四
 見立てて養子が利發……………一三四
 武州にかくれなき一文よりの錢屋……………一三四
 買置は世の心やすい時……………一四二
 泉州にかくれなき小刀屋の藥代……………一四二

四

身躰かたまる淀河のうるし……………一四三
 山城にかくれなき奥三右が水車……………一四七
 智恵をはかる八十八の升搔……………一四七
 今の都にかくれなき三夫婦をいはふ……………一四七

附録

井原西鶴……………一五五

日本永代藏 卷一

初午は乗つて来る仕合

○天道言はずして云
 云―論語、陽貨篇「子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」。
 ○心は本虚にして云
 云―古文眞寶、程正叔の視箴「心兮本虚、應物無迹」。
 ○天地は萬物の云々
 ―古文眞寶、李太白の春夜宴「桃李園二序」
 「夫天地萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若夢」。

てんたうものい
 天道言はずして國土に恵ふかし、人は實あつて偽りおほし。その心は本虚にして物に應じて跡なし。これ善惡の中に立つて直なる今の御代を、ゆたかに渡るは人の人たるが故に常の人にはあらず。一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。これ二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく。されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙死すれば何ぞ、金銀瓦石には劣れり、黄泉の用には立ちがたし。然りといへども残して子孫の爲とはな

りぬ。ひそかに思ふに世に有る程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有り。それより外はなかりき。これにましたる寶船の有るべきや。見ぬ島の鬼の持ちし隠れ笠かくれ蓑も暴雨の役に立たねば、手遠き願を捨て、近道にそれぐの家職をばげむべし。福德はその身の堅固にあり、朝夕油断する事なかれ、殊更世の仁義を本として神佛をまつるべし。これと國の風俗なり。折ふしは春の山二月初午の日、泉州に立たせ給ふ水間寺の觀音に貴賤男女參詣でける。皆信心にはあらず、欲の道づれ、遙かなる苔路、姫萩萩の焼原を踏み分け、いまだ花もなき片里に来て、この佛に祈誓かけしは、その分際程に富めるを願へり。この御本尊の身にしても、一人々々に返言し給ふもつきず、「今この娑婆に擱どりはなし、我頼むまでもなく、土民は汝にそなはる、夫は田うちて婦は機織りて、朝暮そのいとなみすべし、一切の人のごとくと、戸帳ごしにあらたなる御告なれども、諸人の耳に入らざる事にあさまし。それ世の中に借銀

○折ふしは—恰度時節は。
○水間寺—和泉國、龍谷山水間寺。聖武天皇の勅願で天平年中に建立された。二月初午の日を會日とし、この日歩を運ぶ者は四十二歳の厄難を免れるといひ、草薺(トコロ)を土産とした(泉州志)。

の利足ほどおそろしき物はなし。この御寺にて萬人かり錢する事あり。當年一錢あづかりて來年二錢にして返し、百文請取り二百文にて相濟しぬ。これ觀音の錢なれば、いづれも失墜なく返納したてまつる。おのく五錢三錢十錢より内をかりけるに、爰に年のころ廿三四の男、産れ付ふとくたくましく、風俗律義にあたまつき跡あがり、信長時代の仕立着物袖下せはしく裾まはり短く、うへした共に紬のふとりを無紋の花色染にし、同じ切の半襟をかけて、上田島の羽織に木綿裏をつけて、中脇差に柄袋をはめて、世間かまはず尻からげして、爰に參りし印の山椿の枝に、野老入れし髭籠取添へて下向と見えしが、御寶前に立寄りて借錢一貫と云ひけるに、寺役の法師貫さしながら相渡して、その國その名をたづねもやらず、かの男行きがたしれずなりにき。寺僧あつまりて當山開關よりこのかた、終に一貫の錢かしたる例なし、借る人これがはじめなり、この錢濟むべき事とも思はれず、自今は大分にかす事無用とさたし侍る。その

○あたまつき跡あがり—髪の前より上るやうに結つたのをいふ。當時は俗徒然四にも「後さかりの頭付死んで人目の立ち」さある如く、後下りが流行で後上りは野暮さされた。しかも元祿十五年の「色三味線」には「當流のあさあがりの頭はやる時」さあるから、流行の變遷が想ひやられる。
○信長時代—古風、時代おくれなごの意。
○ふさり—太織。
○上田島—信州上田地方から産した紬縞。
○貫さし—錢一貫文を貫く暫繩。



○着きし舟問屋―
「着く舟問屋」の意。

○せんぐりに―順次
に。次第送りに。

○かたり句―語りぐ
さ。話のたね。
○番匠―大工。

人の住所は武藏江戸にして小網町のすゑに、浦人の着きし舟問屋して次第に家榮えしをよろこびて、掛硯に仕合丸と書き付け、水間寺の錢を入れ置き、獵師の出船に子細を語りて百文づゝかしけるに、かりし人自然の福有りけると遠浦に聞き傳へて、せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり、十三年目になりて元壹貫の錢、八千百九十二貫にかさみ、東海道を通し馬につけ送りて御寺につみ重ねければ、僧中横手打ちて、そのち詮議あつて、末の世のかたり句になすべしと、都よりあまたの番匠をまねきて、寶塔を建立、有難き御利生なり。この商人内藏には常燈のひかり、その名は網屋とて武藏にかくれなし。惣じて親の譲りをうけず、その身才覺にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりしてこれを分限といへり。千貫目の上を長者とは云ふなり。この銀の息よりは幾千萬歳樂と祝へり。

二代目に破る扇の風

○人の家に云々―徒
然草「家」にありなき
木は松櫻、松は五葉
もよし」による。
○四條の橋を云々―
祇園・八坂などの遊
女買ひをせぬとの
意。
○大宮通りより云々―
島原に遊ばぬとの
意。
○牢人―浪人。

○八十八歳云々―八
十八を合せるさ米字
になる縁から、八十
八歳の人に升搔（八十
に盛つた米などを平
らかにならす棒）を

人の家に有りたきは梅櫻松楓それよりは金銀米錢ぞかし。庭山にまゝさりて庭藏の詠め、四季折々の買置、是ぞ喜見城の樂みと思ひ極めて、今の都に住みながら四條の橋を東へ渡らず、大宮通りより丹波口の西へ行かず、諸山の出家をよせず、諸牢人に近付かず、すこしの風氣蟲腹には自薬を用ひて、晝は家職を大事に勤め、夜は内を出でずして、若い時習ひ置きし小謠を、それも兩隣をはぐかりて、地聲にして我ひとりの慰みになしける。灯をうけて本見るにはあらず、覺えた通り世の費一つもせざりき。この男一生のうち草履の鼻緒を踏みきらず、釘のかしらに袖をかけて破らず、萬に氣を付けて、其身一代に貳千貫目しこためて、行年八十八歳、世の人あやかり物とて升搔をさらせける。さればかぎりある命、この親仁その年の時雨降る頃、憂の雲立どころをまたず、頓死の枕に残る男子一

切つて貰ふさ、商賈に利を得るさいふ迷信が昔行はれた。
 ○所務わけ―遺産分配。
 ○仕揚一人の死後三日目。七日目などの忌をすまず事。
 ○しはい穿鑿―吝嗇の念から種々失費のないやうに考へること。

○命しらす―強くて長もちのするものないふ。
 ○今廿二年生き給へば―廿二年は十二年の誤。
 ○長百―丁百。九六錢(錢九十六文を百文とする事)に對して、錢百文を百文とするのをいふ言葉。
 ○年切女―年期を定めて傭つておく女。
 ○五大力菩薩―昔遊女などが書信の無事

人して、此跡を丸どりにして、二十一歳より生れ付きたる長者なり。この世倅親にまさりて始末を第一にして、あまたの親類に所務わけとて箸かたし散らさず、七日の仕揚、八日目より葎門口を開けて、世をわたる業を大事にかけて、腹のへるを悲しみて、火事の見舞にも早くは歩まず、しはい穿鑿に年暮れて、明くれば去年の今日ぞ親仁の祥月とて、旦那寺に参りて、下向になほ昔を思ひ出して涙は袖にあまれる。「この手袖の碁盤島は命しらすとて親仁の着られしが、思へば惜しき命、今廿二年生き給へば長百なり。若死あそばして大ぶん損かな」と、これにまで欲先立ちて歸るに、紫野の邊り御藥苑の竹垣のもとにして、めしつれたる年切女齋米入れし明袋持ちし片手に、封じ文一通拾ひあげしを取りてみれば、「花川さままゐる二三より」とうらがき、そくひ付けながら、念を入れて印判おしたる上に、五大力菩薩とそめぐくと筆をうごかせける。これは聞きも及ばぬ御公家衆の御名なりと、それより宿にかへり人に尋ねければ、「これは

に達するやうに祈るため、その封じ目に五大力菩薩と書く風習があつた。もつて佛家で五大力菩薩を道祖神に習合する事から起つたといふ。
 ○そめぐと―こころをこめて手紙など書くさまにいふ。
 ○局女郎―島原や吉原で最も下級の遊女。端女郎。
 ○杉原―杉原紙。
 ○付石―金付石。金銀をすりつけてその良否置贖を試すに用ひる石。
 ○上目―秤竿の上面に記した目で量ること。向目に對していふ。
 ○りんご―秤にかけるときちんご量るさまにいふ語。
 ○切米―給金。扶持米。
 ○諸分―諸雜費。

島原の局女郎のかたへやるなるべし」と読みすてけるを、これも杉原反古一枚のとく、損のゆかぬ事とて物しづかに解き見しに、壹歩ひとつころりと出しに、これはと驚き先づ付石にてあらため、その後秤の上目にて一匁二分りんとある事をよろこび、胸のをどりをしづめ、思ひよらざる仕合は是ぞかし、世間へ沙汰することなかれと、下々の口を閉ぢて、さて彼文を讀みけるに、戀も情もはなれて、かしらから一つ書にして、「時分がらの御無心なれども、身にかへてもいとほしさのまゝ、春切米を借越し遣はし参らせ候、此内二匁はいつぞやの諸分、その残りは皆合力、年々つもりし借金を濟まし申さるべし。惣じて人には其分限相應のおもはく有り、大坂屋の野風殿に西國の大臣菊の節句仕舞にとて、一步三百おくられしも、我が一角も心入は同じ事ぞかし、有らば何か惜しかるべし」と、哀ふくみての文章、讀む程ふびんかさなり、いかにしても此金子を拾うては居られじ、この存念もおそろし、其男に返さんとすれば住所を知らず、先

○大阪屋―島原あげ屋町角の大阪屋太郎兵衛。
 ○野風―大阪屋抱への太夫の名。
 ○菊の節句仕舞―昔遊廓には五節句をはじめ、紋日(物日)といふ式日があつて、遊女はその折種々入費が多かつた。
 ○編笠―當時標客は大門前の茶屋で編笠を借り冠るのが常であつた。
 ○一文字屋―島原中の町一文字屋七郎兵衛。
 ○今唐土―一文字屋抱への太夫。先代の唐土に對し今唐土といふ。
 ○やり手―遊女の監督なごする附添の婆。
 ○青暖簾―局女郎の見世には青暖簾をかけてあつた。

の知れたる島原に行きて、花川を尋ね渡さんと、すこしは鬢のそゞけを作りて、宿を立出でし後、此一步只返すも思へば惜しき心ざし出で、五七度も分別かへけるが、程なく色里の門口につきてすぐには入りかね、しばらく立ち休み、揚屋より酒取りに行く男に立ち寄り、「此御門はことわりなしに通りましたも苦しう御ざりませぬか」と云ひければ、かの男返事もせず、おとがひにて教へける。さてはと編笠ぬぎて手に提げ、中腰にかゞめてやう／＼に出口の茶屋の前を歩き過ぎて女郎町に入り、一文字屋の今唐土出掛姿に近寄り、「花川様と申す御方は」と尋ねけるに、太夫やり手の方へ顔を移して、「私は存じませぬ」とばかり。やり手青暖簾のかゝるかたに指さして、「どこぞそのあたりで聞き給へ」といへば、跡なる六尺目に角を立て、「其女郎つれておぢやれ、見てやらう」と申せば、「つれ参る程なれば御前さまに御尋ねは申しませぬ」と、跡へ下りてあなたこなたに尋ねあたり、様子を聞けば貳匁どりの端傾城なるが、此二三日氣

○六尺―駕籠昇。
 ○貳匁どりの端傾城―揚代二匁の局女郎。
 ○藤屋彦右衛門―出口の茶屋の一。
 ○九匁の御方―太夫・天神の次に位するかこひ(園、鹿戀)女郎。その揚代當時十八匁であつたから、半日では九匁。好色訓蒙圖彙「半夜は九匁した事、かこひの切實也。」
 ○末社―大盡を大神にさりなして、その附間をいふ。
 ○願西・神樂・鸚鵡・亂酒―願西・鸚鵡・七・神樂庄左衛門・鸚鵡の吉兵衛・亂酒の與左衛門。
 ○そだて―煽(オダ)て。
 ○一度は榮え云々―謠曲杜若の文句。

色あしくて引籠り居らるゝよし、そこ／＼に語り出ければかの文届けず、かへりさまに思ひの外なる浮氣おこりて、元この金子我が物にもあらず、一生の思ひ出に、此金子切に、今日一日の遊興して、老いての話の種にもと思ひ極め、揚屋の町は思ひもよらず、茶屋にとひ寄り、藤屋彦右衛門といへる二階にあがり、晝のうち九匁の御方を呼びてもらひ、呑みつけぬ酒にうかれて、これより手習ふはじめ、情文の取りやりして、次第のぼりに太夫残らず買ひ出し、時なる哉都の末社四天王、願西・神樂・あふむ・亂酒にそだてられ、まんまと此道にかしこくなつて、後には色作る男の仕出しもこれが真似して、扇屋の戀風様といはれて吹き揚げ、人は知れぬ物かな、見及びて四五年このかたに、二千貫目塵も灰もなく火吹く力もなく、家名の古扇残りて、一度は榮え一度は衰ふると、身の程を謠うたひて一日暮しにせしを、見る時聞く時、今時は儲けにくい銀をと、身を持ちかためし鎌田屋の何がし、子供にこれを語りぬ。

浪風靜かに神通丸

○事にぞ有りける—
「事にかありけむ」
あるべき所。

○八木—米の異名。
茶を草人木といふ類。
○調義—宜く事に處するやうに工夫才覺をめぐらす事。
○北濱—大阪。古く米市場のあつた所。

諸大名にはいかなる種を前生に蒔き給へる事にぞ有りける。萬事の自由を見し時は、目前の佛というて又外になし。さればとよ世に大名の御知行、百二十萬石を五百石どり、釋迦如來御入滅このかた今に永々勘定したて見るに、これを取り盡さじといへり。大人小人の違ひ各別世界は廣し。近代泉州に唐かね屋とて金銀に有徳なる人出来ぬ。世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて三千七百石積みても足かろく、北國の海を自在に乗りて、難波の入湊に八木の商賣をして次第に家榮えけるは、諸事につきて其身調義のよき故ぞかし。惣じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商も有る事なり。その米は藏々に山を重ね、夕の嵐朝の雨、日和を見合せ、雲の立所を考へ、夜のうちの思ひ入にて

○たてり商—空米相場をいふ。商人職人懷日記「我が手前に一俵もなく兩替屋を以て賣買する、これをたてり名附け」。たてりは立つの意で、立つたま、即座に賣買をしたのから出た言葉。
○請判—請人（保證人）たる證として捺す印判。
○出入—紛紜。悶着。
○問丸—問屋。
○杉ばへ—杉形（スギナリ）に同じ。下部を廣く上部を次第に狭く積みあげた形をいふ。
○上荷茶船—上荷舟（本船の荷物を積み運ぶ二三十石積み位の舟）と茶舟（同じく運送船で上荷舟よりも小形な十石積み位の舟）。

賣る人有り買ふ人有り、一分二分を争ひ、人の山をなし、互に面を見知りたる人には、千石萬石の米をも賣買せしに、兩人手打ちて後は少しもこれに相違なかりき。世上に金銀の取遣には預り手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、その約束を延ばし、出入になる事なりしに、空定めなき雲を印の契約をたがへず、その日切に損徳をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景、數千軒の問丸、薨をならべ、白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付け送れば大道轟き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先を争ひ、若い者の勢ひ虎臥す竹の林と見え、大帳雲を翻へし十露盤丸雪をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひゞきまよひつて、其家の風暖簾吹きかへしぬ。商人あまた有るが中の島に岡・肥前屋・木屋・深江屋・肥後屋・鹽屋・大塚屋・桑名屋・鴻池屋・紙屋・備前屋・宇和島屋・塚口屋・

○米さじ—米俵にさし込んで米粒を取出し、良否を検するに用ひる竹筒。先は掛詞。
 ○鐘にひびきまさつて—昔の天秤は量る時その針口を小槌で叩き平衡を誤らぬやうにした。その音が時の鐘よりまさるさの意。
 ○わづかなる人—僅かの財産の人。
 ○供はやし—たゞ供のここ。
 ○行く水に數かく—古今集「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」。
 ○地算—割算・八算などに對し、極めて初歩の寄せ算などをいふ。
 ○内證暖ひ—内々で事件の調停をすまじて。

淀屋など、此所久しき分限にして商賣やめて多く人を過しぬ。昔こゝかしこのわたりにてわづかなる人なども、その時にあうて旦那様とよばれて、置頭巾撞木杖替草履取るも、これ皆大和河内津の國和泉近在の物つくりせし人の子供、惣領殘して末々をでつち奉公に遣はし置き、鼻垂れて手足の土氣おちざるうちは、豆腐花柚の小買物につかはれしが、お仕着二つ三つ年を重ねけるに、定紋をあらため、髪ゆびぶりの結振を吟味仕出し、風俗も人のやうになるに隨ひ、供はやし、能のう、舟遊ふなあそびにも召しつれられ、行く水に數かく砂手習地算も子守の片手に置き習ひ、いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ、次第おくりの手代分になつて、見るを見真似まねに自分商おきなひを仕掛け、利徳はだまりて損は親方にかづけ、肝心の身を持つ時、親請人に難義をかけ、遣ひ捨てし金銀の出所なく、それなりけりに内證暖ひ濟みて、荷にひ商あきなひの身の行末幾人か限りなし、おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。惣じて大坂の手前よろしき人、代々つゞきしにはあらず、大かた

○手前よろしき人—金持。手前は自己の經濟状態をいふ。
 ○うさりぬ—失せぬ。

は吉藏三助がなりあがり銀持になり、その時を得て詩歌鞠楊弓琴笛香會茶の湯も、おのづからに覺えてよき人付合、むかしの片言もうさりぬ。兎角に人は習はせ、公家のおとし子作花して賣るまじきものにもあらず。是を思ふに奉公は主取が第一の仕合なり。子細は繁昌の所にはよらず、北濱過書町のほとりに住みけるさし物細工人ありしに、此職人にもちひさき弟子二人ありしが、新屋・天王寺屋などの十貫目入の銀箱、不斷手にかけて寸法は覺えて、その銀はつひに手に取りたる事なし。この弟子おとなしくなりて一分店を出しけるに、親方にかはらず鍋蓋火燧箱の仕置、これより外を知らず。この者も同じ所から大所に使はれなば、それぐの商人になるべきものと見及び不便なり。すぎはひは草箒の種なるべし。此濱に西國米水揚の折ふし、こぼれすたれる筒落米をはき集めて、その日を暮せる老女ありけるが、形ふつゝかなれば、二十三より後家となりしに、後夫となるべき人もなく、ひとりある世悴を行末の樂みに、かなしき年をふ

○一分店—自分で獨立の店。
 ○すぎはひは云々—「すぎはひは草の種」さいふ諺による。
 ○筒落米—米さしの筒からこぼれ落ちた米。

○改免—凶作のあま
なごに一時年貢を免
ずること。

○朝夕—朝食ミ夕
食。

○小口俵—米俵の兩
端にあてる藁製の圓
く平たい蓋。

○錢店—銀貨などを
錢に兩替する店。

○丁銀—海鼠形をし
た銀貨で一枚四十匁
位に當る。

○こまがね—豆形を
した小粒の銀貨。小
玉、豆板など、もい

○秤にひまなく云々
—丁銀や豆板は品位
は一定してゐるが、
量目は不定だから天
秤にかけて量るので
ある。

○上盛—最上、第一
流なごの意。

○小判市—小判金を
銀貨で賣買する市。
當時金一兩はほゞ銀
六十匁に相當した
が、時によつてその
相場に高低があつ
た。

○掛屋—武家に金錢
の調達を勤める大商
人で、諸大名の蔵屋
敷に出入し、米穀を
賣る世話などをし
た。

○筒落簾藥簾—筒落
米を掃く簾と藥のし
べて作つた簾。

○乾の隅—土蔵など
は家の北西隅に設け
る風習がある。

りしに、いつの頃か諸國改免の世の中すぐれて八木大分この浦に入舟晝
夜に揚げかね、借藏せまりて置くべきかたもなく、澤山に取りなほし、捨
れる米を塵塚まじりにはき集めけるに、朝夕に食ひあまして一斗四五升
たまりけるに、これより慾心出來て始末をしけるに、はや年中に七石五斗
のばしてひそかに賣り、明の年なほまたのばしける程に、毎年かさみて二
十餘年に胞くり金十二貫五百目になしぬ。其後世忤にも九歳の時より遊
ばせずして、小口俵のすたるを拾ひ集めて、錢ざしをなはせて、兩替屋間
屋に賣らせけるに、人の思ひよらざる錢まうけして、我が手よりかせぎ出
し、後には慥なるかたへ日借の小判、當座がしのはした銀、これより思ひ
付きて今橋の片蔭に錢店出しけるに、田舎人立ち寄るにひまなく、明がた
より暮がたまで、わづかの銀子とりひろげて、丁銀こまがねかへ、小判を
大豆板に替へ、秤にひまなくかけ出し、毎日々々つもりて十年たゝぬうち
に、仲間商の上盛になつて、諸方に借帳、我がかたへは借る事なく、銀替

の手代これに腰をかゞめ機嫌をとる程になりぬ。小判市もこの男買ひ出
せば俄にあがり、賣出せば忽ち下り口になれり。おのづからこの男の口
を窺ひ、皆皆手を下げて旦那々と申しぬ。中にも先祖をさがして、「なん
ぞあれめに随ひ世を渡るも口惜しき」と我を立てける人、物の急なる時
にさし當つて迷惑し、これも亦御無心申さるゝ、金銀の威勢ぞかし。後は
大名衆の掛屋、あなたこなたの御出入もつばらにしければ、昔の事は云ひ
出す人もなく、歴々の聳となつて、家藏數をつくりて、母親の持たれし筒
落簾、藥簾子、澁團扇は貧乏まねくといへども、この家の寶物とて乾の隅に
納め置かれし。諸國をめぐりけるに、今もまだかせいで見るべき所は大
坂北濱、流れありく銀もありといへり。

昔は掛算今は當座銀

○仕出し—新案、新意匠などの意。
 ○浮世小紋—當世流行の小紋。
 ○御所の百色染—御所染は寛永の頃女院のお好みで染め出した染模様（近代世事談）。百色染とはその染色がいろ／＼變つて居るのをいふのだらう。

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて、諸事その分際よりは花麗を好み、殊に妻子の衣服、また上もなき事ども身のほど知らず、冥加恐しき。高家貴人の御衣さへ、京織羽二重の外はなかりき。殊さら黒き物に定まつての五所紋、大名より末々の萬人に、この似合はざるといふ事なし。近年小ざかしき都人の仕出し、男女の衣類品々の美をつくし、雛形に色をうつし、浮世小紋の模様、御所の百色染、解捨の洗鹿子、物好各別世界にいたり穿鑿、女の身持娘の縁組より内證うすくなりて、家業の障となる人数知らず、姪奴の平生きよらを見るは渡世の爲なり、萬民の美婦は春の花見、秋の紅葉見、婚禮振舞の外は目立つ衣裝を着重ねずともすむ事なり。ある時室町の片脇に仕立物屋の軒かをりて、橘の暖簾掛りて、當世着物の



○解捨の洗鹿子―目結した糸を解捨て、洗ひ、鹿子をほかにしたるもの。
 ○いたり穿鑿―いたりさばすべ物數寄や贅澤を凝らすこと。贅澤な物好み。
 ○淫奴―淫婦。但し今の淫婦は義異り遊女をいふ。
 ○衣掛山―洛北衣笠山の別名。
 ○紋羅―織模様のあるうすぎぬ。
 ○ひつかへし―表裏共同じ布地で仕立てたもの。
 ○衣裳法度―風俗の奢侈を禁じた法令。この種の制禁は當時屢々發布された。
 ○商人のよききぬ云々―古今集序「いはば商人のよききぬ着たらむが如し」による。
 ○吳服所―専ら大名

縫出しすぐれて都の手利ありて、絹綿爰に持ちつどひて、さながら衣掛山を我が宿に見し事ぞかし。仕付の絲火熨あつるを待ち兼ねしほとゝぎす、初空卯月一日は衣がへとて色よき裕を縫ひかけしを見るに、白き紋羅のひつかへしに、緋縮綿を中に入れて三枚がさねの裕、兩袖襟に引綿、昔はなかりし事なり。この上は萬の唐織を常住着となすべし。此時節の衣装法度、諸國諸人の身の爲、今思ひあたりて有難く覚えぬ。商人のよき衣着たるも見苦し、紬はおのれに備はりて見よげなり、武士は綺羅を本として勤むる身なれば、たとへ無僕の侍までも、風義常にして思はしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤橋、本町吳服所京の出店紋付鑑にあらはし、棚守手代それ〴〵に得意の御屋敷へ出入り、ともかせぎに屬みあひ、商賣に油斷なく、辯舌手だれ智恵才覺、算用たけて悪銀をつかまらず、利徳に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ、千里に行くも奉公、朝には星をかつき秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれども、以前とちが

高家の御用達とする大きな呉服店をいふ。
 ○京の出店―京都に本店がある江戸の支店。
 ○手だれ―腕き。
 ○わる銀―品質の悪い貨幣。
 ○生牛の目をもくじり―諺。生馬の目をぬくこともいふ。
 ○心玉をなし―心魂をうちこみ。
 ○衣配―毎年師走に春衣さして親戚知友召仕などに衣服を贈ること。
 ○小納戸方―武家の會計事務を掌る役人。
 ○不埒―賣掛の代金を支拂はぬ事。
 ○かはし銀―爲替銀。
 ○小前―小規模。
 ○昔小判―慶長年間に鑄造した小判で、最も品位の高い金貨。
 ○駿河町―日本橋。兩替店の多かつた所。

ひ今繁昌の武藏野なれども、隅から隅まで手入して、更に擱取もなかりき。御祝言又は衣配りの折からは、其役人小納戸がたの好みにて、一商して取りけるに、今時は諸方の入札すこしの利潤を見かけて喰ひ詰になりて、内證かなしく外聞ばかりの御用等調へ、剩へ大分の賣りが、り數年不埒になりて、京銀の利廻しにもあはず、かはし銀につまりて難儀、俄に取りひろげたる棚も仕舞ひがたく、自から小前になりぬ。兎角はあはぬ算用、江戸棚残つて何百貫目の損、足もとのあかいうちに本紅の色かへてと、銘々分別する時、又商の道は有る物、三井九郎右衛門といふ男、手金のひかり光むかし小判の駿河町と云ふ所に、面九間に四十間に棟高く長屋作りして、新棚を出し、萬現銀賣に掛直なしと相定め、四十餘人利發手代を追ひまはし、一人一色の役目、たとへば金欄類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、紗綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、この如く手分をして、天鷲兎一寸四方、緞子毛拔袋になるほど、緋縹子鏡印長、龍門の袖覆輪

それで「昔小判のしこつどけた。」
 ○日野—日野は上野の邑名、上州安中、松井田・富岡地方から産する絹（和漢三才圖會）。
 ○郡内—甲斐郡内地方から産する絹。
 ○龍門—織目が斜で地の厚い一種の絹織物。多く帯地として用ひられた。綾紋の訛であるといふ（俚言集覽）。
 ○袖覆輪—袖口のすり切れのため、裏地を表に返して、袖の縁を取つたもの。
 ○熨斗目—袖の下半分及び腰の部分に縞にした練貫の着物。武家の禮服として麻上下の下に着用した。
 ○手前細工人—自分の店にいつも傭つてある細工人。
 ○舞鶴の切—朝比奈

かた／＼にても、物の自由に賣渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目、いそぎの羽織などは、其使を待たせ數十人の手前細工人立ちならび、即座に仕立てこれを渡しぬ。さによつて家榮え、毎日金子百五十兩づゝならしに商賣しけるとなり。世の重寶これぞかし。此亭主を見るに、目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく、家職にかはつて賢し、大商人の手本なるべし。いろは付の引出に、唐國和朝の絹布をたゝみこみ、品々の時代絹、中將姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿彌陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲團、林和靖が括頭巾、三條小鍛冶が刀袋、何によらず無いといふ物なし、萬有帳めでたし。

世は欲の入札に仕合

用心し給へ國に賊、家に鼠、後家に入聲急ぐまじき事なり。今時の仲人

の定紋は舞鶴だからいふ。
 ○林和靖—宋の隱士。
 ○括頭巾—空林風葉（天和三年刊）「く、り頭巾風のあげたるひだもなし。如風。ひだを取らず頂を圓く括つた頭巾か。（柳亭筆記卷三參照）。
 ○三條小鍛冶—康保長元頃の名刀匠。名宗近。
 ○國に賊云々—徒然草。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり。
 ○敷銀—嫁入、養子ごの折の持參金。
 ○十分一銀—結婚、口入等の媒介料。敷銀又は給銀の一分をさる慣例であつたからいふ。
 ○公儀ぶり—社交ぶり。

頼もしづくにはあらず、其敷銀に應じて、たとへば五十貫目つけば五貫目取る事といへり。この如く十分一銀出して、娼呼ぶかたへ遣しけるは内證心もとなし。一代に一度の商事、この損取返しのならぬ事、よく／＼念を入るべし。世の風義を見るに、手前よき人表向かう見せるは稀なり。分際より萬事を花麗にするを近年の人心、よろしからず。娼取時分のむす子ある人は、まだしき屋普請部屋づくりして、諸道具の拵へ、下女を置き添へて富貴に見せかけ、娼の敷銀を望み、商の手だてにすること心根の耻しき、世の外聞ばかりに送り迎ひの駕籠、一門縁者の奢くらべ、無用の物入かさなりて、程なく穴のあく屋根をも葺かず、家の破滅とはなれり。或は又娘持ちたる親は、おのれが分限より過分に先の家を好み、身袋の外智の生れ付諸藝ありて、人の目立つ程なるを聞き合せけるに、小鼓うてば博奕うち、若い者ぶりすれば傾城ぐるひ止まず、一座の公儀ぶりよき人と人の譽むれば、野郎あそびに金銀を費しぬ。これを思ふ

○不祥—こゝば缺點があつてもそれを我慢するの意。

○ためつけ—きちんとして着込み。

○分散—破産。身代限り。

○高人—貴人。

○いつはりの世の中に—定家「いつはりのなき世なりけり神

に男よくて身過にかしこく、世間にうとからず、親に孝ありて人に憎まれず、世のためになる人聲に取りたしとて尋ねても有るべきや。よい事過ぎてかへつて難義ある物ぞかし。上つかたにさへ不祥はある物、ましてや下つかたの人、十に五つは見ゆるし、小男なりとも禿頭なりとも、商口利きて親のゆづり銀をへらさぬ人ならば縁組すべし。あれは何屋の誰殿の聲ぞと、五節供に袴肩衣ためつけ、紋付の小袖に金拵の小脇指、跡より小者若い者挿箱持ちつれたる當世男見よげにして、娘の母親喜ぶことなり。それも分散にあへば衣類及物も皆人手にわたりて、あしき男の袖を花色小紋に染めて着、あるひはまた裏付の木綿袴着たるよりは劣れり。婬も高人の家は各別、民家の女は琴のかはりに眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃えしさをばさしくべたるがよし。それぞれに似合ひたる身持するこそ見よけれ。世間躰ばかり皆いつはりの世の中に時雨降り行く奈良坂や、春日の里に曝布の買問屋して、有徳人松屋の何がしとてあり

無月誰が誠より時雨れそめけむ。
○有徳人—金もち。
○花をやつて—「花をやる」は贅澤に氣樂に暮すこと。
○天命を知る年—知命の年五十歳。(論語爲政篇)。

○野を内に見る—庭などの荒れた形容。

しが、昔は今の秋田屋樽屋にまさりて、世盛の八重櫻爰の都に花をやつて、春をゆたかに暮され、所酒のから口鱧のさしみを好み、其身榮花に明し、此家次第に衰へ、天命を知る年になりて、平生の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借金を残し、これを譲られける。人の身袋死なねば知れぬものぞかし。此後家今年三十八にして小作りなる女、殊更きめごまかにして色白く、うち見には二十七八、人の好める當流女房、跡を忘れて又の縁にもつきかねざる風俗なりしに、若年の子供をあはれみ、人の疑はぬほどに髪切つて、白粉絶えて紅花の唇色さめ、男模様の着物帯も細きを好み、才覺男にまされど、女の鍬もつかはれず、柱の根繼も手細工には及びがたく、いつとなく軒も雨にしのお草しげりて、野を内に見る鹿の聲、不斷聞くよりは悲しく、戀慕の外につれあひの事ゆかし、女ばかりも世を立てがたき事、今ぞ身に覺えける。今時の後家立つるは、其死跡に過分の金銀家督ありて、欲より女の親類異見して、いまだ若盛りの女

○家久しき若い者―
店に長く使つた手代
など。

に、無理やりに髪をきらせ、心にもそまぬ佛の道をすゝめ、命日を弔はせける。かならず浮名立ちて、家久しき若い者を旦那にする事、所々にこれを見及びける。かくあらんよりは外への縁組、人の笑ふ事にはあらず。かの松屋後家こそ世の人の鑑なれ。いろくの渡世して心任せにかなはず、昔の借銀濟むべき調法もならず、次第にまづしくなる時、一生一大事の分別出し、住宅を借かたの衆中に渡すべきと申せば、人皆あはれみて今取るべきといふ者一人もなし。借銀五貫目、此家賣れば三貫目より内なり、後家町中に歎き、此家をたのもしの入札にして賣りける。一人に銀四匁づゝ取りて、突き當りたる方へ家を渡すなれば、てんぼにして銀四匁と札を入れける程に、三千枚入れて銀十二貫目請取り、五貫目の借銀はらひ七貫目残りて、後家二度これより分限になりぬ。人に召使はれし下女、札に突き當りて四匁にて家持となれり。

○たのもし―頼母子
講。

○てんぼ―てんぼの
皮の略。まよこ出
たら目にやること。

日本永代藏 卷二

世界の借屋大將

借屋請狀之事、室町菱屋長左衛門殿借屋に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候、廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし、子細は二間口の棚借にて千貫目持、都のさたになりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴々の内藏の埃塵ぞかし。此藤市利發にして、一代のうちにかく手前富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。此男家業の外に反故の帳をくゝり置きて見世を離れず、一日筆を握り、兩替の手代通れば錢小

○向後―これから後
の意。

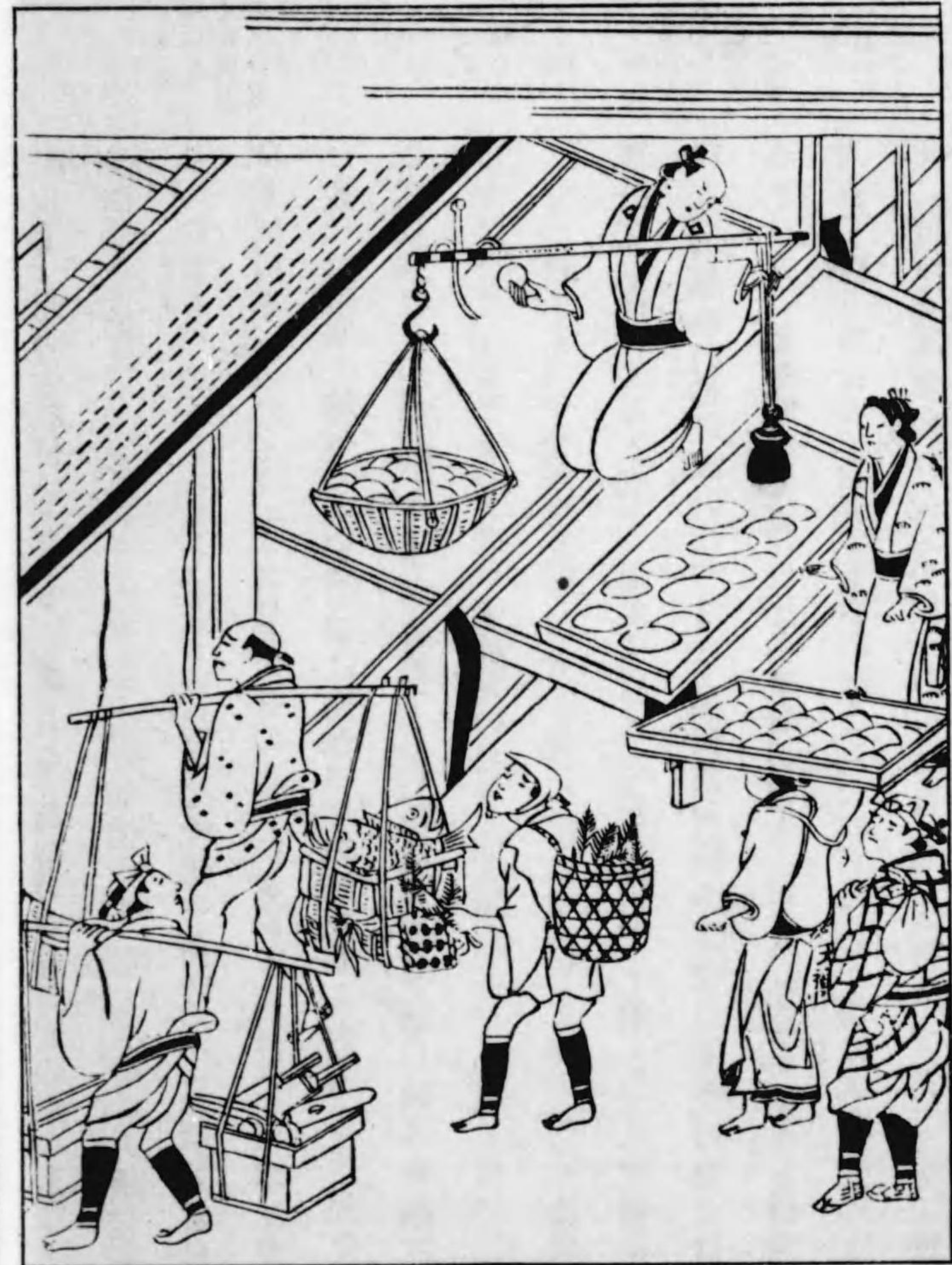
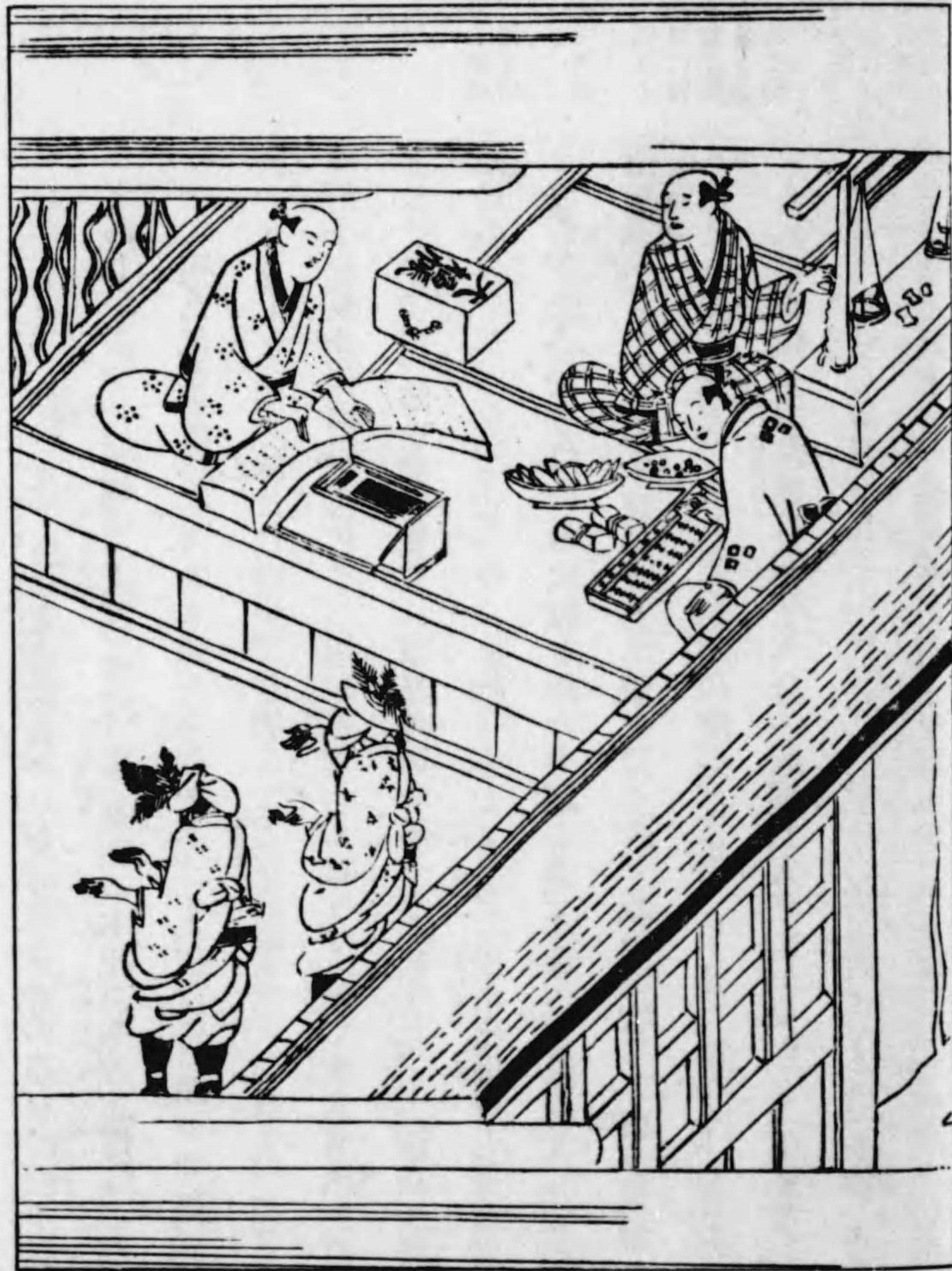
判の相場を付け置き、米問屋の賣買を聞き合せ、木藥屋吳服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、練綿鹽酒は江戸棚の狀日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。不斷の身持、肌に單縹絆大布子綿三百目入れてひとつより外に着る事なし。袖覆輪といふこと此人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、つひに大道を走りありきし事なし。一生のうちに絹物としては紬の花色、ひとつは海松茶染にせしこと若い時の無分別と、廿年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は一寸八分の巴を付けて、土用干にも疊の上に直には置かず、麻袴に鬼縷の肩衣、幾年か折目正しく取り置かれける。町並に出る葬禮には、是非なく鳥部山におくりて、人より跡に歸りざまに、六波羅の野道にて奴僕もろとも苦參を引いて、是を陰干にして腹藥なるぞと只是通らず、跪つく所で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづか様に氣を付けずしては有るべ

○海松茶染—海松のやうな黒みが、茶色で染めたもの。染めかへが出来ぬので後悔したのである。
○縷—縷。麻絲で目を荒く織つた布。鬼もちとはその質の丈夫なのをいふか。
○苦參—當藥。せんぶりともいふ。胃腸の薬に用ひる。

○利勘—得用づく。
○大佛の前—京都方廣寺前には名高い大佛餅屋があつた。

○杜斤—秤のこご。
○はや渡して歸りぬ—下に「と言へば」などの語を補つて見ればならぬ。
○かんのたつ—物を算用する時本數のかける事が有るのを欠(カン)さいふ(謔草)。「かんが立つ」は減りが見える意。
○七十五日の齡云々—謔に初物を食へば七十五日生き延びるさいふ。

からず。此男生れ付いて客きにあらず、萬事の取廻し人の鑑にもなりぬべき願ひ、かほどの身袋まで年とる宿に餅搗かず、閑しき時の人遣ひ諸道具の取置もやかまじきとて、是も利勘にて大佛の前へあつらへ、一貫目に付き何程と極めける。十二月廿八日の曙、いそぎで荷ひつれ、藤屋見世に並べ「請取り給へ」といふ、餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那はきかぬ顔して十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み幾度か斷りて、才覺らしき若い者杜斤の目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて「今の餅請取つたか」といへばはや渡して歸りぬ。「此家に奉公する程にもなき者ぞ、温もりのさめぬを請取りし事よ」と、又目を懸けしに、思ひの外に減のたつこと、手代我を折つて喰ひもせぬ餅に口をあきける。其年明けて夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣り來たるを、七十五日の齡これたのしみの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひ



○多田の銀山―攝津伊丹の北方、猪名川の上流。
 ○女寺―女の子を教へる寺子屋。
 ○ふひもせず云々―伊呂波歌の終りに京さいふのから言ひ掛けたので、かしこ娘も手紙の終りの文句「かしこ」の縁。
 ○丸曲―女重寶記、髪結ひやうの條に丸わけの名が見える。簡単に丸くわがれた

ていへるは、「今一文で盛なる時は大きなるが有り」と、心を付くる程のことあしからず。屋敷の空地に柳柵、楝、葉桃の木花、菖蒲、薏苡仁など取りませて植ゑ置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。よし垣に自然と朝顔の生えかゝりしを、同じ詠にははかなき物とて刀豆に植ゑかへける。何より我が子を見る程面白きはなし、娘おとなしくなりて、頓て煙入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡を見たらば見ぬ所をありきたがるべし、源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。此心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ふひもせず京のかしこ娘となしぬ。親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず、節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、毎日髪かしらも自ら梳きて丸曲に結ひて、身の取廻し人手にかゝらず、引きならひの眞綿も着丈の豎横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじき物なり。折ふしは正月七日の夜、近所の男子を藤市かたへ長者になるやうの指南

結ひ方と思はれる。嬉遊笑覽には勝山をいふさあるがいがが。

○皮鯨―鯨の皮を食用とする時の稱。

を頼むとて遣しける。座敷に燈かざやかせ、娘をつけ置き、露路の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此娘しほらしくかしこまり、燈心を一筋にして、嗚の聲する時元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に摺鉢の音響き渡れば、客耳を喜ばせ、是を推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや〜始めてなれば雑煮なるべし」といふ、又一人はよく考へて糞麵と落ち付きける。必ずいふ事にしてをかし。藤市出でて三人に世渡りの大事を物語りして聞かせける。一人申せしは、「今日の七草といふ謂はいかなる事ぞ」と尋ねける。「あれは神代の始末始め、増水と云ふ事を知らせ給ふ」。又一人「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ぬ。「あれは朝夕に肴を喰はずに、これを見て喰うた心せよといふ事なり」。又太箸をとる由来を問ひける。「あれは穢れし時白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり、よく〜萬事に氣をつけ給へ。さて宵から今まで各々咄し給へば、最早夜食の出べき所なり、

○荒神―三寶荒神の略。竈の神として祭る。
 ○朝夕―朝食、夕食。
 ○太箸―新年の食膳に用ひる太い箸。

出さぬが長者になる心なり。最前の摺鉢の音は、大福帳の上紙に引く糊を摺らした」といはれし。

怪我の冬神鳴

○一升入る云々「一升入る瓢は一升」などいふ語による。人の天賦才能にはそれなく定限がある。蛇の鮮珍物のたこへ。

○柴屋町—大津の遊所。

○白女—じやれた女の意で遊女のこゝろ。じやれるとはすべて粹に振舞ふのをいふ。

○一仕合—「人仕合」の書き誤りではなからうか。

○神農—漢方の醫家で醫藥の祖として祭る。
○紙袋—藥種を入れた紙袋である。
○煎じやう云々—漢方醫の藥袋には「生姜一片、煎じ様常の如し」と、その煎じ方を書いておくのが普通であつた。(生姜は配劑として常に用ひたもの)。
○朝脈—朝の内に病家を見舞ふ事。
○高觀音—大津近松寺の俗稱。

細波や近江の湖に沈めても、一升入る壺はその通りなり。大津の町に醬油屋の喜平次といふ者ありける。此所は北國の舟着、殊更東海道の繁昌、馬次替駕籠車を轟かし、人足の働き、蛇の鮮鬼の角細工、何をしたらばとて賣れまじき事にあらず。近來問屋町長者のごとく屋造り昔にかはり、二階に撥音やさしく、柴屋町より白女よび寄せ、客の遊興晝夜の限りもなく、天秤のひゞきわたり、金銀も有る所には瓦石のごとし。身袋ほど高下の有る物はなしと、喜平次荷桶おろして無常觀じける。われ商に廻れる先々にも、世は愁喜貧福のわかち有りて、さりとは思ふまゝなら

ず、賢き人は素紙子着て、愚なる人はよき衣を身に累ねし。兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其身働かずして、錢が一文天から降らず地から涌かず。正直にかまへた分にも埒は明かず、身に應じたる商賣をおろそかにせじと、一日暮を樂みける。關寺のほとりに森山玄好といへる人、かたのごとく藥師は上手殊に老功なれども、比叡の山風ほどの事にもかつて藥まはらず、門に噂の聲絶えて、内に神農の掛繪も身ぶるひして、萬の紙袋の書付はこりに埋もれ、冬も羽二重のひとへ羽織、煎じやう常に變らぬ衣裳付、醫師も傾城の身に同じ、呼ばぬ所へはゆかれず、宿に居れば外聞あしく、毎日朝脈の時分より立ち出でて、四の宮の繪馬を眺め、又は高觀音の舞臺に行きて、近江八景も朝夕見ては面白からず。身過はかけて隙の有る程氣の毒なる物はなし。人には繪馬醫者といはれて口惜しかりし。或る人取立て碁會の宿して、一番に三錢づゝ茶の代とりて、漸う死なぬを徳として世を送る人も有り。又馬屋町といふ所に阪本屋仁兵衛殿

○氣の毒—困る事。自分の心に毒さなる義で、今他に同情する意にいふのとは異なる。氣の藥の對。
 ○繪馬醫者—はやらぬ醫者が病家見舞の體に見せかけて、繪馬堂などで日を暮すことから起つた名。

○頼む島、かゝり舟、日和を見て—皆縁語。

とて以前は大商人なりしが、大分の銀をなくなし、残る物とて家藏賣りて、二十八貫目ありしを取つて退き、其後三十四五度も商賣かへられしうちに、今は残らず喰込みて何をすべきたよりもなく、昔の厚鬚もうすく、仁躰をかしげなれば、ひとつも埒のあかぬ男、貧乏神の社人になれとて一門中これを見かざる。されども母親の隠居銀十貫目有るを、ひとりの子なれば不便に思はれ、「せめては是を取らせ世に住む種ともなれかし、然れども仁兵衛に渡しては一年もあるまじ、姉聳に預けて月に八十目づゝ利銀わたし、この有切に五人口を過ぎよ」といはれし。まづ夫婦、子が一人、弟に仁三郎とて背癩病、ひとり乳のませし姥が足たゝずして、外に頼む島もなく爰にかゝり舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふものもなし。さりとては十貫目の利銀にて八十目取り、五人口は過ぎがたし。此銀朔日に請取り、五夕の家賃をのけて置き、白米のよきに味噌鹽薪をととのへ、常住香の物菜、此外にはいかなく、三月の鯛を一枚、松茸一斤二分する時も目に見るばかり、咽がかわけば白湯に焦穀、油火も真中に一つともして、これを寝ざまに消して鼠のあるゝを構はず、盆正月の着物もせず、年中始末に身をかため、慰みには觀世紙縷をして、明暮不自由なる世や、あきなひの道知るとて、百目に足らぬ銀にて七八人樂々と年こすもあり、又松本の町に後家有り、一人の娘に黄唐茶の振袖に菅笠を着せて、言葉少しなまりならひ、拔參りの者に御合力と、御伊勢様を賣りて、この十二三年も同じ偽にて世を過ぐる女もあり。又池の川の針屋ほそき事なれども、娘を京への縁組を聞き立て、銀二千枚付けるとして仲人噂が飛びまはり、「強ひたら百貫目は付けてやらるべし」と私語さし。人の内證は知れぬ物、此大津のうちにもさまぐありと、醬油賣り廻る先々にて見聞き、喜平次が宿にかへりて語りける。此女房随分かしく、子供も奇麗にそだて、人の物をも負はず、年とり物をも師走の始頃より調へ、節季に帳かたげた男の顔を見ぬを嬉しやとて、萬事を仕舞ひけるに、此幾年か錢と

○觀世紙縷—觀阿彌が式三番の翁の烏帽子の懸緒に用ひたからの名(近代世事談)ともいふが、實は觀世が陣中で縫つたのに基くといふ(男色大鑑・甲子夜話)のが正しい。
 ○松本—今大津市の東部。
 ○黄唐茶—黄枯茶。黄に淡い藍氣を帯びた色。
 ○拔參り—父兄主人などに無断で伊勢參宮をすること、江戸時代の一風習。
 ○御伊勢様を賣りて—「賣る」は口實とする意。
 ○池の川の針屋—池の側針は大津の名産。
 ○銀二千枚—判銀と

いつて楕圓形の平たい銀貨二千枚。一枚は四十三匁に當る。○若えびす―惠比須の像を版におして賣り歩いたもので、これを新年に門戸に貼つておく福を得るさいふ。
○一跡―財産若くは所有物の全部をいふ。一身代に一つの鍋釜の意。

り集めて七匁五分か八匁、七匁六分八匁八九分の残り、つひに十匁と持ちて年越えたる事なく、板木でおしたるやうな此家の若えびすと祝ひけるに、瓦落々々と空さだめなや、冬神鳴十二月廿九日の夜の明けがたに落ちかゝりて、一跡に一つの鍋釜、微塵粉灰にくだかれ、これを歎くにかひなく、片時もなければならず買ひ求めしに、其年の暮にそれ程足らずして、九匁廿四五所に買ひがゝり、やかましき事を聞きぬ。是を思ふに當所の必らず違ふものは世の中、我も神鳴の落ちぬまでは、世にこはき物はなかりしにと悔みぬ。

才覺を笠に着る大黒

○一に俵云々―大黒舞の唄の文句のもち

一に俵二階造り三階藏を見わたせば、都に大黒屋といへる分限者有りける。富貴に世をわたる事を祈り、五條の橋切石に掛けかはる時、西づめよ

○三枚目の板云々―橋詰から三枚目の板で作つた大黒を信ずる福があるさいふ。町人糞―世俗に橋の板を以て造る所の大黒は靈驗ありさいふは、橋は通じ難き所を通じて廣く萬民を渡し日夜踏む事絶えず、その板を以て造れるは是萬人にへり下り諸人の膝下にありても、終に身を立て用を達せんと思ふ心也。
○買置の有物に云々―百七十貫目を買置の商品代として帳面のおもてを繕つたのである。
○舊里を切つて―勘當して。舊里は久離さも書く。

り三枚目の板を求め、これを大黒に刻ませ、信心に徳あり次第に榮え、家名を大黒屋新兵衛と知らぬ人はなかりき。男子三人無事に撫育て、いづれもかしこく、親仁よろこび老後の樂を極め、追つけ隠居の支度をせしに、惣領の新六俄に金銀を費し、算用なしの色遊び、半年立たぬに百七十貫目入帳の内見えざりしに、逆も埒の明かざる僉議なれば、手代ひとつに心を合せ、買置の有物に勘定仕立て、七月前を漸うに濟まし、向後奢を止め給へと異見さまざま申せしに、更に聞き入れずして、其年の暮にまた二百三十貫目足らず、今は内證に尾が見えて、稻荷の宮の前にするべの人ありて身を隠しぬ。律義なる親仁腹立せられしを、色々詫びても機嫌直らず、町衆に袴着せて舊里を切つて子を一人捨てける。されば親の身としてこれ程までうとまるゝ事、大かたならぬ悪心なり。新六是非もなき仕合、はや當分の借屋にも居られぬ首尾になりて、こゝを立退き東の方へ行く道の草鞋錢とともなく、悲しさは我が身ひとり歎くに甲斐もなし。

○水風呂―普通の風呂をいふ。蒸風呂、湯風呂の對。

○藤の森―山城深草。

○大龜谷―伏見から山科へ通ずる途中。

○勸修寺―山科の西。

○豊島蕨―攝津豊島郡から産じた蕨。

○特牛―壯牛の強大なをいふ。

○音羽山―逢坂山の南つゞきの山。

頃は十二月廿八日の夜、水風呂に入りしを、「それ親仁様」といふ聲恐しく、濕身に綿入ひとつ肩にかけ、左に帯を提げて下帯には氣を付けずして逃げのび、今日旅立つにも尻からげ氣の毒、廿九日の空さだめなく、たまりもやらぬ白雪の藤の森の松にふりしこりて、菅笠なしの首筋に入相の鐘も胸にひゞきて、大龜谷勸修寺の茶屋の奇麗に湯釜の沸るを好もしく、堪へがたき寒さをしのぐ物よと思ひながら、一錢もなければ腰かけを見あはせ、大津伏見駕籠の立ちつゞき、大勢のどさくさまぎれに咽のかわきを止め、立ちざまに人の脱ぎ捨てし豊島蕨をはづし、はじめて盗心になつて行くに小野といふ里につきぬ。落葉して梢さびしき柿の木の蔭に、童子友達の集りて、「惜しや辨慶が死にける」と悔むを聞けば、特牛ほどなる黒犬なるを立寄りて是を貰ひ、かの蕨に包み音羽山の麓に行きて、野に鍬つかふ夫を招き、「これは疝の妙薬になる犬なり、三年あまり種々の薬を與へ、今黒焼になす」といへば、「さては諸人の爲ぞ」と、あたりの柴

○行くも歸るもの關―逢坂の關。蟬丸の歌によつていふ。

○つき付商―押賣する事。

○追分―東海道と伏見海道の分岐點。山科の東方。

○八丁―大津の町名。

○姥が餅―草津の名物。

○鏡山―近江の歌枕。

○櫻餅の縁。

○櫻山、老曾の森―共に近江の歌枕。

○東海寺―品川にある。

枯笹を集め、火打袋を取出し煙の種となし、里人にも僅かに取らせ、残るを肩に置きて、山家の作り言葉になりて、「狼の黒焼は」と聲の可笑げに賣りて、行くも歸るもの關越えて、知るも知らぬもにつき付商、隨分道中の人になれたる心の針屋筆屋かたられて、追分より八丁までに五百八十が物代なして、先は才覺男、この取廻しが京にて出づれば、遠い江戸迄は行かずに濟む事をと、心ながら泣いつ笑うつ瀬田の長橋、末に頼みをかけて、草津の人宿にて年を取り、姥が餅を昔の鏡山に見なし、頓て心の花も咲き出づる櫻山、色も香も有り若ざかり、かせぐに追ひつく貧乏神は、足弱き老曾の森の注連飾もおのづからに春めきて、秋見る月もたのもしく、不破の關戸の明暮、美濃路尾張を過ぎて東海道の在々廻り、都を出で、六十二日目に品川に着きぬ。これまでの口をすぎ錢二貫三百延し、賣り残せし黒焼を磯浪に沈めて、それより江戸入を急ぎしに、暮れて行く當所もなければ、東海寺門前に一夜を明しけるに、其片陰に薦かぶりて非人あまた

○筋なき乞食―諺に「乞食に筋なし」。

○南都―奈良。
○杉のかをり―酒樽は杉で製するからいふ。

○いふ程よろしからず―いふ時期が機宜を失してゐる。

○平野仲庵―京都の書家、松葉軒と號す。松花堂の門人。
○金森宗和―飛騨高山の城主、名重近。父可重と共に茶道の達人として知られて居る。明暦二年歿。

○生田與右衛門―京羽二重（貞享二年）、小鼓の條に「新在家、庄田與右衛門」と見える。當時の鼓の名家。

○伊藤源吉―伊藤仁齋のこ。

○飛鳥井殿―飛鳥井、難波の兩家は蹴鞠の師範家である。

○玄齋―碁家。本因坊一世算砂―中村道碩―寺井玄齋。

○八橋檢校―筑紫筆、三味線の名手。もと奥州の人、晩年京住。貞享二年歿。

○宗三―貞享の初め頃の人。一節切の名人で大森宗勳の流だらうさいふ（嬉遊笑覽、絲竹初心集）。

○宇治嘉太夫―宇治

臥しけるが、春も浦風荒く浪枕の騒がしく、目のあはぬ夜半まで身の上の事ども物語りするを聞くに、皆筋なき乞食、一人は大和の龍田の里の者、すこしの酒造りて六七人の世を樂々と送りしに、次第にたまりし金銀取集めて百兩になる時、所の商まだるく、萬事うち捨てこゝに下るを、一門残らず親しき友の色々申してとめける。我が無分別さかんにまかせ、吳服町の肴棚かりて、上々吉諸白の軒ならびには出しけれども、鴻の池伊丹池田南都根づよき大木の杉のかをりに及びがたく、酒元手を皆水になして、四斗樽の薦を身に被りて、古郷の龍田へ紅葉の錦は着すとも、せめて新しき木綿布子なれば歸るにと、男泣して、これに付けても仕付けたる事を止めまじき物ぞと、いふ程よろしからず、よい智恵の出時もはやおそし。又一人は泉州堺の者なりしが、萬にかしこ過ぎて藝自慢してこゝに下りぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ、茶の湯は金森宗和の流れを汲み、詩文は深草の元政に學び、連俳は西山宗因の門下となり、能は小島の

扇を請け、鼓は生田與右衛門の手筋、朝に伊藤源吉に道聞き、夕べに飛鳥井殿の御鞠の色を見、晝は玄齋の碁會にまじはり、夜は八橋檢校に弾きならひ、一節切は宗三に弟子となりて息つかひ、淨瑠璃は宇治嘉太夫節、踊は大和屋の甚兵衛に立ちならび、女郎狂ひは島原の太夫高橋にもまれ、野郎遊びは鈴木平八をこなし、噪ぎは兩色里の太鼓に本透になされ、人間のする程の事其道の名人に尋ね覚え、何をしたらばとて人の中には住むべきものをと腕だのみせしが、かゝる臻り穿鑿當分身業の用には立ちがたく、十露盤をおかず秤目知らぬ事を悔しかりぬ。武士づとめは勝手を知らず、町人奉公もおろかなりとて追ひ出され、今此身になりて思ひあたり、諸藝のかはりに身を過ぐる種を教へおかれぬ親達を恨みける。今一人は親から江戸の地生にて、通り町に大屋敷を持ちて、一年に六百兩づゝ定まつての棚賃を取りながら、始末の二字をわきまへなく、其家まで賣りはたし、身の置き所なく心の燃ゆる火宅を出て、車善七が仲間はずれの物

加賀椽。加賀節の祖。
 ○大和屋甚兵衛—京都の俳優。踊が最も得意であつた。
 ○高橋—朱雀遠目鏡(延寶九年)・朱雀信夫摺(貞享四年)等に見え、島原大坂屋太郎兵衛抱への太夫。
 ○鈴木平八—延寶頃歌舞伎の若衆。
 ○兩色里—島原と川東(祇園・宮川町等)。
 ○本透—本粹。
 ○車善七—江戸の非人頭。

○靈岩島—靈岸島。
 ○物ごころ—原本「物毎」さある。

貰ひとなりぬ。思ひくゝの身の上物語、さりとては同じ思ひにあはれ深く、新六枕に立ちより、「我等も京の者なるが舊里断られてお江戸を頼みに下りけるが、各々咄を聞くに心細し」と、恥をつゝます申せば、三人とも口を揃へて、「託言の手便はあらずや、姨様もないか、何とぞ下り給はぬがよい物を」といふ。「はや跡へ歸らぬ昔、今から先の思案なり、扱面の利發にて、かく淺ましくなり給ふは不思議なり、何事を見立て給ひても有るべき」といへば、「いかなくこの廣き御城下なれども、日本のかしこき人の寄合、錢三文あだには儲けさせず、只銀が銀をためる世の中」といへり。「久しく見及び給ふうちに、商の仕出しはなきか」と尋ねしに、「されば大分にすたり行く貝がらを拾ひて、靈岩島にして石灰を焼くか、物ごと聞き所なれば刻昆布花鯉かきて計賣か、つゞき木綿を買うて手拭の切賣か、かやうの事ならでは軽い商賣有るまじ」と云ふにぞ智恵付き、夜の明方に立ち別れけるが、三人に三百の置錢、悦ぶこと限りなく、

○下谷の天神—上野山下の五條天神。

○さ、れ—指圖され。見つもられ。

○八つ屋敷云々—始めの大黒舞の唄に應じたのである。

○家名の—原本「家な」さあるのを今改めた。
 ○唐土樂天が云々—

「御仕合見えて富士山程の金持に今の事ぞ」と申しける。それより傳馬町の太物棚にしるべ有りて尋ね行き、此度の子細をかたればあはれをかへ、「男の働くべき所は爰なり、一かせぎ」といふにぞ力を得て、思ひ入の木綿を調へ切賣の手拭、然も三月廿五日はじめて下谷の天神に行きて、手水鉢のもとにて賣出しけるに、參詣の人買うての幸ひと一日に利を得て、毎日これより仕出して、十ヶ年立たぬ内に五千兩の分限にさゝれ、一人の才覺者といはれ、新六が指圖をうけて所の人の寶とはなりける。暖簾に菅笠きたる大黒を染めければ笠大黒屋といへり。八つ屋敷方に入入り、九つ小判の買置、十で丁と治りたる御代に住める事の目出たし。

天狗は家名の風車

智惠の海廣く日本の人の働きを見て、身過にうとき唐土樂天が逃げて歸

諸曲白樂天の事をさす。
○泰地―太地。紀伊東牟婁郡。

○羽指―鯨船の長さとして指揮監督する漁夫で、銚を振ふのに最も巧みである。語義は倭訓栞に見える。

○七郷の賑ひ―諺に鯨一匹捕れば七浦の潤ひになるさいふ。

○雪の富士紅葉の高雄―鯨の皮と血との見立て。

りし事のをかし。詩をうたふは耳遠く、横手ぶしといへる小歌の出所を尋ねけるに、紀路大湊泰地といふ里の妻子のうたへり。この所は繁昌にして若松村立ちける中に鯨惠比須の宮をいはひ、鳥居に其魚の胴骨立ちしに、高さ三丈ばかりも有りぬべし。目なれずしてこれに興覺めて浦人に尋ねければ、此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人、毎年仕合男とて、昔此人をやとひて舟を仕立てけるに、或る時沖に一むら夕立雲の如く鹽吹きけるを目がけ、一の鑊を突きて風車のしるしをあげしに、又天狗とは知りぬ。諸人浪の聲をそろへ、笛太鼓鉦の拍子をとつて、大綱つて轆轤にまきて磯に引きあげけるに、そのたけ三十三尋二尺六寸、千味といへる大鯨、前代の見はじめ、七郷の賑ひ窟の煙立ちつゞき、油をしぼりて千樽の限りもなく、其身其皮緒まで捨る所なく、長者になるは是なり。切り重ねし有様は山なき浦に珍しく、雪の富士紅葉の高雄こゝにうつしぬ。いつとても捨て置く骨を源内貫ひ置きてこれをはたかせ、又油を

○根へ入りての―根柢のかたい。
○楠木分限―根がたかい富人をいふ。
○信あれば徳あり―諺。

○帳綴―正月四日又は初寅の日などに、商人が新しく大福帳を綴ちて祝ふこと。

○火が降る―貧家の暮し向のさまをいふ諺。

取りけるに、思ひの外なる徳より分限になり、末々の人の爲大分の事なるを、今まで氣の付かぬこそおろかなれ。近年工夫をして鯨網を拵へ、見付け次第に取り損する事なく、今浦々にこれを仕出しぬ。昔日は濱びさしの住ひせしが、檜木作りの長屋、二百餘人の獵師をかゝへ、舟ばかりも八十艘、何事しても頭に乗つて、今は金銀うめきて遣へど跡はへらず、根へ入りての内證吉、これを楠木分限といへり。信あれば徳ありと、佛に事へ神を祭る事おろかならず。中にも西の宮を有難く、例年正月十日には人より早く參詣でけるに、一年帳綴の酒に前後を忘れ、漸う明けがたより手船の二十挺立を押しきらせ行くに、いつの年より遅き事を何とやら心が、りに思ひしに、年男の福太夫といふ家來、子細らしき顔つきして申し出せしは、「二十年此來朝えびすに參り給ふに、當年は日の入、旦那の身袋も挑灯ほどな火が降らう」と、思ひもよらぬあだ口、いよく氣を背きて脇指に手は掛けしが、爰が思案とをさめて、「春の夜の闇を挑灯なしには歩か

○廣田の濱—攝津西宮の海岸。

○錢つなぎ—錢替に錢を貫くこと。
○兼よひあひ—兼ね合ふの訛。相方で譲り合ふこと。
○遠いから—遠方がら。

○機嫌に任せ—機會の有次第に。

○魚島時—瀬戸内海で四五月頃最も漁獲の多い時期をいふ。

れじ」と、足を延し胸をさすりて苦笑の中に、早船廣田の濱に着きて心靜に參詣せしに、松原淋しく御灯の光幽かに、皆下向ばかりにて、參るは我より外になく、心をせきて神前になれば、お神樂といへど社人は車座に居て錢つなぎかゝり、誰の彼のと兼ひあひ、舞姫の跡にて鼓ばかり打つてそこくに埒明け、鈴も遠いから頂かせて仕舞はれける。神の事ながら少し腹立ちて、大かたに廻りて又舟に取乗り、袴も脱がず浪枕して、いつとなく寝入りけるに、跡よりえびす殿烏帽子のぬげるもかまはず、玉襷して袖まくり、片足あげて岩の鼻から船に乗り移らせ給ひ、あらたなる御聲にて、「やれ〜よい事を思ひ出して居てから忘れたは。此福を何れの獵師なりとも機嫌に任せ語り與ようと思ふに、今の世の人心せはしく、我が言ふ事ばかりいうてざらん〜と立ち行けば、何を言うて聞かす間もなし、おそく参りて汝が仕合」と、耳たぶに寄せられ小語き給ふは、「魚島時に限らず、生船の鯛を何國までも無事に着けやうあり。弱りし鯛の腹に針の

立所、尾さきより三寸程前を突りし竹にて突くといなや、生きて働く鯛の療治、新しき事ではないか」と、語り給ふと夢覺めて、是は世のためしぞと御告に任せけるに、案の如く鯛を殺さず、これにまた利を得て仕合のよい時津風、眞艦に舟を乗りける。

舟人馬かた鏡屋の庭

北國の雪竿毎年一丈三尺降らぬといふ事なし。神無月の初めより山道を埋み、人馬の通ひ絶えて明の年の涅槃の頃迄は自からの精進して、鹽鯖賣の聲をも聞かず、莖桶の用意、焼火を樂み、隣向ひも音信不通になりて、半年は何もせず明暮煎じ茶にして送りぬ。諸事をかね〜貯へ置きし故に、渴命に及ばざりき。かゝる浦山へ馬の背ばかりにて荷物をとらば、萬高直にして迷惑すべし、世に船程重寶なる物はなし。爰に坂田の町に鏡

○腕家具—たゞ腕に同じ。
○内證手代—家計の方を支配する手代。

○蓮葉女—問屋の下女で諸國から集る商人等に色を賣つたもの。

○立島—堅縞。
○今織—當時京都から織出した金襴地。

○十人よれば十國の客—十人よれば十

國の者—といふ諺による。

○一分を捌く—一人前の身の處置をする。

○引貢—主人や親の金を使ひ込むこと。

○馬おり—俚言集覽「在所より出て馬より下りたる時といふ事。昔時をいふ也」但しこゝは只長途の旅を終へて到着した義。

○皺皮—藁の背のやうな皺模様のあるしほみ皮製の足袋。
○して出られし—出世せし。

屋といふ大問屋住みけるが、昔は纒なる人宿せしに、其身才覺にて近年次第に家榮え、諸國の客を引請け、北の國一番の米の買入れ、惣左衛門といふ名を知らざるはなし。表口卅間裏行六十五間を家藏に立て續け、臺所の有様目を覺ましける。米味噌出入の役人、焼木の請取、肴奉行、料理人、腕家具の部屋を預かり、菓子捌き、蕘茗の役、茶の間の役、湯殿役、又は使番の者も極め、商手代、内證手代、金銀の渡し役、入帳の付手、諸事一人に一役づゝ渡して、物の自由を調へける。亭主年中袴を着て少しも腰をのさず、内儀は軽い衣裝をして居間を離れず、朝から晩迄笑ひ顔して、中々上方の問屋とは各別、人の機嫌をとり身過を大事に掛けける。座敷數限りもなく、客一人に一間づゝ渡しける。都にて蓮葉女といふを所詞にて枚といへる女三十六七人、下に絹物上に木綿の立島を着て、大かた今織の後帶、これにも女頭有りて指圖をして、客に一人づゝ寢道具揚卸しの爲に付け置きける。十人よれば十國の客、難波津の人あれば播州網干の

人もあり、山城の伏見衆、京大津仙臺、江戸の人入交りての世間咄、いづれを聞きても皆賢く、其一分を捌き兼ねつるは一人もなし。年寄りたる手代は我が爲になる事をしておく、若い手代は惡所づかひ仕過し、兎角親方に徳をつけず。是を思ふに遠國へ商に使ひぬる手代は、律義なる者は宜しからず。何事をも内端にかまへて、人の跡につきて利を得る事かたし。又大氣にして主人に損かけぬる程の者は、よき商賣をもして取過しの引負をも埋むる事早し。この問屋に數年あまた商人形氣を見及びけるに、始めての馬おりより葛籠をあけて、都染の定紋付に道中着物を脱ぎかへ、皺皮取捨て新しき足袋草履、鬢撫でつけて咬へ楊枝、誰にか見すべき采躰をつくらひ、このあたりの名所見に行くとして、用を勤めし手代を案内につれける人、今まで幾人かして出られし例なし。親方がりの程なく親方になる人は氣の付所各別なり。こゝに着くと否や面若い者に近寄り、「いよ／＼跡月中頃の書狀の通りと相場變りたる事はないか、所々で氣色は

○紅の花、青苧―共に出羽から多く産した。
○干鮭の云々―干鮭の目は凹んで抜けないから、抜目なきにつづけた。干鮭も北國の産。

○貢錢―口錢。

變る物にて、日和見定め難く、あの山の雲たちは二百日を待たずに風とは御覽なされぬか、當年の紅の花の出来は、青苧は何程」と、入る事はかりを尋ね、干鮭の抜目のない男、間なく上方の旦那殿より身袋よしとなられける。いづれ物には仕様の有る事ぞかし。この燈屋も武藏野の如く廣う取りしめもなく、問屋長者に似て何國に内證あぶなかりしは、定まりし貢錢とるをまだるく、手前の商をして大方は仕損じ、損をかけたぬる物ぞかし。問屋一片にして客の賣物買物大事にかくれば何の氣遣ひもなし。惣じて問丸の内證、脇よりの見立と違ひ、思ひの外諸事物の入る事なり。それを實躰なる所帯になせば、必ず衰微して家久しからず、年中の足り餘り元日の五つ前ならでは知れず、常には算用のならぬ事なり。燈屋も仕合の有る時、來年中の臺所物前年の極月に調へ置き、それより年中取込み、金銀を長持に陥穴を削けてこれに打入れ、十二月十一日定まつて勘定を仕たてける。儲なる買問屋、銀を預けても夜の寝らるゝ宿なり。

日本永代藏 卷三

煎じやう常こは變る問藥

○四百四病―智度論「四百四病者、四大爲身、常相侵害、二大、百一病起、冷病、二百二、水風起故、熱病有二百二、地火起故」。

○方組―處方。調合法。
○兩―藥種の秤目で普通四匁をいふ。

四百四病は世に名醫ありて驗氣を得たること必ずなり。人は智惠才覺にもよらず貧病の苦しみ、これを直せる療治の有りやと、家有徳なるかたに尋ねければ、「今迄それを知らず、養生さかりを四十の陰まで、うかく暮されし事よ、少し見立遅けれども、いまだよい所あるは革足袋に雪踏を常住帶かるゝ心からは、分限にもなり給はん。長者丸といへる妙藥の方組傳へ申すべし。△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、この五十兩を細にして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入れ、これを朝夕呑み込むからは、長者にならざるといふ事なし。然れども

○打はやし太鼓、
鼓など打つこと。

○食酒―食事の際に
酒飲む事。

○放し目貫―刀の柄
の目釘の上を巻かぬ
もの。實戦に用ひる
刀は目釘の走らぬや
う糸革で巻くが、禮
式用の飾り刀には巻
かない。
○八より高い―月八
分より高い利子。
○斑猫、砒霜石―共
に劇毒物。

○所せきなく―所狭
くに同じ。

○取手―柔術。

○取揚婆―産婆。

○辰巳あがり―高調
子の聲をいふ。
○逆髪―髻(モトド
リ)を高く取つて、
鬢の毛が逆立つやう
になつた髪の結び方。
○番匠童―大工の徒
弟。

これに大事は毒断あり。○美食淫亂絹物を不斷着○内義を乗物全盛娘に
琴歌賀留多○男子に萬の打囃子○鞠楊弓香會連俳○座敷普請茶の湯數奇
○花見舟遊び日風呂入○夜歩行博奕基雙六○町人の居合兵法○物參詣後
生心○諸事の扱請判○新田の訴訟事金山の仲間入○食酒蕘茗好心得
なしの京のぼり○勸進相撲の銀本奉加帳の肝入○家業の外の小細工金の
放目貫○役者に見知られ揚屋に近付○八より高い借銀。先づこの通りを
斑猫砒霜石より怖しく、口にていふも扱置き、心に思ふ事もなかれしと、
少き耳に少語き給へば、これ皆金言と悦び、かの福者の教に任せ、朝暮油
断なく、所は御江戸なれば何をしたらばとて、商の相手はあり、珍しき見
立もがたと、日本橋の南詰に曙より一日立ちつくしけるに、流石諸國の
人の集り、山も更に動くが如く、京の祇園會大坂の天満祭にかはらず、毎
日の繁昌この御時、君が代の道廣く、通り町十二間の大道所せきなく、此
橋の上に馬乗一人出家一人鑑一筋、朝から晩まで絶ゆる事なく、されども

人の大事にかくる物は落さず、錢を一文いかなく、目に角立てても拾ひ
がたし。これを思ふにあだに使ふべき物にはあらず。兎角商賣に一精出
し見んと、心は働きながら手振でかゝる事は、今の世の中に取手の師匠か
取揚婆より外に銀になる物なし。種蒔かずして小判も一步も生える例な
し。何とぞ只取る事をと氣を付け心を碎く中に、屋形々々に行きて殿作
り仕舞大工、屋根葺、おのが一つれに二百三百人、辰巳あがりなる高咄、逆
鬢にして天窓つきをかしく、衣裏の汚着物袖口の切れたる羽織の上に帶
して、間棹杖に突くも有り、大かたは懷手腰の屈みし後付、其職人とは看
板なしに知れける。跡より番匠童に鉋屑木屑をかづかせけるに、可惜
檜の木の切々落ちて捨るをかまはず、これらまで大様なる事、天下の御城
下なればこそと思はれ、これに氣を付けてひとつく拾ひ行くに、駿河町
の辻より神田の筋違橋迄に、一荷にあまる程取集め、そのまゝこれを賣り
けるに二百五十文手取して、足もとにかゝる事を今まで知らぬ事の殘念

○鎌倉河岸―神田橋の少し下手。

○木山をうけ―木材を伐出す山林の買入権を得。

○飛驒袖―飛驒から産する袖。
○芝肴―江戸芝浦で捕れる小魚の總稱。
○築地の門跡―西本願寺の別院。
○壺の口を切り―茶の湯の口切りを催すこと。
○羽芝―橋場。千住の東、火葬場の有つた所。

○老の入前―老後の生活費。
○八十八の時云々―八十八歳の人に升搔を切つて貰ふ風習がある。七頁参照。

と、其後は日毎に暮を急ぎ、大工衆の歸りを見合せ、其道筋に有る程拾ひけるに、五荷よりすくなき事なし。雨の降る日は此木屑より箸を削りて、須田町瀬戸物町の青物屋におろし賣り、箸屋甚兵衛と鎌倉柯材にかくれなく、次第分限となりて、後はこの木切大木となりて、材木町に大屋敷を求め、手代ばかりを三十餘人抱へ、河村柏木伏見屋にも劣るまじき木山をうけ、心の海廣く身躰眞髓の風、帆柱の買置に願ひのまゝなる利を得て、幾程なく四十年のうちに十萬兩の内證金、これぞ若い時呑み込みし長者丸の驗なり。今は七十餘歳なれば、すこしの不養生も苦しからじと、はじめて上下共に飛驒袖に着替へ、芝肴もそれ／＼に喰ひ覺え、築地の門跡に日參して、下向に木引町の芝居を見物、夜は基友達を集め、雪のうちには壺の口を切り、水仙の初咲投入花のしほらしき事ども、いつならひ初められしも見えざりしが、銀さへあれば何事もなる事ぞかし。此人前後にかはらず一生恪くは、富士を白銀にして持ちたればとて、武藏野の土羽芝の

煙となる身を知りて、老の入前かしこく取置き、世に有る程のたのしみ暮し、八十八の時聞き傳へ升搔をきらせ、子供の名付親に頼み、人の用ひ世のさたに飽いて、此人死光さながら佛にもならるゝ心地せり。後の世も悪しからじと萬人是を羨みける。人若い時貯へして年寄りての施し肝要なり。逆も向へは持ちて行けず。なうてならぬ物は銀の世の中。

國に移して風呂釜の大臣

國中の醫師見放し、既に末期の水、今ぞ生死の海蛤貝にて入れけるに、これさへ咽を通りかね、いづれも手足を握り、「これ／＼西方極樂へ只一道に、どこへも寄らずに參る事を忘れ給ふな、親仁様」とすゝめければ、又中眼に見開き、「我は行年六十三、定命さし引なしに浮世の帳面さらりと消して、閻魔の筆に付けかふるに胸算用を極めければ、何をか思ひ殘

○地獄の馬―地獄に
は人面の馬が居るこ
いふ。
○終に行く道―伊勢
物語「終に行く道こ
はかれて聞きしがど
昨日今日とは思はざ
りしを」。

○渺々こ―渺々こし
たるの意。

す事なし。汝等過賄の種を忘れな」と、云ひおかるゝも外の事なく往生
いたされしを、各々歎きを止めて取置きける。「さても死んでは何も入ら
ぬぞ、帷子一つと錢六文を四十九日の長旅のつかひ、地獄の馬に乗り給ふ
もなるまじき」と、終に行く道を思ひやりける。其後親の家督を取りて
昔にかはらず、豊後の府内に住みて萬屋三彌とて名高し。萬事掟を守り、
三年が程は軒端の破損もそのまゝに、愁を心根にふくみ命日を弔ひ、慈悲
善根をなし、一人の母に孝を盡せば、何事も願ひに叶ふ仕合なり。親仁遺
言にすぎはひの種を大事と申し置かれしが、菜種は油のしぼり草、此種の
事なるべしと一筋に思ひ入り、いづぞは此買置するか、又はこれを作らせ
て、分限になる事を明暮工夫めぐらしける。或る時里をはなれし廣野荒
れて、古代より渺々と薄原を通りけるが、かゝる所を狼の臥所にするも國
土の費と思ひ付き、竊に菜種を蒔き散らして試みけるに、其時節に花咲き
實がのりて、おのづからさへ是なれば、新田に申し請けて十年は無年貢、

○散らぬ花―美人の
喩。

こゝを切平して、所々に幾村か人家を立てつゞけ、鋤鋤とらせ耕作させけ
るに、毎年徳を得て人しらぬ金銀溜り、それより上方への船商、あまたの
手代に捌かせ、西國に並びなき次第長者となりて、何の不足もなし。其後
母親同道して京の春に逢へり。何國も花の色香に違ひはなくて、花見る
人に違ひ有り。おもしろの女麴の都や、山も川も散らぬ花の歩行くを見
て、悲しやいかなる因果にて田舎には生れけるぞと、我が國元の事を忘れ
て、毎日の遊興に氣を亂しける。されども限り有りて歸るさに色よき妾者
十二人抱へて豊後に下り、居宅を京作りの普請美を盡して、軒の瓦に金紋
の三の字を付けならべ、四方に三階の寶藏、廣間につゞきて大書院、六十
間の廊下、東西に築山、南に洲濱を掘らせ、岩組西湖を移し、玉の蒔石、唐
木のかけ橋、亭に雪舟の卷籠、銀骨の瑠璃燈をひらかせ、瑪瑙の釘隠し、青
貝の椽鼻、眞綿入の疊に天鷲兔の縁を付け、其外の結構記し難し。雪の朝
を詠め夏の夕涼み、玄宗の花軍をやつし、扇軍とて數多の美女を左右に

○三の字を云々―三
彌の名の頭字「三」を
紋につけたのである。
○西湖―支那浙江省
風景の美を以て聞え
てゐる。

○やつし―俗に碎い
てまれること。



○眞野の長者―豊後の長者。用明天皇が皇子の時、その娘に戀して草刈に身を棄されたさいふ傳説がある。
○根帳―元帳。臺帳。

○改め―吟味し。

○千賀の浦―奥州。
○鹽釜の大臣―河原左大臣源融。
○絶えにし事―絶えなむ事とあるべき所。

分けて、其身は眞中に坐して汗しらぬ姿を、兩方より金地の風に扇ぎ立てられ、風強き方の女になびき、負けたる方の扇はもぎ取りて池に浮め、扇流しを慰みの一景、昔の眞野の長者も此奢には何としてかは及ぶまじ。内證は人しらねばとて天の咎も有るべし。一家是を悔めど更に止む事なし。年久しき手代根帳をべめ、錢藏銀藏は渡して、三間に五間の小判藏一つ、主人のまゝにもせざるうちは、其家たじろぐ事は思ひもよらざりしに、世は無常なり、此男五十八の冬のはじめ、霜の朝風といふばかりに空しくなりぬ。其後は鎗ども請取りて、心まかせの奢を極め、我が住む國の水の重きを改め、兎角都の水に増したるはあらじと、音羽の瀧の流れを毎日汲ませ、先ぐりに幾樽か遙かなる船路を取寄せ、手前に湯屋風呂屋を拵へ日毎に焼かせける。むかし千賀の浦を六條にうつされし鹽釜の大臣あり。是は都の水を桶に移されければ、風呂釜の大臣とぞ申しならはし、追付朝夕の煙絶えにし事を待ちみしに、案のごとく一年の暮に惣勘定せし

○千丈の堤も云々―韓非子喻老篇「千丈之隄、以蟻蟻之穴潰し」。

に、五千貫目餘のさし引に一匁三分、本銀に不足出来そめ、それより次第に穴明きて、千丈の堤も蟻穴よりもれる水に滅することく、其身に惡事重り一命までほろび、世に残れる物は人の寶とぞなれり。

世はぬき取の觀音の眼

○歌念佛―鎌倉時代以後に行はれた念佛の變じたもので、鉦を首にかけ俗謡風に種々の事を歌つたのである。日暮林清、同弟子林故・林達等が名高かつた(竹豐故事)。
○何れの工匠か云々―朗詠集、江澄明「山復山、何工削成青巖之形」の句による。
○物成―江戸時代田畑に課した租税をい

歌念佛の日暮しといふは、昔伏見の御上代の時、諸大名の御成門軒を並べてかゞやき、金銀珠玉を鏤め、何れの工匠か珊瑚を削りなして、紅梅の枝に春を移し、五色の浮雲をしづかに、龍はさながらに動き、虎はそのまゝ、かける勢ひ、見ぬ唐土の二十四孝を越前の殿の御門に、ありくと美形を彫物に、この清らなる事言葉にもものがたし。五十五萬石三年の物成これに入りけるとなり。かの京の鉦たゞ、孟蘭盆の頃勸進にまはりしが、朝日影御成門にうつろひしに、これに氣をとられて詠めけるに、先づ大舜

○大舜、老萊子、郭巨、いづれも廿四孝中の人物。

○願以此功德—廻向文の第一句。

○人倫絶え—人家がない意。
○朝夕—朝食と夕食。
○取葺—屋根にそぎ板を並べて小石又は

竹などで壓へたもの。輪はその小石が迂らぬやうにはめて載せるに用ひる竹の輪。
○灸箸—灸をすゐる時艾草をはさむ箸。

○六分—一分は一匁の十分一。

○片見世—同じ家で一方に別の商品を賣る店。

の耕作の所、斑牛のいかな事作り物とは思はれず、淀鳥羽に歸る車をとゞめ、己が友かと道づれを戀ひける。又老萊子が舞振、足にはたらきて音曲の有るやうに思はれ、手にふれし風車にあたり草木も靡くが如し。郭巨が掘出し金の火釜、あれにて食も焼かれまじ、茶沸かす事も勿躰なし。ほしや小判に碎き、一生樂々と世を渡るものと、それに心をとられ、これに目を喜ばし、實に秋の日のならひにてはや暮れて驚き、願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て、人申しならはして日暮坊とその末々今に名高し。其時の繁昌にかはり、屋形の跡は芋畠となり、見るに寂しき桃林に花咲く春は人も住むかと思はれける。常は晝も蝙蝠飛んで螢も出づべき風情なり。京海道は昔残りて見世の付きたる家もあり、片脇は崩れ次第に人倫絶えて、一町に三所ばかりかすかなる朝夕の煙、蚊屋なしの夏の夜、蒲團もたすの冬を漸うに送りぬ。葛籠吹矢の細工人はまだしも歴々なり、取葺の屋根の輪、扇の要刻み、灸箸を削り、荷繩なひ賣したればとて、

細長い命はつながれまじ、うき世に住むに哀れ多し。町はづれに菊屋の善藏といへる質屋ありしが、内藏さへ持たず、車のかゝりし長持ひとつ、物置にも藏にも是を頼みにして、此道を知るとて二百目に足らぬ元銀にて、先繰に利を得て、八人口を大かたにして渡世しける。此家に質置き、さりとは悲しき事かすぐなり。降りかゝる雨に濡れて古傘一本六分かりて行けば、朝食焼き捨てし跡まだ洗ひもやらぬ羽釜さげ来て、錢百文かり行くもあり、八月にも帷子着たる女房が、うす汚れたる二幅ひとつに三分かりて、身の見えすくをもかまはず行く。また八十ばかりの腰かがみ婆々、よう生きてから今年も知れぬ身をして、一日もかなしく兩手のない佛一體、肴鉢一つ持ちて来て、四十八文かきの世や。また十二三の娘六つ七つの小坊主と昇階子長きを、跡向漸うにかたげて来て、錢三十文かりて直に片見世にある黒米五合手束木買うて歸る。扱もいそがしき内證、しばし見るさへ身に應へて泪出でしに、亭主は中々心弱くてはならぬ

商賣、これ程いやな事はなし。これにも請人印判吟味かはる事なく、掟の通り大事に掛けける。千貫目借るにも判一つと、わづかなる事に念入るを思はれける。利といふ物つもれば大分なり、此菊屋四五年に銀二貫目あまり仕出し、なほひすらく人に情を知らず、足もとなる高泉和尚の寺に参らず、祭にも五香の宮に参詣せず、神佛の願ひいかなく思ひ出しもせざる男、遠い初瀬の観音を信心し、俄にあゆみを運ぶを、人の氣もあの如くかはる物かと、世間にて是沙汰ぞかし。此寺の御開帳七日を、古代より判金一枚づゝに極め置かれしを、菊屋二貫目の身袋にて三度まで開帳すれば、本願坊をはじめ一山に名を聞き傳へ、またもなき後生願ひ、古今に三度まで一人しての開帳なき事申し侍る。或る時心を付けて戸帳を見しに、かけまくも長竿にして一端つゞきの十端ならびを、用捨もなくあげおろしに、半ことの外毀ね見苦しかりき。菊屋申せしは、「我度々開帳せしに、戸帳かく切れ損じけるを、寄進に新しく掛けかへん」といふ。僧中これを喜び、都より金欄取寄せあらためける。其後菊屋申すは、「此古き戸帳を申しうけ、京の三十三所の観音へかけたき」と云へば、「安き事」とてつかはしけるを、残らず取りて歸る。此唐織申すもおろか、時代渡りの柿地の小釣、淺黄地の花兎、紺地の雲鳳、其外も模様かはりぬ。これ皆大事の茶入の袋、表具切に賣りける程に、大分の金銀とりて家榮え、五百貫目と脇から指圖違ひなし。観音信仰にはあらず、これをすべき手だて、さてもすかぬ男、一度は思ふまゝなりしが、元來筋なき分限、昔より淺ましくほろびて、後には京橋に出て下り舟にたより、請賣の焼酎諸白、あまいも辛いも人は酔はされぬ世や。

○時代渡り—古く舶來したもの。古渡り。
○小づる、花兎、雲鳳—いづれもその唐織の金欄地の模様。
○指圖—見つもり。推測。

○京橋—伏見。淀川三十石船の發着場。

高野山借錢塚の施主

物には時節、花の咲き散り人間の生死、歎くべき事にあらず。然れども命

○手池—手池の魚の略。自家の池中の魚は勝手に捕へられる意から轉じて、すべて物を自分が獨占して自由にする事にいふ。「手活の花」さいふは後の語。
○水をへらす—精力を減する意。池の縁

○九軒の二日拂—九軒は新町の揚屋町。當時毎月二日は支拂日であつた。傾城反魂香「正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂日なり」。
○道頓堀の座拂—道頓堀の芝居の棧敷代。

○すれ者—貨幣の面の磨滅したのを、人間のすれ者に言ひかけた洒落。
○三世相命鑑—人の生年月日などによつて、その運命や吉凶禍福を示した書物。

○三面の大黒—正面大黒天、右面毘沙門天、左面辨才天。
○百足—俗に百足は毘沙門天の使といふ。

○尻も結ばぬ糸—物の始末をつけず放埒な事の喩。
○針を蔵に積みてもたまらぬ—いかに物が多くあつても足らぬといふ意の諺。

は養生の一大事なるに、毒魚と知りながら鮫汁、これに風味かはらずして藻魚といふもの、何の氣遣なかりき。女房は縁組のはじめより祖母になるまで手池にせしを、無分別に水をへらしぬ。この貧取りかへす事なく一生損にたつなれば、人たしなむべきは是、長命は其心にありと、堅作り親仁若い者どもに異見を申せし。むかし難波の今橋筋にしはき名をとりて分限なる人、其身一代獨り暮して、始末からの食養生残る所なし。此人も男ざかりにうき世を何の面白い事もなく果てられ、其跡の金銀御寺へのあがり物、四十八夜を申してから役に立たぬ事なり。されども年久しく内藏に隠れ、世間見なんだ銀が人手にまはりて、九軒の二日拂ひの用にも立ち、道頓堀の座拂ひのたよりともなる、寶といふ字の消ゆる程、今は世のすれ者となりけると大笑ひせし。この恪き人は五十七癸の辰にありしが、又癸の辰の年辰の日の辰の刻に相果てられしといへば、是も不思議の宏才なる人有りて、三世相命鑑を繰りけるに、此男先生は鎌倉の

將軍頼朝公より西行法師に賜はりし鏐の猫、境遇の縁にひかれてたまたま人界に生を受け、其身は金ながらつかふ事もならず、人の子の物になりける、この筈なり。その金猫は西行しばし手にふれて、里の童子に取らせける。其猫ほしやと、見もせぬ昔の物語にも先づ搔きつき、欲をまらめて今の世の人間とはなりぬ。分限は才覺に仕合手傳はでは成りがたし。随分賢き人の貧なるに、愚なる人の富貴、此有無の二つは三面の大黒殿のままにもならず、鞍馬の多門天のをしへに任せ、百足のごとく身を動きて、其上に身袋のならぬ是非もなし。天も憐み有り、諸人も不便をかくるなり。おのれがかせぎは疎略して、居室を奇麗に作り、朝夕酒宴美食を好み、衣類腰の物を拵へ、分限に過ぎたる人附會、傾城狂ひ冶郎遊び、尻も結ばぬ糸の如く、針を蔵に積みてもたまらぬ内證、人の物を見せかけにて借り込み、是を濟ますべき分別なし。是は我と覺えての仕業、手を出して晝盗人より悪し。末々一度は倒るゝつもりに五七年も前より覺悟して、弟

○扱ひ—調停。
○年分に—借金を年賦拂にして。

○課せ方—債権者。

○つくばひ—兩手を突いて禮をするさま。

を別家に仕分けて分散にこれを通れさし、京の者は伏見に名代を替へては屋敷をもとめ置き、大坂の者は在郷の親類に田島を買はせ置きぬ。身の置き所を先へ、跡の虚殻を借錢の方へ渡して、古帳を枕にして横に寝てかゝるこそうたてけれ。町衆扱ひにかゝり、年分にその家を立てんといへば、かへつてこれを迷惑がりて、外聞は灰まで渡し、住家を立ち退き、三月の節句を心やすく桃の酒を祝へり。或る時十一貫目の分散に、ある物二貫五百目、課せ方八十六人、毎日勘定に出合ひ、中間事に始末する人なく、遣日配に温飴蕎麥切酒肴、さまざまの菓子を好み、半年あまり隙を費し、取る物はみなになして、埒の明く所は一人手前より四分五厘づゝ出でてつくばひ、町内へ禮いうて廻るもをかしかりき。昔大津にて千貫目借錢負ひければ、世になき事と申せしに、近年京大坂に三千貫目二千五百貫目の分散、いづれ遠國のちひさき所にはない事ぞかし。ならばなき大湊なればこそ借す人もあれ、かるも是程までは商人なり。手柄にも百貫目

○六分半—全財産なげ出して借金の六分半に當るこの意。

○國遠—住國から遠く立退いて出奔する事。

まではかられぬ物といへり。むかし難波江の小島に伊豆屋といへる手前者自然と倒れ、正直の首をさげて詫言して、「財寶渡して六分半あり、残る三分半はいつとても仕合次第に済ますべし」と、結構づくに立ち退きて、生國伊豆の大島に行きて親類を頼み、日夜に世をかせぎ、一たび元の如くにと思ひ込みし所存より、大分まうけて二たび大坂に上り、あつて過ぎたる分散の残り銀悉く済ましぬ。それよりは十七年過ぎぬれば、國遠して知れぬ人もあり、此分の銀は太神宮へ御初尾に上げ、又六七人も死にうせて子孫のなき人の銀は、高野山に石塔を切つて。借錢塚と名付け、其跡をとぶらひける。かゝる人は前代ためしなき事なり。

紙子身袋の破れ時

商賣左前なる吳服屋忠助とて、昔は駿河の本町に軒ならべし中にも、花菱

○左前—計畫が齟齬して運悪き事。

の大紋に家名を知らせ、住む國はおろかなく、東國北國にあまたの手代出見世をかざらせ、次第に人まし、内の賑ひ、大釜に富士の煙の絶えず、水瓶に湖水を湛へ、朱椀龍田のもみぢを散らし、白箸むさし野に立つ霜柱の如く、朝の繁昌夕に消えて、かくもまたなり果つる世のならひ、其時節とはいひながら、亭主の心がけ悪しきが故なり。此人親代にはわづかの身袋なりしが、安部川紙子に縮絢を仕出し、又はさまぐのこもん小紋を付け、此所の名物となり、諸國に賣りひろめ、はじめは一人なれば卅餘年に千貫目といはれける。其子には利發生れ劣りて、忠助家をしつて卅年あまり、勘定なしの無帳無分別、十露盤の玉にもぬけて春の柳の風に、手前亂れて日あたるの氷の如く昔の水に歸り、湯を吞むべき薪もなく、かやうに衰へる事世にためし少なし。惣じて金銀儲くるは成りがたくて減ることはやし。忠助財寶みなにして、今となつて合點の行くことおそし。是非なく淺間の宮の前なる町はづれに、かりの世のかり屋住ひもうたてく、人の情も

○安部川紙子—駿河安部川から産する紙衣。

○玉にもぬけて云々—古今集、僧正遍昭「淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」。

○さし鯖—背開きにした鹽漬の鯖二枚を、串でさし連ねて一刺さしたものを、生身魂の祝に用ひる。

○中づもり—何の根據もなく、よい加減に推量すること。

○新坂—日坂さも書

○路銀—傍訓「ロセ」原本のまゝ。

家繁昌の時にて、親類縁者の遠ざかれれば、ましてや他人は見ぬ顔も恨みがたし。これ程まで主を倒したる手代ども、家名をかへて音信不通に見捨て、盆の刺鯖正月の鏡餅も見た事なくて、悲しき月日をおくり、世上はいそがはしき師走にも隙にして、兩隣集り暮近き年せんさく、各々忠助をさして、「こなたも若いやうに見えてから、顔にふるめきたる所あり、殊更成人の子供達、大かた中づもりにも違ふまじ四十八九か」。忠助機嫌かはりて、「歴々のお目違ひ、私事當年三十九に罷り成る」といふ。いづれも合點せず、「いかにしても三十九四十にしては請取りがたし、物は有りやうに語り給へ」と、皆々問ひつめられ、「年は四十七なれども三十九がまこと」といふ。其子細を聞けば、「元日に雑煮も祝はず、初着物もせず、松飾りは思ひも寄らず、恵方が東やら、南に梅が咲くやら、曆さへもたずして、年をとらぬ年が八年有るによつて、四十七ながら三十九ぢや」と大笑ひして暮れける。「我も遠江の新坂あたりまでの路銀あれば、忽ちに分

○断り支拂つて貰ふやうにわけを言ふ意。

○無間の鐘—佐夜の中山の北光明山の鐘を撞くは、現世では福德を得るけれども、後世無間地獄に墮ちるといふ。

○蛭の地獄—俗説。

○髪水入—髪水(髪を梳るに用ひる水。多くは美男髪をつけた水である)を入れる圓く通たい器。

限になる覺有り」と慥に申せば、小家住ひの人々にはやさしく、錢一貫二百つなぎ集め合力せしを悦び、其座より直に旅立ち、定めてよろしき親類ありて歎きをいふか、又は昔の賣がけに断り申す分別か、どの道にも年とり物にはなるべしと、いづれも推量して待ちける。忠助が心ざし人の思はく違ひ、瀬にかはる大井川を渡りて、佐夜の中山に立たせ給ふ岑の觀音に參り、後世はともあれ現世を祈りて、いつの世には埋みし無間の鐘の有を尋ねて、骨髓抛つて「我一代今一度は長者になし給へ。子供が代には乞食になるとも只今助け給へ」と、心入奈落までも通じて突きにける。此鐘を突きて分限になれば、今の世の人、末の世には蛇になる事もかまふべきか。まして蛭の地獄など恐しからず。愚なる忠助無用の路錢をつかひてこゝに來にけり。先づさし當りて是程の損になりぬ。駿河に歸りて語れば、聞く人毎に「其心からあれ」と指をさしける。此所は桑の木の指物竹細工名人あり。忠助是を見習ひ髪水入花籠を作りて、十三になる娘



○美目は果報の一つ
 一謎。「美目は果報の基」もいふ。

○龐居士—唐の襄陽の人、家産を湘流に沈めその女靈照と共に竹器を市に鬻いで生活したといふ。

に府中の通り筋へ賣りに出し、其日をなりはひに送りけるに、此娘親に孝なること國中にかくれなし。然も其形うるはしく、氣を留めて見る程美女なり。或る時江戸の福人伊勢參宮の下向にこれを見そめ、親元尋ね貰ひ、ひとりある子の塚になし、其後忠助夫婦一家残らず東武へ引きこし、子にかゝる時を得て、一生樂々と送りぬ。美目は果報のひとつと、これを聞き傳へて随分女子を大事に生育てけれども、安部川の遊女は知らず、つひに好き女見た事なし。兎角美形はないものに極れり。これを思ふに唐土龐居士が娘の靈照女は悪女なるべし、美形ならばよもや籠は賣らせては置かじ。

日本永代藏 卷四

祈るしるしの神の折敷

○掛け奉る云々—昔の繪馬には「奉掛御寶前諸願成就皆令満足」など書くのが常であつた。

おほまむま 大繪馬掛け奉る御寶前、洛陽清水寺に、吳服所の何某銀百貫目を祈り、其願成就してこれに名をしるして掛けられしと語りぬ。今其家の繁昌を見くらべ、一代に金銀もたまる物ぞと室町の是沙汰なり。人皆欲の世なれば、若惠比須大黒殿毘沙門辨財天に頼みをかけ、鉦の緒に取付き、元手を願ひしに、世間かしこき時代になりて、此事かなひがたし。爰に桔梗屋とて纒なる染物屋の夫婦、渡世を大事に正直の頭をわらして、暫時も只居せず稼げども、毎年餅搗おそく、肴掛に鯛もなくて春を待つ事を悔みぬ。寶船を敷寝にして、節分大豆をも福は内にと随分うつかひもなく、貧

○頭をわらし—種々心を碎き思案して。○只居—仕事をせず徒らに過すこと。

○なほして—安置して。なほすは或る場所正しくするこゝ。

○杉焼—料理物語「鯛を厚く作り置き、だしにて味噌をこうだて鍋に入れ、煮え候時箱に入れまづ骨がしらを入れ煮る。身は入れ候てやがてよし。ごぶなをさしてよし。牡蠣蛤豆腐れぶかその外作り次第に入る也。」
○いたり料理—贅をこらした料理。

○ばんや—木綿科の常緑喬木。種子に白色の長い軟毛があり、その毛を蒲團などに入れる。

○恩賞—恩さいふだけの意。

○そののみ—下に「か」の字を脱したのであらう。
○砂糖染—未詳。砂糖を染料に加へた染め方であらう。

○奥筋—奥州地方。○鋸商—鋸の前後に動く度毎に物を挽き切るに喩へて、往反共に利を得る商賣をいふ。

より分別かはりて、世は皆富貴の神佛を祭る事人のならはせなり。我は又人の嫌へる貧乏神を祭らんと、をかしげなる藁人形を作りなして、身に澁帷子しぶかたびらを着せ、頭に紙子頭巾かみこづきんを被らせ、手に破れ團うちわをもたせ、見ぐるしき有様を松飴かきりの中になほして、元日より七種ななくさまで心に有る程のもてなし、此神うれしき餘りに其夜枕元そのよにゆるぎ出で、「我年月貧家をめぐる役にて身を隠し、様々さまざま悲しき宿の借錢しゃくせんの中に埋れ、悪わるさする子供を罵るに、貧乏神めとあて言をいはれながら、分限ぶんげんなる家に不斷可銀かける音耳ねみみにひゞき、癩しかみの蟲がおこれり、朝夕あすけの鴨鱧杉焼からなますぎやきのいたり料理が胸につかへて迷惑、我は元來其家の内儀うちぎに付いて廻る神なれば、奥の寢間に入りて重ね蒲團釣夜着つりよぎはんやの括り枕くくに身がこそばく、白無垢しろむくの寝巻ねまきに留めらるゝかをりに鼻ふさぎ、花見芝居行ゆきに天鵝菟窓てんがうまどの乗物のりものにゆられて、目舞心めまひこころになるもいやなり、夜は蠟燭ろうそくの光り金の間まに映りてうたてかりき。貧なる内の灯あかり十年も張りかへぬ行燈あんどうのうそ暗くらきこそよけれ。夜半油やはんあぶらをきらして女

房の髪かみの油あぶらを事かきにさすなど、かゝる不自由なる事を見るをすきにて年々を暮しぬ。誰とふ者もなく投げやりなげやりにせられ、我は貧よりおこり、なほなほ衰微せうびさせけるに、此春其方心そのはうしんにかけて貧乏神を祭られ、折敷せしきに居りて物喰ふ事、前代是がはじめなり。此恩賞忘れがたし、此家に傳はりし貧錢せんを二代長者の奢り人に譲り、忽ちに繁昌はんしょうさすべし。それ身過みすぎは色々あり、柳は緑花くろはなは紅くれないと、二三度四五度繰りかへし、あらたなる御靈夢みたまゆめ、さめても是を忘れず、有難く思ひ込み、我染物細工わねものこざいなるに紅くれないとの御告おつげは、正しく紅染くろぞめの事なるべし。然れども是は小紅屋こべにやといふ人、大分仕込だいぶんしこみして世の自由を足しぬ。そののみ近年砂糖染さとうぞめの仕出しだし、重い智惠者ちゑしやの京なれば、大方おほかたの事にて利を得る事思ひも寄らずと、明暮工夫あけくれくふうを仕出し、蘇枋木すぼうぎの下染ぞめ、其上を酢すにてむしかへし、本紅ほんもみの色にかはらぬ事を思ひ付き、是を秘密ひそかして染め込み、自ら歩行荷物みづかかちにもつして江戸にくんだり、本町ほんちょうの呉服棚ごふくだなに賣りては、登り商あきなひに奥筋おくの絹綿きぬわたとゝのへ、さす手引く手に油断なく、鋸商のこぎりあきなひ

にして十年たぬうちに、千貫目餘の分限とはなりぬ。此人數多の手代を置きて諸事さばかせ、その身は樂みを極め、若い時の辛勞を取返しぬ。

○益あらじ―「益あらむ」とあるべきを、かうすぐ否定形を用ひるのは、西鶴の常である。
○位牌知行―先祖の勳功によつて受ける俸祿。

○仕にせ―動詞。爲の義で、父祖の家業をうけついで行く事。轉じて長く商賣をつゞける事もいふ。

に儲けためさせ、讓狀にて家督請取り、仕にせ置かれし商賣、又は棚賃借銀の利づもりして、あたら世をうかくと送り、二十の前後より無用の竹杖置頭巾長柄の傘さしかけさせ、世上かまはず潜上男、いかにおのれが金銀つかうてすればとて天命を知らず。人は十三歳まではわきまへなく、それより廿四五までは親の指圖をうけ、其後は我と世をかせぎ、四十五迄に一生の家をかため、遊樂する事に極まれり。なんぞ若隱居とて

○下々を取合せ―召使どもに相當の配遇者なまつてやり。

○通ひ盆―給仕盆。

○もりで―原本「もり手」とあるのを今改めた。

○竈將軍―一家に威を振ふ主人をいふ。

男ざかりの勤をやめ、大勢の家來に暇を出し、外なる主取をさせ、末を頼みしかひなく難儀にあはしぬ。町人の出世は下々を取合せ、その家をまたに仕分くるこそ親方の道なれ。惣じて三人口までを身過とはいはぬなり。五人より世を渡るとはいふ事なり。下人一人も使はぬ人は世帯持とは申さぬなり。旦那といふ者もなく、朝夕も通ひ盆なしに手から手にとりて女房もりで喰ふなど、いかに腹ふくるればとて口をしき事ぞかし。同じ世過各別の違ひあり。是を思はゞ暫時も油斷する事なかれ。金銀は廻り持、念力にまかせたまるまじき物にはあらず。我夫婦より働き出し、今七十五人の竈將軍、大屋敷願ひのまゝに七つの内藏九間の座敷、萬木千草の外銀の生る名木はびこりて、所はしかも長者町に住めり。

心を疊み込む古筆屏風

○一尺八寸一未詳。風俗文選、富士賦「雲は廻船に怖れて一尺八寸の號をさどむ」。山端千句「延寶八年刊、軒の月雲に涼しくさぎ出して、一尺八寸風やふくらん」。

○唐へ投金一確かな心當もなくて投資する意の諺。○奥口せず一反物の巻口だけを良くし、奥の方の品質を悪くしたりしない。○木は木銀は銀一物には別ちある意の喩を、そのまゝに用ひたのである。

時津風靜に日和見乗り覺えて、西國の一尺八寸といへる雲行も三日前より心えて、今程舟路の慥なる事にぞ。世に舟あればこそ一日に百里を越し、十日に千里の沖を走り、萬物の自由を叶へり。されば大商人の心を渡海の舟にたとへ、我が宿の細き溝川を一足飛に寶の島へ渡りて見ずば、打出の小槌に天秤の音きく事あるべからず。一生秤の皿の中をまはり、廣き世界を知らぬ人こそ口惜しけれ。我國は扱置きて唐へ投金の太氣、先は見えぬ事ながら、唐土人は律義に言約束の違はず、絹物に奥口せず、藥種にまざれ物せず、木は木銀は銀に幾年かかはる事なし。只ひすらこきは日本、次第に針を短く摺り、織布の幅を縮め、傘にも油をひかず、錢安きを本として賣り渡すと跡をかまはず、身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし只は通さず、むかし對馬行の荳若とて、ちひさき箱入にして限り

○したし一浸じ。

○しめされ一濕され。

○人をぬく一人を欺く。

もなく時花り、大坂にて其職人に刻ませけるに、當分知れぬ事とて下つみ手抜して、然も水にしたし遣はしけるに、舟わたりの中に固まり、煙の種とはならざりき。唐人是を深く恨み、其次の年なほ又過ぎつる年の十倍もあつらへければ、欲に目のあかぬ人、我おそしと取急ぎ下しけるに、大分湊に積ませ置きて、「去年たばこは水にしめされ思はしからず、當年は湯か鹽につけて見給へ」と、皆々つき返され、自らに朽ちて磯の土とはなりぬ。是を思ふに人をぬく事は跡つゞかず、正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば佛陀も心を照す。兎角は天に任せて長崎商せし人、筑前の國博多に住みなして金屋とかやいへる人、海上の不仕合、一年に三度までの大風、年々の元手打込みて残る物とて家藏ばかり、軒の松風さびしく、召使の者も暇出して、妻子も一日暮しのかなしき、俄に何に取付く島もなく、波の音さへ恐しく、孫子に傳へて舟には乗せまじきと、住吉大明神を心誓言に立て、ある夕暮に端居して涼風を願ひ、四方山をながめしに、雲

の峯に立ちかきなり龍も登るべき風情、空定めなきは人の身體、我貧家となれば庭も茂みの落葉に埋れ、いつとなく葎の宿にして、萬の夏蟲野を内になし諸聲の哀れなり。見越の大竹より杉の梢に蜘蛛の糸筋はへて、これを渡れば嵐に切られて、中程より其身落ちて命も危ふかりしに、又も糸かけて傳へば切れ、三度まで難義にあひしに、終に四度目に渡りおほせて、間もなく蜘蛛の家を作りて、飛ぶ蚊のこれにかゝるをおのが食物にして、猶々糸くりかへすを見て、あれさへ心長く巢をかけおほせて樂むなれば、況んや人間の氣短に物事打捨つる事なかれと、これより思ひ付きて居室賣り拂ひ、其時を見合せ少しの荷物を仕入れ、昔にかはりて手代もなく、我と長崎に下り、人の寶の市にまじはり、唐織藥種鮫諸道具見しに、買へばあがりを受くるを知りながら、金銀に餘慶なく、京堺の者によい事させて、智恵才覺には天晴人には劣らねども、是非なき革袋に取集めて五十兩、この商人の數には入らず、はかどらぬ算用捨ててわざくれ心になり

○物事—原本「物毎」。

○あがりを受く—買込んだ品の値段が騰貴すること。

○餘慶—餘分。

○わざくれ心—自棄心。

○時代紙—古い時代の紙。

て、丸山の遊女町に行きて、全盛の時に見知りし太夫を、今宵ばかりを一生のをさめと、以前の便を求め、花鳥といへるに逢ひ初めしより淺からず、常よりしめやかなる枕屏風を見しに、兩面の惣金にして古筆明所もなく押しけるが、いづれかあだなるはなかりし。中にも定家の小倉色紙、名物記に入りたる外六枚、見る程時代紙正筆に疑ひなし。いかなる人かこの太夫には送られしと、欲心發りて遊興は脇になりぬ。それより明暮通ひなれて上手を仕掛けしに、いつとなく女蔭なづみて、我が黒髪も惜しからず切る程の首尾になりて、かの屏風貰ひかけしに子細もなくくれける。取りあへず暇乞なしに上方に上り、手筋を頼み大名衆へあげて、大分の金子申し請けて、又昔にかはらぬ大商人となりて、眷屬あまた召使ひ、其後長崎に行きて花鳥を請け出し、願ひの男豊前の浦里に有るなれば、其許へ金銀諸道具何に不足もなく拵へ縁に付くれば、花鳥限りもなく悦び、「この御恩は忘れじ」と申しぬ。一たびは傾城をたらすといへど、これらは

○たらすさいへぎ—原本「たらすにさいへぎ」とあるのを今改めた。

悪からぬ仕かた、その目利ぬからぬ男と世間皆これをほめける。

仕合の種を蒔錢

○蒔錢—伊勢の宮めぐりをする時、散米の代りに蒔く錢をいふ。

○鳩の目—薄い鉛製の小錢。伊勢の宮錢ともいひ社頭で散米の代りに用ひたもの。

○笙の笛、貝杓子、若和布—皆伊勢の名産。參宮土産にしたもの。

○御師—伊勢、榛名、大山などの下級の神

人は正直を本とすること、是神國のならばせなり。伊勢の社のかろくしく百二十末社紙表具の神體、思へば淺猿なる事なれども、何の偽なき心を鏡に掛けて、人も曇らず殊勝に有難く、此秋津洲に住む者歩み運びぬ。さればいづれの世より小才覺らしく、宮廻りの蒔錢に鳩の目といふをかしげなる鉛錢、百というて六十つなぎにして、扱もせちがしこき人心、豊かなる福の神是を笑ひ給ふべし。この繁昌申すもおろかなり、大々神樂の寶の山、諸願成就十二貫目、この御初尾の絶ゆる間もなく、笙の笛貝杓子して世渡る海の若和布に眞砂の數を知らず。其外末々御師手前右筆のなき人は、諸國檀那まはりのお定まりの狀一つ錢一文づゝにして、

職の稱で、専ら參詣の人々を宿させたり案内したりするのを業としてゐた。
○手前右筆—自家にかへておく書記。
○相の山—古市から内宮に至る途中の阪。そこにお杉お玉など言つて、三味線なひき參宮の道者から物を乞ふ袖乞が居た。
○あさましや云々—相の山節の文句。
○たんのする—満足する。
○正月買—遊女を正月に買ふ事。
○庭錢—五節句の紋日を約束する客から、祝儀として遣す錢。

○錢かけ松—伊勢參宮の道中豊久(トヨク)野にある。もこの松に幣帛をかけ

これを書いて年中妻子はごくむ人何百人か其限り知られず、口過さまごまに有る所ぞかし。人の氣をくみて、商の上手は此國なり。相の山の袖乞までも心長く、道者の機嫌をとりて飢ゑず寒からず、身に絹布をかざり、連引の三味線に乗せて、「あさましや心ひとつ」といふ一節、いつ聞きても替らず。此一里の間殊更に慰みにもなれり。世に錢程面白き物はなし、あまたの講參りはあれども、終に此乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき。思へばわづかの事なるに喜ばせたまき物なり。「島原正月買の庭錢はすれど、京の人すぐれて吝し」と、お白石まく親仁もいへり。或る時江戸の町人參宮せしに、乗掛さのみ飾らず、駕籠蒲團も紫の目に立たずして、供二三人召しつれ、太夫殿の案内者にまかせ、山田を出し時新錢二百貫調へ、から尻馬につけて、間の山五十町のうち蒔き散らしければ、大道は土も見えず、野も山もみな錢掛松かと思はれ、立ちかゝりて拾へば松原踊の袖にあまり、味噌漉よりこぼれて、しばしは小哥撥音の鳴をやめ



る事があつたからの
稱ださいふが、なほ
種々の俗説が傳へら
れてゐる。

○松原踊—未詳。諸
艶大鑑「只今そしる
女の足は松千代が松
原踊の足元よりは殊
にさもしけれども」
○開がりに鬼をつな
ぐ—奥底が知れず氣
味悪い意の諺。
○都傳内—江戸堺町
の都座の座元。
○札錢—芝居見世物
なごの入場料。

○便亂坊—寛文十二
年頃見世物にした時
人。總身眞黒で頭は
鋭く尖り、眼は圓く
血走り、頤は猿のや
うであつたさいふ。
○心をなし—氣をつ
けて。

○子供—歌舞妓子供
少年俳優をいふ。
○玉川千之丞—野郎
虫に京都村山座の巻
頭で「面體藝いづく
を難すべきやうなし
云々」と評してゐる。

○酉の年—天和元
年。

○佐久間の面—佐久
間町の表通り。
○舟町—日本橋の東
の河岸。毎日魚市が
立つ。
○米河岸—伊勢町の
河岸通り。
○尼棚—室町の巽角
をいふ。尼崎屋又右
衛門拜領の町屋だか
らいふ。漆器類を
商ふ店が多い。
○降照町—下駄と雪
駄を賣る店が多いか
らの稱。

て、いかなる長者に有るやらんと其名を尋ねしに、武州境町の邊に分銅屋
の何某とて人の知らぬ銀持なり。世間には空大名の見せかけ商賣多し。

此人は表向かうして内證のつよき事、闇に鬼をつなぐが如く、年越し毎
に仕合重なり、廿一より五十五歳まで卅四年に我とかせぎ出し、金七千兩
を一子に譲りぬ。そもそも商のはじめは都傳内といふ芝居の近所に、九
尺間の棚借りて錢見世を出し、諸見物の札錢を賣りけるに、銀二匁三匁の
うちにて五厘一分の掛込を見て、少しの事ながらつもれば大分の利を取
り、次第に兩替屋となりて、これ楠分限根のゆるぐ事なし。其隣にすぐれ
て利發なる男ありて、烏を鷺の見せ物を拵へ、一年は闇魔鳥とて作り物珍
しく、一日に五十貫づゝも取込み、又ある年は形のをかしげなるを便亂坊
と名付け、毎日錢の山をなして、俄に家藏求むべき人はさもなく、今に奥
山入海に心をなし、自然淺黄色なる猿もがな、もしも手足の付きたる鯛の
有る事もと、水の泡の世渡り消ゆる事やすし。惣じて役者子供の取銀は

當座の化粧ぞかし。玉川千之丞女がたして、河内通ひの狂言一番を一日
小判一兩に定め、一年三百六十兩づゝ取りぬるも、伊勢へ引込み死ぬる時
は、昔の舞臺衣装も残らず、其時の榮花を樂める外なし。金銀溜めて商人
になるべき心掛しるにもあらず、其道々を知ること人の肝心なり。過ぎ
にし酉の年諸道具までも煙となし、皆々丸裸になりしが、程なく以前の如
く酒屋は杉をしるしの門はかはらず、本町の呉服棚それぐの錦を飾り、
傳馬町の絹屋綿屋も同じ棚つき、佐久間の面は萬の紙賣、舟町の魚市、米
柯材の賣買、尼棚の塗物問屋、通り町の繁昌此御時なるべし。風絶えて雲
静に、降照町は下踏雪踏の細工人、白銀町の槌の音、昔見し人其家職かは
らず。此前日用取は其姿、山伏は其顔、腫物切疵の膏藥賣は今も同じ聲、
一人も身過をかへたるは見えず。貧者貧にて分限は分限になりける。是
程ふしぎなる事なしと、かの分銅屋見廻り置きて語りぬ。廣き町筋に只
一人其時分銀拾ひてや、手馴れし珠數屋をやめて、中橋に刀脇指の棚出

○白銀町—芝にある。
○今の劔云々—昔の劔今の菜刀といふ諺の逆用。

九二
して、一度は榮えて見えしが、程なく今の劔昔の菜刀とさびて、又もとの珠數屋を後生大事として命の珠をつながれ、人はしつけたる道を一筋に覺えてよしとぞ。

茶の十徳も一度に皆

○上米—すべて手数料として利益の幾割かをさる事。こゝは入港税ともいふべきもの。
○運上—運送上納の義。營業税ともいふべきもの。

越前の國敦賀の湊は毎日の入舟、判金一枚ならしの上米ありといへり。淀の川舟の運上にかはらず、萬事の問丸繁昌の所なり、殊更秋は立ちつゞく市の借屋、目前の京の町、男まじりの女尋常に、其形氣北國の都ぞかし。旅芝居もこゝを心がけ、巾着切も集れば、今時の人賢く印籠は始めからさげず、鼻紙袋も内懐に入れしは手の届く事にあらず。此中にても錢を一文只はとられず、盗人仲間もむつかしの世や、兎角正直の頭をさげて、當座の旦那あひしらひに物買を招き、商上手の者は世を渡りかねず。町

○荷ひ茶屋—茶の道具を荷ひ歩いて、通行の人に茶を立て、賣る者。
○えびすの朝茶—朝えびすさて朝の縁起を祝ふのである。

○ほめ草なびき—人に甚だしく褒められる意。
○乞聲—聲にさ所望されること。

○亂人—狂人。

はづれに小橋の利助とて妻子も持たず、口ひとつを其日過ぎにして才覺男、荷ひ茶屋しをらしく拵へ、其身は玉だすきをあげて、くゞり袴利根に烏帽子をかしげに被き、人より早く市町に出、えびすの朝茶といへば、商人の移り氣、咽のかわかぬ人迄も此茶を呑みて、大かた十二文づゝ投げ入れられ、日毎の仕合、程なく元手出來して葉茶見世を手廣く、其後はあまたの手代をかゝへ大問屋となれり。これまでは我が働きにて分限になり、人のほめ草なびき、歴々の乞聲にも願ひしに、一万兩よりうちにて女房をよばす、四十迄はおそからずと、當分の物入を算用して、銀の溜るを慰みに淋しく手月を送りぬ。それより道ならぬ悪心發りて、越中越後に若い者をつかはし、捨り行く茶の煎殻を買集め、京の染物に入る事と申しなし、吞茶にこれを入れませて、人知れずこれを商賣しければ、一度は利を得て家榮えしに、天是を咎め給ふにや、この利助俄に亂人となりて、我と身の事を國中に觸れ廻り、「茶殻々々」と口をたゞけば、「扱はあの分限

○乳切木―乳のたけ位の長さの棒。

○車軸―車軸の雨の意。西鶴はいつも車軸・車軸すなごさだけて、大雨・大雨が降

るの意に用ひてゐる。
○天火―雷火。

さもしき心底より」と、人の附合絶えて、薬師を呼べど行く人なく、おのづから次第弱りに湯水のかよひ絶えて、既に末期におもむき、「我今生の思ひ晴しに茶を一口」と涙をこぼす。目に見せても咽に因果の關すわりて、息も引入る時、内藏の金子取出させて跡や枕にならべ、「わが死んだらば此金銀誰が物にかなるべし、思へば惜しや悲しや」としがみ付き、涙に紅の筋引いて、顔つきはさながら角なき青鬼の如し。面影屋内を飛びめぐりて落ち入るを、押し付ければよみがへりして、銀を尋ぬること三十四五度に及べり。後には下々も愛想つきて物すごく、病家に行く人もなく、漸う臺所に大勢集り、棒乳切木を手毎に持ちて身用心をして、二三日も音のせぬ時、あまた立ちかさなりて見しに、金銀に取付き眼を開きし有様、人皆魂なかりき。そのまゝ乗物に押し込み野墓に送りける。折ふし春の日の長閑なるに、俄に黒雲立ちまよひ、車軸平地に川を流し、風枯木の枝折りて、天火光り落ちて、利助がなきがらを煙になさぬ先に取

○輕目なしに―金銀の目方を盗まないで。
○祠堂銀―菩提寺などに寄附して先祖の供養にあてる金。
○山賣―見込もない鑛山などを言葉巧みに賣りこむ事。轉じて一般に人を瞞着して物を賣りつけることにもいふ。
○つき付―つき付商ひ。押賣。

りてや行きけん、明乗物ばかり残りて眼前に火宅の苦み、各々逃げ歸りて皆菩提心にぞなりにける。其後利助が跡に遠き親類を招きこれを渡すに、聞き傳へて身をふるはかし、箸をかたし取る人なし。下人どもに配分して取れといへど、更に望みなしとて、此家にて仕着せの布子まで置いて出れば、欲でかためし人もおろかなる物ぞかし。せん方なくて諸事賣拂ひ、残らず檀那寺にあげしに、思ひの外の仕合、是を佛事にはつかはずして、京都に上り野郎遊びに打込み、又は東山の茶屋の喜びとぞなれり。利助相果て、後所々の問屋をめぐり、年々の賣掛を取るこそ不思議なれ。死に失せしとは知りながら、昔の形に恐れて輕目なしに掛けて濟ましかる。此事沙汰して利助が住める家居を、化物屋敷とて人只も貫はず、崩るるままに荒れける。これらを見るに付け、たとへば利を得るにして、工みて置き捨の質物、萬の似物、かたりに合せて敷銀の付く女房をよび、寺々の祠堂銀を借り集め分散にて濟まし、博奕仲間、山賣、人參のつき付、筒も

○犬釣—犬を良なきで捕へ、皮を剥いで賣ること。
○川流れの髪の毛取る—溺死者の毛髪を取る。髪は落さず、一般には髪を梳く時に脱け落ちた毛をいふ。これを買集めてかまじを作るのである。

たせ、犬釣、乳呑子を養ひてはし殺し、川流れの髪の毛の落取るなど、いかに身過なればとて人外なる手業すること、たま〜生を受けて世を送れるかひはなし。其身にそまりてはいかなる悪事も見えぬものなり。いと口をしき事なれば、世間にかはらぬ世を渡ること人間なれ。これを思ふに夢にして五十年の内外、何して暮せばとてなるまじき事には非ず。

伊勢海老の高買

○生あれば食あり—誑。生きてゐるからには何さか食を得る方法はあるものだけの意。

生あれば食あり、世に住むからは何事も案じたるが損なり。毎年世間がつまり、我人迷惑するといへど、それ〜の正月仕舞ひ、餅搗かぬ宿もな〜、數子買はぬ人もなし。肴掛に丹後鱒雉子を並べ、薪棚に積み重ね、庭に米俵、三月頃までの用意、拂ひは廿日切に取りかたばかりにして置きし手廻し、内證のよろしき所見えたり。又算用は合ひながら、賣掛を取集め

て、買掛を済ます程せはしき物はなし。下々の雪踏も足袋も大晦日の夜半過に調へけるは、浮世の義理にさしつまりての事ぞかし。年切の下女丁稚の仕着に、買島の綿入に白裏付けてとらせし親方は、手前のならぬ節季のしるし、春見ゆる事ぞかし。惣じて人の始末は正月の事なり。また堪忍のなる道具を改め、内普請、疊の表替、竈の上塗、萬事わつさりと氣を付け、一つ〜目にも立たずして物入年中の損なり。賢き人は大方の事は春夏日の永き時することよし。一年伊勢海老橙きれて、江戸瀬戸物町須田町麴町をさがして、諸大名の御祝義なれば、海老一疋を小判五兩、橙一つを三兩づゝに賣りける。其年は上方も稀にして、大坂などにて

も伊勢海老二匁五分、橙七八分づゝせしに、春の物とて是非調へて蓬菜を飭りける。江戸はわきて町の人心不敵なる所、後日の分別せぬぞかし。爰に攝泉境大小路の邊に樋口屋といふ人、世渡りに油断なく、一生物の費になる事せざり。されば蓬菜は神代此方のならはしなればとて、高直な

○伊勢海老橙きれて—この事胸算用巻一にも見える。
○橙—原本にはすべて「代代」とある。

○境—今の堺市。堺は攝津と和泉の境にあるからいふ。

○物事—原本には「物毎」とある。
 ○元日より云々—元日から大晦日までの費用を割當て、一度に豫算を立て、置く意。
 ○洗濯—原本「洗濁」とある。

○ほらなる—ぼろい。勞少く利の多い義。

る物を買調へて、是をかざることに何の益なし。天照太神もとがめさせ給ふまじと、伊勢海老の代に車海老、橙の替に九年母をつみて、同じ心の春の色、才覺男の仕出しと、其年は境中に伊勢海老橙一つ買はずに濟まししぬ。人の身持しとやかにして十露盤現にも忘れず、内證細かに見かけ奇麗に住みなし、物事義理を立てて随分花車なる所なり。然れども年のよる所にて、外より行きて住家はなりがたし。元日より大年迄を一度にもり付けて、其外は一錢もあだにつかはず、諸事の物年々拵へて慥なる世帯なり。男は細島の羽織一つ、卅四五年も洗濯せず、平骨の扇は幾夏か風にあはせける。女は又婢入着物そのまゝ、娘に譲り、孫子までも傳へて折目も違へず有りける。三里違うて大坂は各別、今日を暮して明日をかまはず、當座々々の榮花と極め、思ひ出なる人心、これを思ふにほらなる金銀まうくる故なり。女は猶大氣にして、盆正月衣替の外臨時に衣装を拵へ、用捨なく着ぶるし、程なく針箱のつぎ切となりて捨りし。境は始末で

○若時—「若き時」の誤であらう。

○さけしなし—じれつたい、待遠いなどの意。
 ○中戸を—中戸を隔て、の意。
 ○むつかしなから—面倒ながら。

○久三郎—下男の通名。

立つ、大坂はばつとして世を送り、所々の人の風俗をかし。それもよき人は何國にてもよし、いかに利發顔しても手前のならぬ人の云ふ事は聞く者なし、愚にても福人のする事よきに立つなれば、闇からぬ人の身を過ぎかぬる、口惜しき事ぞかし。若時心を碎き身を働き、老の樂み早く知るべしと、虚言つかぬ大黒殿の御託宣なり。さりながら今程よい事をさせぬ事はなし。金銀昔に増り次第に澤山になりけるを、どこへ取つて置いて見せぬ事ぞ、合點のゆかぬ事なり。是程人の出しかねる金銀を、分もなき事には少しも遣ふこと勿れ。溜るはとけしなく減るは早し。或る時夜更けて樋口屋の門をたゞきて酢を買ひに来る人あり、中戸を奥へは幽に聞えける。下男目を覺し「何程がの」といふ。「むつかしなから一文がの」と云ふ。空寝入してその後返事もせねば、せひなく歸りぬ。夜明けて亭主はかの男よび付けて、何の用もなきに「門口三尺堀れ」といふ、御意に任せ久三郎諸肌ぬぎて鍬を取り、堅地に氣を盡し、身汗水なしてやう／＼掘り

○好ける人—風雅を好む人。
 ○句前の時—句を附けるべき番に當つた時。
 ○一兩—藥種を量る時は四匁をいふ。

ける。其深さ三尺といふ時、「錢が有る筈、いまだ出ぬか」といふ。「小石貝殻より外に何も見えませぬ」と申す。「それ程にしても錢が一文ない事よく心得て、重ねては一文商も大事にすべし。昔連歌師の宗祇法師の此所にましく、歌道のはやりし時、貧しき木薬屋に好ける人有りて、各々を招き二階座敷にて興行せられしに、そのあるじの句前の時、胡椒を買ひにくる人あり、座中へ斷りを申して、一兩掛けて三文請取り、心靜に一句を思案して付けるを、さりとはやさしき心ざしと、宗祇殊の外に褒め給ふとなり。人は皆此ごとくの勤め誠ぞかし。我そもくは少しの物にて、一代にかく分限になること、内證の手廻し一つなり。是を聞き覺えてまねなば悪しかるまじ。たとへば借屋住の人は毎日其割にして家賃を外にのけ置くべし、借銀もこの如く利を一ヶ月も重ねぬやうに廻せば、いづれには勝手の商する物なり。借銀の濟ましやうは、儲の有る時其半分のけ置き、一貫目の内へ百目づゝにてもあぐれば、十年には濟む事なり。算用

○家賃置く程の身體—借家の擔保として家を入れればならぬ位の身體。

なし打込み置きて、帳にて合せる人は手前薄くなる物ぞかし。我が物ながら小遣帳を付くべし、買物は買ひながら違ひ有るものなり。商事せぬ日は少しにても錢銀出す事なかれ。万事を通じて取る事なかれ、當座に目に見えねばいつとなくかさなり、拂ひの時分書出に驚く事なり。又家賃置くほどの身體にならば、外聞構はず賣り捨つべし、逆も請け返したる例なく、利にたゝまれて只取らるゝやうになる物なり。まだも時所を去りて分別かふれば、戸棚の一つも残るなりはひの渡世は送るものなり。境といふ所は俄分限者稀なり、親より二代三代つゞきて、古代の買置物今に賣らずして、時節を待つは根強き所なり。朱座落着、鐵砲屋は御用人、藥屋仲間は慥に長崎へ取りやり銀餘所より借る事なし。世間うちばにかまへ、又或る時はならぬ事をもするなり。南宗寺の本堂庫裏に至るまで、一人しての建立殊勝なる事なり、心はともあれ風俗は都めきたり。此前京の北野七本松にて、觀世太夫一世代の勸進能ありしに、金子一枚宛の

○朱座—幕府の命を受けて、朱及び朱墨を製造專賣した所。慶長十四年始めて堺に設け、後江戸、長崎などにも置かれた。
 ○鐵砲屋、藥屋—共に堺に多かつた。
 ○南宗寺—堺にある。

棧敷さんじきを、京大阪に續つづきては堺へ取りける。至穿鑿いたりせんさくもこれにて知れぬる。

奈良大津伏見も人はかはらねど、此棧敷さんじき一軒も取らず。申せば安き事ながら、町人心ちやうじんに判金はんきん一枚にてかりさじき論じて、所せきなく見物すること

千秋萬歳せんしゅうばんざいの御代ごだいにぞ住みける。

○論じて—我先に借らうと争つて。
○所せきなく—所狭くに同じ。ぎつしり見物人がつまつて。

日本永代藏 卷五

廻り遠きは時計細工

唐土人たうじんは心静にして世の翺かぜもいそがず、琴基詩酒きんきししゆに暮して、秋は月見る浦に出、春は海棠の咲く山をながめ、三月の節句前せつくまへとも知らぬは、身過みすぎかまはぬ唐人の風俗、なか／＼和朝にて此まねする人愚おろかなり。年中工夫ねんぢゆうくにかゝり、晝夜ちゆうやの枕まくらにひゞく時計の細工仕掛け置きしに、其子大かたに仕繼しつぎぎ、其跡孫そのあとの手にわたりて、漸やうやう三代目に成就して、今世界の重寶ちやうぼうとはなれり。さりながら口過くちぎにはあはぬ算用ぞかし。こまかに心を付けて見しに、是も南京なんきんより渡せし菓子金餅糖こんべいたうの仕掛しかけ、色々穿鑿せんさくすれども終はつになりがたく、唐目たうめ一斤銀五匁ごぼづゝにして調へけるに、近年下直げぢきなること長崎にて

○唐目—秤目の一種で、百六十匁を一斤とするもの。

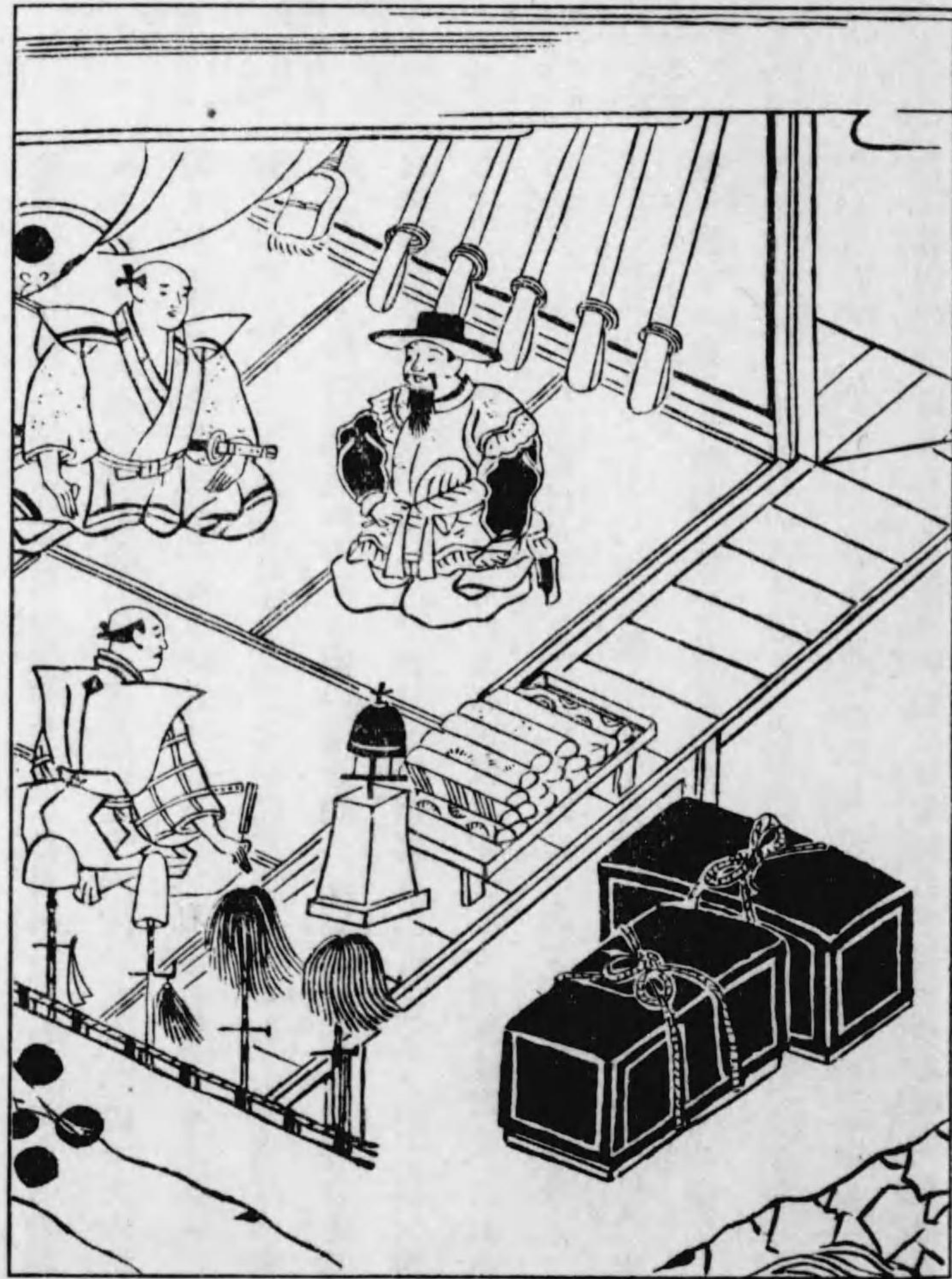
○律義なる他の國—當時唐人はすべて日本人より律義だこされて居た。

○種のなきにや—「種のなからむや」とあるべき所。

女の手業に仕出し、今は上方にも是を習ひて弘まりける。初めの程は都の菓子屋さまぐ心を碎きしに、胡麻一粒を種としてこの如くなれる事を知らざりき。是をそもく智恵付きしは、長崎にわづかなる町人、二年あまり心をつくし、唐人に尋ねしに更に覺えたる人あらずして、氣をなやませける。律義なる他の國にも、よき事は深く秘すと見えたり。胡椒粒にも沸湯をかけて渡しければ、其木つき見た人もなく、何程か蒔きても生え出る事なし。或る時高野山にて何院とかやに一度に三石蒔かれしに、此内より二本根ざし蔓りて、今世上に多し。此金餅糖も種のなきにや、胡麻より砂糖をかけて次第にまろめければ、第一胡麻の仕掛に大事あらんと思案しすまし、まづ胡麻を砂糖にて煎じ、幾日もほし乾けて後、煎鍋へ蒔きてぬくもりの行くに隨ひ、胡麻より砂糖を吹出し、自ら金餅糖となりぬ。胡麻一升を種にして、金餅糖二百斤になりける。一斤四分にて出來し物五匁に賣りける程に、年も重ねぬうちに、これにて二百貫目仕出し

○秋舟—秋長崎に入港する唐船。
○絲—特に絹絲をいふ。
○卷物—雍州府志「卷物、大凡毎年蕃舶所載來長崎港之絹棉、倭俗稱卷物、每一疋卷之謂也。」
○中ぐり—大まかに見つる事。
○雲をじるし—浮雲の如くあてにならぬものを目當にてする意。
○丸山—遊廓のある所。

ぬ。後には是を見習ひ、家毎に女の仕事となせば、此男菓子をば止めて小間物見世を出し、なほ才覺の花をかざり商賣に身をなし、其一代に千貫目持とはなりぬ。日本富貴の寶の津、秋舟入りての有様、絲卷物藥物鮫伽羅諸道具の入れ札、年々大分の物なるに是をあまさず。たとへば神鳴の犢鼻褌、鬼の角細工、何にても買取り、世界の廣き事思ひ知られぬ。國々の商人こゝに集る中に、京大坂江戸堺の利發者共、萬を中ぐりにして、雲をきるしの異國船になげ銀も捨らず、それくの道にかしこく、目利を知るにたがはず、金銀すぐれて儲くる手代は、算用は合せてつかふ事にかしこく、律義に構へて始末過ぎたる若い者は、利を得る事にうとし。兎角よい事二つはない物ぞかし。長崎に丸山といふ所なくば、上方の金銀無事に歸宅すべし。こゝ通ひの商、海上の氣遣ひの外、何時を知らぬ戀風恐ろし。雨降りて物淋しき夕暮に、人の手代あまた寄合ひ、銘々の親方分限のなりたてを語りけるに、其種なくて長者になれるはひとりもなかりき。



○厄落し—節分の夜厄年の人が轆鼻禰など自分の身につけたものを落し、又は錢を落して乞食に拾はせなごして厄を免れること。

○色烏帽子—喪服に用ひる鈍色の烏帽子。

○女房家主—主婦。イハラジは家主(イヘヌシ)がイハウジに轉じ更に訛つたものであらう。

○一代後家—一生寡婦で暮さうとする女。

○ふり廻し—金を自由に取り扱ふこと。

先づ江戸手代の咄しけるは、我等が主人は傳馬町にてわづかなる身躰なりしが、さる大名の御厄落しの金子四百三十兩拾ひしより、段々大銀持になられしとかや。又京の手代の語りけるは、私の親方は少しの人なるが、世渡りかしく、世間にせぬ事ならではと、葬禮のかし色蒸ぼし、白小袖、紋なしの袴、駕籠も拵へて俄の用を調へ、此損料銀積りて程なく東山に樂隠居を構へ、人の目に三千貫目との指圖さのみ違ふまじ。扱大坂の手代云ひけるは、拙者が旦那は人にかはり定まる女房家主なし、これ内證の物入を考へ持ち給はぬかと思へば、それには非ず、一代後家をせんさくして、彼是年ふるうちに、形は醜きをかまはず、昔長持一つの思ひ入、案の如く臍くり銀三十貫目、これより商賣替へてちひさき紙屋も生薬屋になりやすく、今二千貫目のふり廻し、其時の家の風高う吹かすも出世の町人しかられず。何れを聞きてても大分限の始、常にては及びがたし、皆一子細づ、各別のかはり有り。此所唐物の買置勝れて安き相場物の、年累ねて

○判金一枚—七兩二歩に相當する。

○復らさせ—弊化させ。

も損せぬ物、買置きて利を得ぬ事なし。或る人龍の子の二尺餘りなるを金子二十兩に求め、はや十年も過ぎて少し逞しうなりて氣遣絶えず。又火喰鳥の卵一つ判金一枚に買うて、是を復らさせ炭火を喰ふ事疑ひなし、いかに珍しきとて此買置國土の費なり。

世渡りには淀鯉のはたらき

○夜晝の流れも云々—急流は一晝夜にほぼ七十五里流れるものといふ。

○算者—數學者。

人の翺は早川の水車の如く、夜晝の流れも七十五里につもり有りて、年波のせはしき世の事、算者も是をつもれり。大節季の聞き事は秋の頃の月夜より知れたる事を、人皆さし當りて是を驚きぬ。前廉より商人は氣を働かせ、職人はそれぐの細工をとり急げども、必ず日數延びて當所の違ふものぞかし。又賣掛もたとへば十貫目の物三つ一ふんにして、三貫目と請け拂ひすれば、世間に尾を見せず、狐よりは化けすまして世を渡る

○鐘袋—入相の鐘と銀袋との言掛け。
○廣敷—臺所の上り口につづいた板の間。

○胸が踊りて—踊るは盆の縁。盆踊唄の囃子「松坂越えてサッサ」の松坂を、京都の町名松原にかへてつづけた文章。
○山草—齒朶の異名。

事、人の才覺なり。商あきなひ功者なる人のいへり、掛銀かけぎんは取りよきから集むる事なり。いつにても手の物にして残し置き、思ひの外の隙ひま入り、あるひは留主とてたびく足運びぬ。惣じて掛乞かけごひの無常を觀する事なかれ、入相の鐘袋かねぶくろに心玉こゝろたまを籠めて、言葉つき奇麗に顔愧おそろしく作りて、廣敷ひろしきの中程に腰掛けて、たばこ吸はず茶吞まず、内義笑顏うちぎがほして咄し仕掛くるにも聞かぬふりして、肴掛さかなかけの鱒ます子こに目を付けて、「當年おとしまひの御仕舞おしまひは庭に三石、地米ちまいと見えまして。いつもより早もちつきき餅搗もちつき、鍋の蓋までも新しくなり、お娘子の正月小袖、紫の飛鹿さびがのこ子こに紅裏もみうち、是でこそ春なれ。私等わたくしらは盆のごとく胸が踊りて、松原越えて門飴かどかきりの山草やまくさ一葉はかすのこ、數子かずのこ一つ今に調へもせず、悴せがれ子が去年の手織ありじま島の袷あじに、せめて木綿きわた入れてと思ふさへなりがたきに、こなたを見る時は長者ちやうじやうというて外になし。このやうなるお仕舞しまひ江戸には知らず、京にもあるまじ」と、家の宜しき事ばかり申してむつかしうかゝれば、外をさし置きそれから済ます物ぞかし。折ふしの寒きとて掛乞かけふ宿にて酒を吞

○人奉公して云々—人に利益を得させるやうに奉公して、自分の勝手向は困るやうな勘定になる。

○輕目—貨幣の目方を盗むこと。

み、湯漬飯ゆづけめしを食ふこと必ずせぬ事といへり。又借錢しやくせんの淵を渡りつけて、幾度たたびか年の瀬越せごしをしたる人のいへり。世の習ひにて買掛かひがかりする事互がてんに合點あてんづくなり、たとへば新米一石六十目の相場の時も、六十五匁にしてしかも下米まをわたしぬ。油も一升二匁の折から二匁三分に仕掛けられ、此外味噌酒たき薪たき萬まをかくの如くなれば、年中人奉公ねんぢゆうひやうこうして勝手迷惑するにつもりぬ。拂はらひ方は少しの物から済まし、大分たいぶんの所を明け置くものなり。手前に銀子ぎんのたまり有りととも、大年おほとしの夜に入りて渡すべし。大方かた退屈して松の内といふ斷ことわりりを聞き届け、錢かねの仕しかけ銀かろりの輕目かろりもかまはず、拾あうた物の心地して、手に握りながら門かどに走り出で、扱あもうたてや此家へ重ねて商あひいたさじと心誓こゝろせいもん文立ぶんたてて、も、商賣しょうばいのならひとて年明としあけくれば又忘れた昔になりぬ。是本意にはあらず、内證うちしんのならぬより思ひの外なる惡心あくしんも起りし。爰こゝに山城の淀の里に山崎屋とて、身業みずまの種は親代おやだいからの油屋あぶらやなりしが、家職しよくの槌おの音を嫌きらひ、無用の奇麗好うつくしき、此家の福の神は塵ちりにまじはり給ひし

○寶寺—山崎にある
補陀落山寶積寺の通
稱。
○手と身になりて—
身外無一物になつて—
○彌陀次郎—京童卷
四宇治の條に「木幡
を過ぎ五ヶの庄の阿
彌陀を拜み奉る。是
は次郎といふもの、
網にあがらせ給へる
故、世の人みだ次郎
といふ也」。
○遅牛も云々—「遅
牛も遅早牛も遅」さ
いふ諺による。

○新在家衆—新在家
は京都烏丸通と東洞
院通の間、出水通と
長者町通の間をいふ
(京羽一重)。その中
ノ町には里村家をは
じめ連歌師などが居
り、一般にこの邊に
住む人々の風俗は上
品であつた。
○油屋絹—未詳。
○諸織—諸絲(兩筋
より合せた絲)で織
つた織物。
○けんぼう染—憲法
染。吉岡染ともい
ふ。明暦萬治の頃四
條西洞院の吉岡憲房
が創めた黒茶色の染
物。一説には吉岡氏
の染め方通りきまり
切つて染めたから憲
法染といふ(雍州
府志)。
○昔の劍—諺「昔の
劍今の菜刀」。

に、竹箒に恐れて出でさせ給ふにや、次第に淋しくなりて、毎年銀高へり
て自ら槌碓の音も聞かぬやうに、いつとなくともし油も絶えぬ。俄
に昔の寶寺を祈る甲斐なく、手と身になりての思案、何とも埒の明かぬ世
渡り、小橋の下に魚はあれど、網なうて淵を覗き、彌陀次郎が跡たれて發
心もならざれば、兎角身を捨て、かせがば、遅牛も淀車の廻り合せよく
は、一度家の榮え行く事も、商の道替へて鯉鮒荷うて京通ひ、淀の川魚
名物とて、殊更に賣拂ひ、人も面を見知りて、淀の釋迦次郎と異名を呼び
て、用ある方には此者を待つ程になりてから、淀の里より手振で行きて、丹
波近江より都に運ぶ鯉鮒請けて、一日に限りもなく賣りける程に、風味各
別と云ひなして、同じ鯉鮒を外の者のは買はざりき。商人は只しにせが
大事ぞかし。其後さしみを作りて盛賣に五分三分にても自由調へけれ
ば、京は臺所の事せちがしこく、人振舞にもこれにて埒を明け、次第に時
花れば其程なく分限になりて、金銀蒔き散らして兩替の見世を出し、あま

たの手代を抱へ、此家繁昌の時は昔の鯉賣の事は云ひ出する人もなく、風
俗も自ら都めきて新在家衆の衣裝をうつし、油屋絹の諸織をけんぼう
染の紋付、袖口薄綿にして三つ重ね、小袷高からず裾長く、同じ羽織ゆた
かに見えて、歴々とはいはで知れける。たとへば公家のおとし子大名の
筋目あればとて、昔の劍の賣喰、運は天に具足は質屋にありては、時の役
には立ちがたし。只智慧才覺といふも世渡りの外はなし。一年の暮程世
上の極とて愧しき物はなし、それを油断して十二月中頃過よりの分別は
おそし。何となき宮寺さへ御祈念の守札、年玉扇の用意するなど、まして
工商の家に十三月なる顔つきかまへ、貧乏花盛り待つは今の事なるべし。
大かたなる年を越してこそ春になりての心もよけれ、薬代は覺えながら
やらずに、小者が布子に手染の薄色仕立て、着せる程せはしき内證、我が
世なればとて面白からず。京の町も様々の年の暮、初春の歌案じけるな
ど、流石王城の風俗なれども、かく豊なる人は稀にして、悲しき渡世の人

○運は天に―諺「運は天にあり」。
○十三月―悠長なこ

○物前―節季前。
○下機―和漢三才圖會「木綿機、有上機下機之二品而上機和州多用織麻布及紬下機常織木綿」。

○禁中熊手―灰ならしの一名か。

○公事―たくみ―訴訟事件にしようご工む事。こは理窟をこねて言ひが、りなごしようごする事。

數多なり。鯉やが手代自分商に少しの米見世出して、わづか五貫目の元銀、大豆粉に砕きたるやうに方々に賣掛け、これを取集めけるに、小家がちなる世帯を見れば無常の發りぬ。はや極月も廿八日、しかも小の晦日なるに、今日と明日との物前、さもいそがはしき片手に、下機に木綿一端、これを織下して正月住舞の百品にも心當て、又或る家に行けば古鐵買を呼び入れ、鏡臺の金物、銅網の鼠取り、禁中熊手一本、爪折の五徳一つ、取集めてから錢百三十に直段付け捨て、行く。夫婦人の聞くととも知らず、「借錢の分は始めから濟ます心入にあらず、錢五百天から降れがな、ゆるりと取る年男」と、哀れやいたたいけ頃の娘、「今いくつ寝てから正月ぢや」と云ふを、「米の有る時が正月よ」と、白眼む形の怖しく、門口より掛も乞はずに立ち歸り、又或る家に入れば公事たくみなる女、薄き唇を動かして、「こなたから米の銀さいくのお使、借るも世の習ひなるに、さてもむごい言葉づかひ、首引抜いても今取ると云はれしを聞かれましたから、亭

○千種―千草色。薄い萌黄色。
○かみのかたき―かみは頭の意。息災健康なことを「かみがかたい」といふ。こは只丈夫なの意。

○つきの悪き銀―品質の劣つた銀貨。

○薄雪―寛永頃の小説薄雪物語。

主は震ひつかれました、今に枕あがりませぬ。四匁五分で首を抜かるゝは口惜しき事」と、大聲あげて泣けば、とやかく論もむつかしければ、「随分養生めされ、命があらば春のせんさく」と云ひ捨てにして歸り、又さる家に行けば、淺黄の上を千種に色あげて、袖下につぎのあたりし布子に御三寸進じて悦び、「是はかみのかたき着物かな、此十七八年も冬中は人の藏に有つて、こゝへ戻りて正月をする事めでたい」と云ふ所へ行きかゝりて、「算用しませう」といへば、拾八匁二分の書出しに一匁六分數一つと書付して、然もつきの悪き銀を、「こなたへ掛けて置きました。いやならいやになされ」と、猫の蚤見てあしらひもせねば、是もせひなく取らぬが損と歸る。それより又或る方に行くに、男は宿を出て、十人並なる女、髪かしら常よりは見よげに、帯も不斷を仕替へ、薄雪、伊勢物語の草紙取廣げ、掛乞あまたと打ちまじり、春はどの芝居はやるべしと、扱もゆるりとしたる有様、「これの主は何かたへ」と問へば、「年寄女房が氣に入らぬと

○請取手—離縁された後の引取人。

て置去おきざりにして行かれました」と、別べつして笑ひかゝる。「暇取いとまらしやれ、請取手うけは我の人の」とじやれて、掛帳かけちやうは心に消して歸る。人程賢おろかくて愚おろかなる者はなし。借錢の宿にも様々の仕掛者しかけものあり、油断する事なかれ。たとへば萬の賣掛うりかけするとも、其人と次第ねんごうに念比ねんごうにならぬやうに、常住こころいれあきの心入商人の秘密なり。親しくなりてよき事もあれどそれは稀なり。敷銀しきがねにして物を賣るとも、前より殘銀かさむ時は、見切つて是を捨つべし、それにひかれて後は大分の損をする事、皆人先さきの見えぬ欲からなり。此米屋も當座銀たうざぎんにして俵たはらなしに、はかり賣うりの四五年は仕合のかさなりけるに、或る時西陣ざんの絹織屋きぬおりやへ俵米賣たはらこめ初め、置替おきかへの約束も年々かさみて、算用は合ひながらその銀かねふさがりて手廻かねしなり難く、後は碓のちの音絶おととぎえて、釣掛升つるかけますのみ残り。掛商かけあきなひには分別あるべし。

○當座銀—現金で請け拂ひする事。

○弦掛枘—枘の隅に斜に鐵準を渡したものの。

大豆一粒の光り堂

○大和機—上機に同じ。前出「下機」の頭註参照。
○角屋—主屋から突出して作り添へた家。
○年越—節分。

○煎豆に花—諺。

○手一合—兩手で掬った分量はほゞ一合あるといふ。

鑛あらがねの土割り手づからに畑うち、女あさねは麻布を織り延べ、足引の大和織やまとはたを立て、東あかりの朝日の里に、川ばたの九介とて小百姓ありしが、牛さへ持たずして角屋つのやぶ作りの淺ましく住みなし、幾秋か一石二斗の御年貢をはかり、五十餘まで同じ顔にて年越としこしの夜に入りて、ちひさき窓も世間並せけんならみに鯛かいらひらきの首格かしらひらきをさして、目に見えぬ鬼に恐れて、心祝ひの豆うちはやしける。夜明けて是を拾ひ集め、其中の一粒りゅうを野に埋みて、もし煎豆いりまめに花の咲く事もやと待ちしに、物は諍あらしふまじき事ぞかし、其夏あをく青々と枝茂りて、秋は自ら實入りて、手一合にあまるを溝川に蒔き捨て、毎年まいねんかり時を忘れず、次第にかさみて、十年も過ぎて八十八石になりぬ。是にて大きなる灯籠を作らせ、初瀬はせ海道かいだうの闇やみを照し、今に豆灯籠まのとうろうとて光を殘せり。諸事の物つもれば大願も成就するなり。此九助此心から次第に家榮たはたえ田島たはたを買求め、程

○細ざらへ—又コマザラヒ。熊手に似て土を掻きさらへる農具。
 ○唐箕—穀物の實を糝又は粗穀を吹分けろ器械。
 ○千石通—篋(トホシ)の一種。二つの大箱から成り、上箱に搗いた米を入れる。その下に傾斜して設けた篩によつて糠は中に残り米は外に走り出るやうに仕かけたもの。
 ○後家倒し—後家の手内職を奪ふの意。
 ○唐弓—練綿の氈毛を弾いて打綿とする具。明曆年中支那から傳つたといふ。

なく大百姓となれり。折ふしの作り物に肥料を仕掛け、間の草取水を掻きければ、自ら稲に實のりの房振よく、木綿に蝶の數見えて、人より徳を取ること、是天性にはあらず、朝暮油断なく鋤鍬の禿る程はたらくが故ぞかし。萬に工夫の深き男にて、世の重寶を仕出しける。鋏の爪を並べ細攫といふ物を拵へ、土を碎くに是程人の助けになる物はなし。此外唐箕、千石通、麥こく手業もとけしなかりしに、鉾竹を並べ是を後家倒しと名付け、古代は二人して穂先を扱きけるに、力も入れずしてしかも一人して、手廻りよく是をはじめける。其後女の綿仕事まだるく、殊更打綿の弓、やうく一日に五斤ならではこなれぬ事を思ひめぐらし、もろこし人の仕事を尋ね、唐弓といふ物はじめて作り出し、世の人に秘して横槌にして打ちける程に、一日に三貫目づゝ雪山のごとく練綿を買込み、あまたの人を抱へ、打綿幾丸か江戸に廻し、四五年のうち大分限になりて、大和に隠れなき綿商人となり、平野村大坂の京橋富田屋錢屋天王寺屋、いづれ

○それ百ヶ日—「それ」の下に「より」を脱したのであらう。
 ○在原寺—大和丹波市。在原業平の住んでゐた地に建立したからいふ。
 ○算崩し—算木崩しの意で、三筋づゝ縦横に石疊にした模様。
 ○桑の木—桑は中風の薬といふので老人の杖などに用ひる。
 ○生平—経緯共に苧麻(カラムシ)又は麻糸で織つた布。近江高宮地方から多く産する。
 ○立島—堅縞。

も綿問屋に毎日何百貫目といふ限りもなく、攝河兩國の木綿買取り、秋冬少しの間に毎年利を得て、三十年餘りに千貫目の書置して、其身一代は樂といふ事もなく、子孫の爲によき事をして、八十八にて空しくなりぬ。死光りのして折しも十月十五日、淨土は願ひのまゝに野邊の煙になして、それ百ヶ日も過ぎ行けば、遺言の通りに在原寺の法師を證據に、御非時の上にて譲り狀の箱を開きて見しに、有銀一千七百貫目一子九之助に相渡し、猶家屋敷諸道具の義は書き載するに及ばず。扱親類の方へそれぐの所務分の書付讀みしに、三輪の里の姨の方へ手織の算崩しの木綿拾ひとつ、紬地の首卷、桑の木の撞木杖一本。吉野の下市に住みし弟の方へ三星小紋の布子に緞の肩衣、是を送るべし。岡寺の妹に花色の布子に黒き半襟のかりしを一つ、生平の帷子添へて取らすべし。同じく姪に病中下に敷きたる立島の補團、中柑子の革足袋一足、是は縫ひ縮めてはくべし。唐竹の煙管筒、日野絹の頭巾、此二色は薬師の中林道伯老へ形見なり。柿染の夏羽

○中柑子の皮足袋―
薄い柑子色の皮で製
した足袋。濃柑子(コ
イカウジ)の對。

○長門練―秋月長門
守の屋敷から出る牛
皮で作った印籠(江
戸塵拾)。
○世間道具―裝飾的
の道具。

○飛子―旅稼ぎの芝
居子供。
○木辻―奈良の遊所。
○和國、もろこし―
共に島原の太夫の名。
○引舟―太夫に附隨
してゐる園女郎。
○分里―色里。

○無常野―墓地。

織、袖の鼠喰を見えぬやうにつきを當て、寺同行の仁左衛門殿へ進すべし。家久しき手代二人有りけるに、一人には置き古びし十露盤一丁取らせける。又一人には使ひなれし秤一丁譲りける。書置見ぬうちは頼もしく、何れも開くを待ち兼ねしに、いかなく金銀の事は一匁も書き付けなくて各々呆れ果て、手前のよき親類も錢銀の便りにはならぬ物と、今まで洒せし涙をやめて、此家を見限り我が里々に歸りぬ。千七百貫目の銀は一代の始末にて舒ばしければ、一門ほしがればとて、澤山にやる筈もなし。この九助一生絹物肌に着ざる印は、此度の改めにて知れぬ。四十二の厄年に絹の下帯一筋はじめて買はれしが、少しもよごれめ付かず其まゝに有りける。親仁の身の廻りとしては右の通りの外なく、藤巻柄に胡桃の目貫の相口一腰、熟革横ひだの巾着に鹿の角の根付、長門練の無地の印籠、是ならでは世間道具ひとつもなかりし。九之助是を淺ましく思ひ、はや遺言状を背き、親類手代までもそれぐに銀子を分けとらせけるを、親と

は各別の心ざしと人皆悦び出入り申し、昔にかはらず商賣するうちに、或る時多武峯の麓里二王堂といふ所に、京大阪の飛子の隠家をするべの人にそのかさされ、こゝに通ふ事つゝのりて戀の二道をかけ、奈良木辻狂ひも程なくいやになりて、今の都の和國もろこし迄も引舟まかせに買ひつめ、やむ事なきを母親の歎きて、十市の里より色よき娘よび迎へしに、分里の美形を見なれたる目なれば、中々是にてとまらぬ事を思ひとなり、母人も終に果てられし後、異見いふ人もなくて萬事を捨て、年久しくさわぎぬ。其後は下々までも見かざりて奉公外になしける。されども夫婦の中にいづともなう男子三人有りて、家繼は氣遣ひなかりしに、いよく九之助酒淫の二つに身をせめ、八九年のうちに頼み少なき身となつて、三十四の年に頓死、驚くに甲斐なく無常野に送りける。九之助も身の程は覺悟して、かねて書置したゝめ置きしを、手代ども集り、「若年の人々なれば跡の事ども心もとなし、金銀はいづれもの中へ預かり、方々御成長の時分相渡し

○惡所—遊里をいふ。

○分の立たぬ事—この分は諸拂の義。拂をすませなかつた事。

申すべし」と、心底残らぬ内談、流石昔のよしみと所の人々是を感じ、先づ先づ書置開いて見しに、皆々横手を打ちけるこそ道理なれ。有銀千七百貫目は遣ひくづし、是は借銀の書置興をさましける。「京井筒屋吉三郎殿小判二百五十兩かり有り、是は惡所にて金子の入る事俄なれば、借用して耻をすゞぎければ、義理のかり金なり、是は惣領九太郎成人の後随分かせぎ出し濟ますべし。大阪の道頓堀にての遊興の分の立たぬ事一つ書にしてあるなれば、是は九二郎濟ますべし。此外所々買ひが、りわづか三十貫目ばかりなれば、是は九三郎よりくゝに濟ますべし。家屋敷諸道具は所のさし引に分散して相渡すべし。跡の吊ひは後家にさすべし、書置仍而如件。

朝の鹽籠夕の油桶

○これやこなたへ云—鹿島の事觸の口吻。

○言觸—鹿島明神の神託だと言つて、當年中の吉凶禍福をふれ廻り、これを除くために秘符を授けるなどと言つて錢を貪つた一種の物乞である。○松櫻梅を切つて云々—諺曲鉢の木を匂はせた書きかた。

これやこなたへ御免なりましよ、鹿島大明神さまの御託宣に、人の身袋は動ぐともよもやぬけじの要石、商神のあらんかざりはとの御詠歌の心は、惣じて産業の道翺ぐに追ひ付く貧乏なしと、言觸がいうてまはりしに、正直の耳にはさみて、一文の錢をもあだにする事なかれ。むかし青砥左衛門が松炬にて鎌倉川を探せしも、世の重寶の朽ち捨る事を惜みての思案深し。それは最明寺の御時にて、松櫻梅を切つて薪屋をしても、抓取のある世なり、今は銀がかねを儲くる時節なれば、中々油断して渡世はなりがたし。爰に常陸の國に其身一代のうちの分限、十萬兩の鏝か原といふ所に日暮の何某とて、棟高く屋作りして人馬あまた抱へ、田畑百町にあまの家榮えて不足なし。末々の里人を憐み慈悲ふかく、此人所の寶と村の草木も靡きける。始めは纒なる笹葺に住みて、夕の煙細く朝の米櫃もなく、

○笹葺—屋根を笹で葺いたやうな茅屋。

着類も春夏のわかちなく、只律義千萬に身をはたらき、夫婦諸共にうき時を過しぬ。朝は酢醬油を賣り、晝は鹽籠を荷ひ、夕ぐれは油の桶にかはり、夜は杵を作りて馬かたに商ひ、若き時より一刻も徒居をせず、毎年内證宜しくなりて、五十餘までに錢三十七貫延しける。此男商賣に取付いてこのかた、一錢も損をしたる例なく、年々に利得を求めたれども、元少しの事なれば金子百兩になること中々むつかしく、漸う百兩に積りて、それより次第に東長者となりぬ。然も男子ばかり四人ありて何に不足もなし。此所は江戸より程近ければ、此人の頼もしき事を聞き及び、長浪人の身を隠しかね、筋目有る方より状を添へられ、鏝の里に行きてひたすら頼みけるに、この男心ざし深く、藁葺の庵を渡して扶持を分け置きけるに、後は七八人も有りて物かしましけれど、牢人賣れがたき世なれば、いづれも是非なく里の月日を重ねぬ。此中に森島權六といふ男、少しこびたる者にて、學力あれば道を忘れず、かくやつかいになれる恩賞にせめて

○賣れがたき一職につきにくい。

○こびたる一こましやくれた。

○三野一吉原。

はと思ひ、四人の子供に四書の素讀をさせけるは殊勝なり。又木塚新左衛門といふ男は、中むす子を勧め三野色道を教へ、大分の金銀をつかはせける。宮口半内といふ男は、小刀細工きければ、卯木の耳搔鼠の作り物仕出して、明暮油断なく精に入れ、江戸の通り町に遣はし、五六年に銀子ためけるは、此時にいたりての才覺人なり。又大浦甚八といふ者は、小歌小舞に氣を移し、後には自ら拍子きつて、人のする程の事習ひ得ずといふことなし。又岩根番左衛門といふ人は、其さますぐれて大男、髭生ひて眼すさまじく、使役にしても三百石が物は見えたり。然れども此人形に似せぬ心入、佛の道にかしこく、身をせざる蚤を殺さず、足下の蚓を踏まず、正直の頭ばかりは恐ろし。又赤堀宇左衛門といふ男は、此身になりても鐵砲を残し置き、無用の盜鳥、野山の狼を殺し、鞘谷武勇達、年中我がまゝをふるまひける。それくの人心かくかはり有るこそ浮世なれと、かくまへ置きし主は此善惡をたゞさす置きしに、世の牢人改めに皆々所

○鞘谷一刀の鞘が當つたなご言つて喧嘩口論すること。

○牢人改め一浪人の吟味。

○所を送る―その地から他へ送り出す意。

○又九郎―江戸の俳優阪東又九郎。
○口の世で―口があつて物さへ言へれば、さにかく何かの用に立つ世の中だからの意。
○尤役―下級の役者。「御尤も」ぐらゐの臺詞しか言はぬ端役に使はれるからの稱。
○十文字―穂先が十文字になつた槍。
○大佛―上野の大佛。萬治年間木食淨雲といふ沙門の造立。
○責念佛―調子を早めてせめかけるやうに念佛する事。
○針口―天秤の中央にあつて平均を示す

針のある所。こゝは勘定の違はぬやうにの意。

○萬年曆―三世相。大雜書等の類。

○久米のさら山―美作。
○藏合―作州の名高い長者。

を送りける。其後つらく世上を見るに、色々になり行く様こそをかしけれ。書物好の權六は神田の筋違橋にて太平記の勸進讀、好色の新左衛門は十面新吉と名を呼ばれて、田町に茶屋して日頃きいたる口三味線太鼓持となれり。細工利の半内は芝の神明の前にて、澁紙敷きての小間物賣、今に編笠をかし。音曲好の甚八は又九郎が芝居に入りて、やうく口の世で抱へられ、朝から晩まで尤役につかはれ、身をそれになしける。武士顔をやめざる宇左衛門は、心の如く乗馬に十文字をもたせ、先知五百石の時にあひぬ。又後生願ひの番左衛門は、いつしか墨染の袖となり、おのが姿も大佛のあたりにて、我と心を責念佛、申してもく口惜しき身の行末、皆知行も取りし者の、死なれぬ命なればかくはなり下りける。是を思ふに銘々家業を外になして、諸藝深く好める事なかれ、此等も常々思ふ所の身とはなりぬ。必ず人にすぐれて器用といはるゝは其身の怨なり。公家は敷島の道、武士は弓馬、町人は算用こまかに、針口の違はぬやうに手ま

三匁五分曙のかね

萬年曆のあふも不思議あはぬもをかし。近代の縁組は相性形にもかまはず、付けておこす金性の娘を好む事、世の習ひとはなりぬ。さるに依つて今時の仲人まづ敷銀の穿鑿して、跡にて其娘子は片輪ではないかと尋ねける。昔とは各別欲ゆる人の願ひも變れり。淵瀬に流るゝ戀の川上に、久米の更山さら世帯より、年月次第に長者となり、美作にかくれもなき藏合に立ちつゞきて、人の知らぬ大分限萬屋といふ者あり。一代に延したる銀の山、夜は此精うめき渡れど、貧者の耳に入る事にあらず。然も奢を止めて棟も世間並に、元日にも賀入の時仕立てたる麻袴にして、四十年このかた禮儀を勤めける。世は何染何島が時花るともかまはず、淺

○黒餅—紋所の名。たゞ圓いだけの紋で最も簡單である。

○小杉—小杉原の略。杉原紙の小判のもの。色道大鑑「鼻紙は小杉原に限るべし」。

○那波屋—播州の名高い富豪。長者教(寛永五年刊)「昔かまだや・なばや・いづみやさて三人の長者あり」。

○瓜種の用に—古草履を瓜の肥料に用ひるのである。來山の句に「古沓や碎いて入る、瓜作り」。

○成程—なるべく。○旅子—飛子に同じ。○聲山立つる—大聲あげる。

黄の七つ星小紋に黒餅、着物は花色より外は紅葉も藤色も知らず幾春をか送りぬ。藏合といへる家は藏の數九つ持ちて富貴なれば、これ又國のかざりぞかし。萬屋はひそかなる手前者、一人子に吉太郎とて有りしが、十三才の時鼻紙に小杉入れしを見て勘當切り、播州の網干に姨有りしが、この許に遣はし置き、那波屋殿といふ分限を見ならへと、我が子は捨てて、其後妹が一子を見立て、二五五六までも手代並にはたらかせけるに、其始末すたれる草履までも拾ひ集め、瓜種の用に里へ送るを見て氣に入り、これを子分にして家を渡し、相應の娘を尋ねけるに、世間とかはり成程格氣つよき女房ならば、我が娘に取りたきとの願ひ、世は廣し思ふまゝなる娘ありて縁組をすまし、夫婦は隠居をかまへ残らず渡されけるに、この跡取金銀有るに任せて少し取出、手掛者を聞き立て、旅子狂ひを心ざしけるに、かの娘約束の如く格氣仕出し、聲山立つれば、世間憚り自ら色遊びやめて、酒吞うで宵から寝るより外はなし。亭主内を出でねば、まし

○地算—前出(二四頁)。

○格氣のよき—「格氣つよき」の誤りか。

て手代ども灯の影に座をしめて慰みに帳面を繰り、小者は地算置きならひ、家の調ふ事はかりなり。始めの程笑ひし御内義の格氣のよき事、皆々思ひあたれり。惣じて親の子にゆるがせなるは家を亂すのもとるなり。随分厳しく仕かけても、大かたは母親一つになりて拔道をこしらへ、其身に過ぐる程の惡遣ひする事ぞかし。烈しきは其子が爲、温きは怨なり。この萬屋の夫婦相果てられし後、娘伊勢參宮して下向に京大坂の遊山、人のしやれたる風俗を見ならひ、姿を移せば心もそれになりて、格氣いふ事初心とたしなみければ、亭主此時と騒ぎ出で、作病をかまへ、所の養生思はしからずと上方にのぼり、若女の二道にそまりて、日毎に蒔きける程に、いつとなく戀にはころび、針を藏に積みてもたまらず、久しく此家に住みなれし金銀に憎まれ、内藏の福の神お留主なりし時、やうく夢覺めて驚き、商賣大體に替へて兩替屋に見世付廣く、人の金銀かぎりもなく預かり、あなたこなたと手まはしして、二度昔の身袋に取續くべき年の

○針を藏に云々—前出(六九頁)。
○お留主—下に「さ」字を脱したのであらう。

○内證は張物―内實の暮し向はごうか分らぬが外見だけは立派に見せかけるものさの意。

○ちやん―錢の事。
○若えびす―前出(三八頁)。

暮、人の内證は張物、大晦日の挑灯おそろしく、請拂も今宵一夜を越せば、明日よりは自由なりと、一錢も残らず濟帳付けて算用仕舞へば、七つの鐘の鳴る時、いかなくちやんが一文なくて、若えびす賣呼び込みたれども、「烏帽子着ぬえびすならば買ふ」とて戻しける。それより間もなく門を叩きて、兵庫屋といへる人革袋持たせ來て、「小判千五百兩有り、來年預けたし」と取出し、「先程の利銀の内三匁五分の豆板惡銀」と出しける。この替なくて身代顯れける。

日本永代藏 卷六

銀のなる木は門口の柵

○文王の圃―孟子、梁惠王章句下「文王之圃方七十里」。
○罍地―餘地。あき地。

唐土文王の圃は七十里四方あるとやいへり。其内の千草万木の詠めも、一間四方の罍地に柵一本植ゑて見るも、我が屋敷と思へば樂む心のかはる事なし。爰に越前の國敦賀の大湊に年越屋の何某とて有徳人、所に久しく住みなれて、味噌醬油をつくり、始めはわづかなる商人なるが、次第に家榮えける。世の方にかしこく分限になるそもくは、山家へ毎日賣りぬる味噌を、いづれにても小桶俵を拵へ此費かぎりなし。時に此親仁工夫仕出して、七月魂祭の棚をくづして、桃柿瀬々を流るゝ川岸に行きて、捨れる蓮の葉を拾ひ集め、一年中の小賣味噌を包めり。この利發世上に

○風車—毛糞科。觀賞に供せられるけれども有毒。
 ○海月桶—食用の海月を鹽漬する桶。

○目つこ—「目突かう」の訛。

○取葺屋根—前出(六四頁)。

○卷物—前出(二〇五頁)。

○頼み樽—婚姻の結納の樽。

○言入—これも結納のこと。

見習ひ、これに包まぬ國もなし。程なく大屋敷を買求め、その庭木にも花咲き實をながめ、生垣も枸杞五加木を茂らせ、萩は根引に風車は十八さ、げに植ゑ替へ、同じ蔓にも取りえのある物を好めり。海月桶の捨るにも蓼穂を植ゑ、目にかゝる程の事一つも愚なる仕業なし。昔植ゑたる柘後には大木となつて、その家の目じるしとなる年越屋を知らぬ人なし。節分の夜も鬼の目つこはこれを用ひ、一錢づゝの事も一代を考へ、一万三千兩持つまで取葺屋根の軒の低きに住みしが、惣領に幸の婬ありて約束するに、中立の人すゝめて内義とうなづきあひて、京より今風の衣装卷物を調へ、世間に笑はぬ程の頼み樽、二十五人肩を揃へておくりける。親仁には角樽一荷に鹽鯛一掛銀一枚、言入の祝義おくと見せけるに、大義なる顔つきして、「銀一枚よりは嵩高にして見よきに錢三貫」と申されし。是程に世間を知らねども、たゞ正直にして今六十餘歳まで暮されける。この家より頼みを奢のはじめとして、このたび表屋づくりの普請を望めど、

○同行衆—同じ旦那寺などの信者仲間。

○おから—意通ぜず。後刷本には「おのづから」を改めてある。
 ○さがりを請け—あがりな請け(八四頁)の反對。

○是無用の—原本「是に無用の」を今改めた。

子供のいふ事申中々親仁合點せざるを、念比なる町衆を頼み、又は二世までの同行衆、寺の長老様まで頼みまはり、漸う願ひ叶ひ作事に取りつき、所にては天晴棟高く思ひのまゝに作り立て、以前に各別かはりて毎日洗ひ琢きに光りわたり、近在山家の柴賣百姓の出入絶えて、商賣俄にやみて、作り込みし味噌のすて所なく、醬油流す川もなく、手前よりあまたの賣手をこしらへ、昔かはらぬ風味を出せど、人皆悪しく云ひなし、是も賣りとまれば、おから商賣かへて仕つけぬ事は危ふく、年々大分金銀へらし、買置すればさがりを請け、金山の損銀、程なく家はかりになりぬ。此家屋敷やうく三十五貫目に人の物にする事、親仁なげき給へば、忤子いふやうは、「時節のよき折から家普請をして置いたればこそ、このたび賣るに仕合」と、是無用の自慢なり。親仁翺ぎ出して四十年の分限、男子六年に皆になしぬ。されば金銀は儲けがたくて減りやすし、朝夕十露盤に油断する事なかれ。惣じて見世付のよしあし、鮫書物香具絹布、かやうの

花車商はかざりの手廣きがよし。質屋のかまへ食物の商賣は、ちひさき内の自墮落なるがよしといへり。久しく仕なれ人の出入り仕つけたる商人の家普請する事なかれと、徳ある長者の言葉なり。かの味噌屋敦賀にて呼び迎へし女房は去りて、濱手にすこしの見世を出し、是にも世帯人なくてはと、其所より女房よびしに、吉日を見て頼みをつかはしける時、角樽一荷鯛二枚錢一貫文是をおくる。世に有る時親仁に見せける頼みの事、今思ひあはせり。人々心得の有るべき世渡りぞかし。

○世に有る時—全盛時代。

見立てて養子が利發

和國の商口とて、利徳を取らぬと空誓文を立つれば、これに氣をゆるし、何によらず買ひ求むる世のならばしなり。神田の明神の前に俗性歴の浪人身を隠して、年も家に杖つく頃なれば、さのみ主取の望みもな

○家に杖つく頃—五十歳頃。禮記、王制

第五「五十杖於家、六十杖於郷、七十杖於國、八十杖於朝。」

く、小者一人つかうて一代の貯へ有つて、世をなりはひにくらし、徒居を外よりの咎うたてく、瀬戸物見せかけばかり出し置き、直段問ふ者あれば、百の物を百と有の儘に云ひければ、是を直ぎれどまけず、そもくよ摺鉢九つ肴鉢十三皿四十五枚天目二十德利七つ油さし二つ、三年あまりに一つも賣れず。これを思ふに商上手はあるべき事なり。年中の誓文を十月廿日のえびす講にさらりとしまふ事あり。其日は諸商人万事をやめて我が分限に應じ、いろ／＼魚鳥を調べ、一家集りて酒汲みかはし、亭主作り機嫌に下々いさみて、小歌淨瑠璃江戸中の寺社芝居、其外遊山所の繁昌なり。上方と違ひし事は白銀は見えず、壹歩の花をふらせける。秤いらすにこれ程よき物はなし。人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なる所あり。今日のえびす講は万人肴を買ひはやらかし、自然と海も荒れて常より生物をきらし、殊に鯛の事一枚の代金一兩二歩づゝ、しかも尾かしらにて一尺二三寸の中鯛なり。これを町人の分として内證

○上方さちがひし云—當時上方は銀貨本位、江戸は金貨本位であつた。○秤いらす—金貨は標目貨幣だからである。

○錢見世—銀貨を錢にかへる位の小さな兩替屋。
○十年切つて—年期を十年と定めて。

○活計—豊かな生活。

○五十八匁五分の相場—小判金一兩が銀五十八匁五分に當つたのである。江戸時代の銀の相場は時々高低があつた。

料理につかふこと、今お江戸に住む商人なればこそ喰ひはすれ、京の室町にて鯛一枚を二匁四五分にて買取り、五つに分けて杜秤にかけて取るなど、これに見合せ都の事をかし、爰に通町中橋の邊に錢見世出して、若い者あまた使へる人あり。日來は始末第一の人なれど、一兩二歩の鯛を調へて、えびすの祝義をわたしけるに、いづれも何心もなう夕飯を祝ひぬ。大勢の若い者の中に、此程伊勢の山田の者として、十年切つて抱へたる十四になる小者、すわりし膳を二三度いたゞき、食くはぬ先に十露盤置いて、「御江戸へ來りて奉公を致せばこそ、かゝる活計にあふ事よ」と、ひとりつぶやきてこれを喜ぶ風情、主人の目にかゝりて子細を尋ねられしに、「されば今日の鯛の焼物一兩二歩にて背切十一なれば、一切のあたひ七匁九分八厘づゝに當るなり。小判は五十八匁五分の相場に仕る算用してからは、銀を嚙むやうなる物なり。鹽鯛干鯛も昔は生なれば祝ふ心は同じ事、今日の腹も常にかはらぬ事」と申せば、亭主横手をうつて、「さりとは

○首尾せぬ時—相談のまごまらぬ時。
○世は張物—諺。世間は外見ばかりを張つて、富有らしく見せかけるものとの意。

利發者、分別ざかりの手代どもさへ何のわきまへもなく、箸は右の手に持つ物とばかり心得て、主の恩をも知らざるに、いまだ若年にして物の道理を知ること、天理にかなふべき者なり」と、親類中を呼びよせ、段々物がありして、此者を養子分にして我が家を譲るべしと、一筋に夫婦共に思ひ入りて、伊勢の親許へ相談の人つかはしける時、小者其中へまかり出で、「いまだお馴染もなきうちに、御心入の程はかたじけなし。然れども國もとへの御使は御無用なり、首尾せぬ時はそれほどの費なり。殊に御内證の事、世ははり物なれば、手廻しばかりにて大分の借金の有るも存せず、よく見届け申さぬうちに、養子の契約はなりがたし」と申せば、なほこの言分を感じ、「其方が心もとなき事尤なり、さりながら一錢も人の物を借らず」と、毎年の勘定帳を見せければ、有金二千八百兩としらせ、「此外金子百兩女房後々寺參り金に、此五年前にのけて置きける」と、包みながら封じ目に年號月日書き付け置きぬ。小者是を見て、「さてもく

○浮世山椒—當時賣出したものであらう。みづから(昆布に山椒を包んだもの)の類か。
 ○うけて—うけるは小賣するため問屋、卸賣屋から買入れること。
 ○ちやん塗—瀝青を塗つて油の漏るのを

商下手なり。包み置きたる金子は一兩も多くはなるまじ、利發なる小判を長櫃の底に入れ置き、年久しく世間を見せ給はぬは、商人の形氣にあらず。此心から大分限になり給はず、頭のはげるまでこのお江戸に居ながら、やうく三千兩の身躰、これを大きな顔つきあそばしける。わたくし養子になさるゝからは、四五年のうち江戸三番ぎりの兩替になること、長生して見給へ。まづ夫婦衆は今日より毎日談義ある寺参りし給へ、その下向に納所坊主に近より、散錢ある程買ひ給へ、世帯佛法二つの徳あり。供のでつちは道の間の外聞なれば、浮世山椒をうけて小袋に入れ行き、法談はじまらぬ先に、諸人のねぶりざましにこれを賣るべし。さて又供つれぬ参り衆の笠杖草履を、談義はつるまで一錢づゝにて預かれしと言ひつかはしけるに、毎日錢儲けして主人の供もつとめける。かくの如く萬事に氣を付け、後には思ひの外なる智恵を出して、舟つきの自由させる行水舟をこしらへ、刻昆布して目にかけて賣出し、ちやん塗の油土器、

防ぐやうにした油皿。
 ○しぼ紙の煙草入—しぼ紙(絞つて縮緬のやうに皺をよせた紙)で拵へた煙草入。
 ○懐中合羽—折り疊んで懐中し得るやうにした合羽。
 ○善五郎—當時の名高い兩替屋。
 ○碁二つ—未詳。碁所に二目置いてうつさいふ意か。
 ○紫腰—蹴鞠で特定の技に達するやうになれば、紫腰の袴を許す故實がある。
 ○金書—楊弓で百發中の中するもの廿五本を朱書、五十本を泥書、七十五本を金貝、九十本以上を大金貝といふ(遊花小言)。金書は即ち金貝。
 ○本手—三味線の本

しぼ紙の煙草入、外の人のせぬ事に、十五年たゝぬうちに三萬兩の分限になつて、靈巖島に隠居して、二人の養親に孝をつくしける。いかに繁昌の所なればとて、常のはたらきにて長者にはなりがたし。三文字屋といへる人、むかし懐中合羽を仕出し、それより馬道具の仕込次第に榮えて、本朝の織絹唐物を調へ、毛類は猩々緋の百間つゞき、虎の皮千枚にても、黄羅紗紫羅紗、都にも無いものを持丸長者とさせられ、中橋に九つ藏とてかくれなし。これらは各別の一代分限、親より譲りなくては、すぐれて富貴にはなりがたし。京の室町歴々人の男子、何も商賣なしに善五郎などを頼み、大分の銀がして世を渡り、この利銀毎日二百三十五匁づゝのつもりに入れけるに、何やうにか使ひ果しける、十五年がうちに此財寶皆になし、江戸へかせぎに下りける。此男の器用さ、謠は三百五十番覺え、碁二つと申し、鞠は紫腰を許され、楊弓は金書ぐらゐ、小歌は本手の名人、淨瑠璃は山本角太夫とかたりくらべ、茶の湯は利休が流れをくみ、文作に

式の曲。端手に對す。
 ○山本角太夫—山本土佐椽。角太夫節の祖。
 ○文作—即座に滑稽な輕口を作り出していふ事。
 ○神樂、願齋—神樂庄左衛門と願齋（願西）與七。鸚鵡。一中等と共に京都で名高かつた習間。
 ○枕返し—木枕を數箇積み重ねて、その中から隨意に好む枕を抜去つたり、左右の手にもちかへたりする曲藝。
 ○古へ傳内—貞享元祿頃の作品師で、枕返しの名人であつた。
 ○當流—當世風。こゝは宗因の談林風をさす。
 ○目安—公文書。
 ○銀見る—銀貨の良否を見分ける。

は神樂・願齋もはだして逃げ、枕がへしなどはいにしへ傳内に横手をうたせ、連誹も當流の行きかたを覚え、香を聞く事京にもならびなし。人中にて長口上も言ひかねず、目安も自筆に書きかねず、何に一つくらからねど、身過の大事を知らず、當所もなく江戸に下りて奉公するに、「銀見るか算用か」といへば、さしあつて口惜しく、諸藝此時の用に立たず、二たび京都にのぼりて、とかく住みなれし所よしと、年月したしみの友を頼みて、諷鼓の指南して、やうく身一つくらし、不斷の不自由を松ばやしの時質うけて又おく事やすし。此分にて通るべきや、人間の身はわづらひある物と、老先の事案じける。もつとも六十年は送りて六日の事暮しがたし。是を思ふにそれぐの家業油断する事なかれと、さる長者の語りぬ。

買置は世の心やすい時

○松ばやし—正月の諺初。
 ○六十年は云々—諺。六十年は暮せど六十日を暮しかぬるこもいふ。
 ○長崎商人—長崎に舶來する品を賣買する商人。

毎年元日に書置して、四十以後死をわきまへ正直に世渡りするに、自然と分限になつて、泉州堺に小刀屋とて長崎商人あり。此津は長者のかくれ里、根の知れぬ大金持其數を知らず。殊更名物の諸道具唐物唐織、先祖より五代このかた買置して、内藏にをさめ置く人もあり、又寛永年中より年取込み金銀今に一度も出さぬ人もあり、又内儀十四の娉入して敷銀五十貫目、其時の箱入封のまゝかさね置き、其娘縁に付く時、是を持たせておくりける人もあり。外よりは細にして内證手廣き所ならひ、この歴々に立ちならぶ分限にはあらねど、そもくの書置は三貫五百目なりしが、二十五年がうちにひとりの利發にして仕出し、年々書置かさみて、既にかぎりの時八百五十貫目の有銀一子に渡しける。此人世間によく思はれ、分限になるはじめは、其頃唐船かすく入りて絲綿下直になりて、上々吉の

○歩行醫者―乗物醫者に對し、歩行で病家を見舞ふ程の醫者。

○念に思ひ―その醫師の事が忘れらず、もしかと念の爲に見て貰はうと思ひ。

緋りんす一卷十八匁五分づゝにあたれり。前後かやうの事はまた有るまじきと思ひ入り、念比なる友に商の望みを語りて、一人より銀五貫目づつ、十人より五十貫目借りて、このりんすを買置きけるに、その明の年大分の利を得て三十五貫目儲け、よろこびの折ふし、只ひとりの男子萬事かざりに煩ひける。身躰にかへて養生するに驗氣なく、さまざま心を盡し歎くうちに、人の語りけるは、「歩行醫者ながら療治よくせらるゝ」とて引きあはされ、あぶなき病人を十のもの七つばかりも仕立て、此上はかばかしからぬとて、一門の相談にて名醫に替へてみしに、めたくと悪しくなり死病に極る時、夫婦最前の薬師を念に思ひ、挨拶せし人に面目かへりみず頼み、今は世にない物にして又薬を與へ、半年あまりに鬼のごとく達者になし給ひ、此手柄かくれなし。親の身にして嬉しさのあまりに、かの醫者取次の方へ行き、「今日吉日なれば薬代を冥加の爲につかはしたし、こなたより頼む」とあれば、取次せし夫婦此事をさたして、「これから遣

○指圖すれば―見つれば。推測すれば。

○斟酌―辭退。遠慮。

○銀百枚―四貫三百目に當る。

はせとは一廉の禮銀五枚」とさしづすれば、内儀のいはく、「それは何として銀三枚」と論ずるのちに、まづ銀百枚眞綿二十把斗樽一荷に箱肴、思ひの外なる薬代、くすしも再三の斟酌、取次の人も力を添へ、銀百枚貸して此醫者に家屋敷を求めさせ、次第に時花り出で、程なく乗物に乗られける。申せばわづかの事ながら、四十貫目に足らぬ身體にて、銀百枚の薬代せしは、堺はじまつて町人にはない事なり。此氣大分仕出し家榮えしとなり。

身躰かたまる淀川のうるし

○瀬々の流も云々―前出(二〇九頁)。

人の翺は早川の水車の如く、常住油断する事なかれ。瀬々の流れも晝夜七十五里につもり、水の行末さへ限りあるなれば、人間一生長う思うて短し。程なく老の浪立つ淀の里に、與三右衛門といへる人、始めはわづかの

家業なりしが、自然の仕合見えしは、或る時降りつゞきたる五月雨の比、長堤も高浪越して、里人太鼓をひゞかせ人足を集め、此水をふせぐに、小橋は常さへ淵なるに、今日のけしきのすさまじく、阿波の鳴門を目前に、渦のさかまくその中より、小山程なる黒き物びつと浮き出で、行く水につれて流れしを、見る人鳥羽の車牛ならんと指さしけるに、牛には大き過ぎたるに心を付け、これを跡よりしたひ行くに、渚の岸根なる松にかゝりて留りけるを立ちより見れば、年々四十八川の谷々より流れかたまりし漆なり。これ天の興へと喜び碎きて、上荷舟にて取りよせ、ひそかに賣りける程に、此一つのかたまり千貫目にあまり、此里の長者とはなりぬ。これらは才覺の分限にはあらず、天性の仕合なり。おのづと金がかね儲けして、その名を世上にふれける。或は親よりの譲りをうけ、又は博奕業にて勝を得たり、似せ物商ひ、後家を見立て入賀、高野山の銀を廻し、人知らねばとて穢多村へ腰をかゞめ、手前のよろしきは嬉しからず。常に分限

○上荷舟―前出(二三頁)。

○天性―人爲的な事に對し天然自然な事に對し。

○ふりにつまり―振廻し方に窮し。
○調義―前出(二三頁)。

になる人こそ誠なれ。人の吝きを笑ふ事は非なり。それは面々の覺悟に有る事なり。手を出して物は取らねど、其心に違はざる非道の人世にまぎれて住めり。たとへば借銀嵩み次第にふりに詰り、さまざま調義をするにたりがたく、自然と其家をつぶし、毛頭内證に偽りなく、委細に勘定を立て、其上の分散は損銀するに悪まず、今時の商人おのれが身軀に應せざる奢を、皆人の物にて晝夜を明し、大年の暮に驚き、工みて倒るゝ拵へして、世間の見せかけよく、隣を買添へ軒をつゞけ、町の衆を舟遊びにさそひ、琴引く女をよびよせ、女房一門をいさめ、松茸大和柿のはじめを、直段にかまはず店のはしにて買取り、茶の湯は出さねど口切前に露路を作り、久七に明暮たゞき土をさせて、奥深に金屏を光らし、外よりこのもしがらせ、頓て賣家なるに千年も住むやうに思はせ、内井戸石の井筒に取りかへ、人の物借らるゝ程は取込み、ひそかに田地を買置き、一生の身業を拵へ、其外子供を仕付銀まで取つて置き、惣高算用して三分半にまはる程に

○いさめ―慰め。

○口切り―初冬の頃、かれて壺の中に貯へておいた新茶の封を切つて茶湯を催すこと。

○久七―下男の通名。

○仕付銀―教育費。

○負せ方―債権者。

○賣り旬―賣るに適當な時期。
○のけ金―さりのけて貯へておいた金。

○分散―原本「分算」ごある。

○ほしき物を云々―寛永五年刊長者教「惜しき物を賣りて欲しき物を買はずして、かれは主と思へ、主をそもや使ふものか」。
○くるく―「来るく」にかく。小唄の文句取り。
○椀家具―椀のこご。
○橋本、葛葉―共に

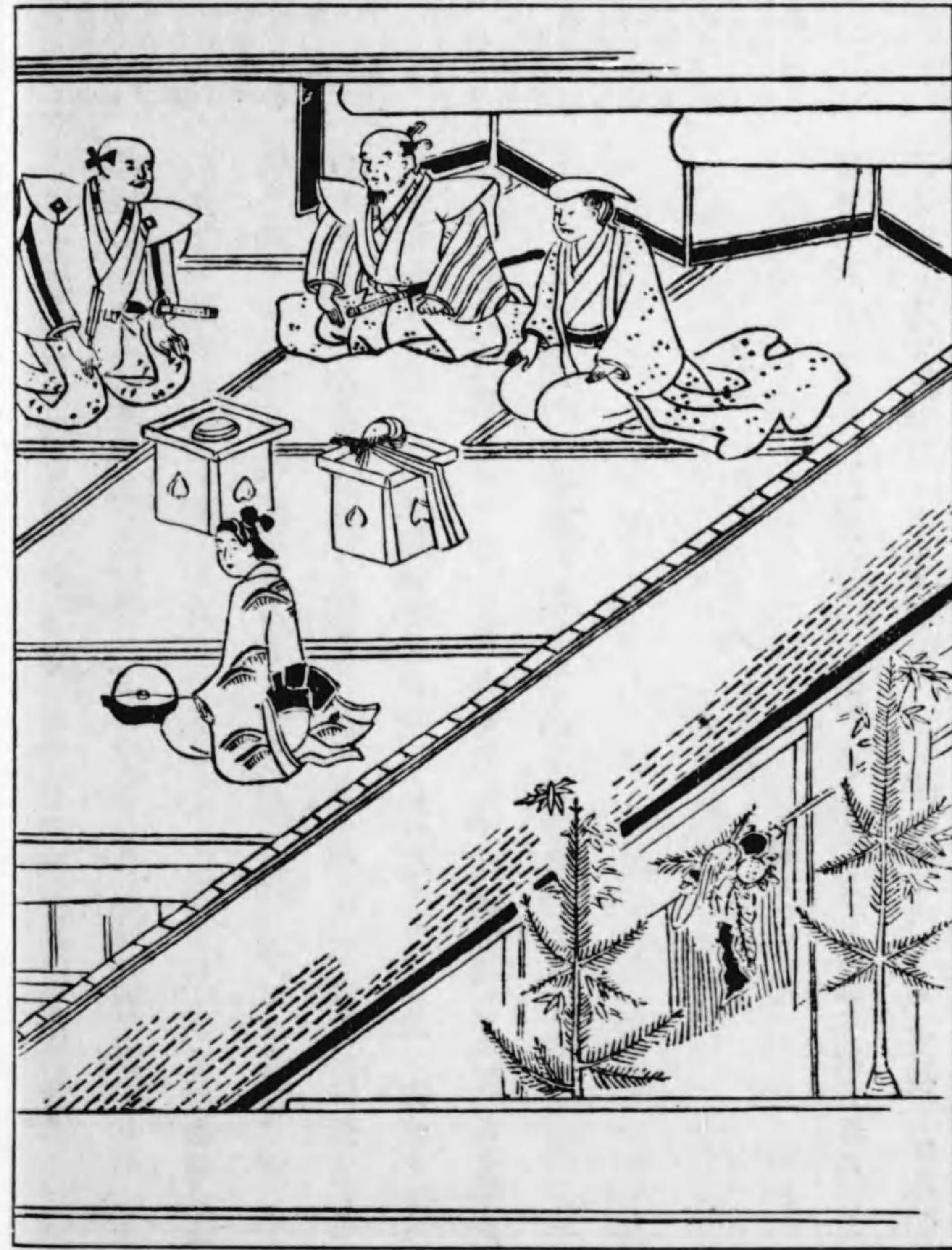
仕かけ、負せ方に渡しけるに、後は我人退屈して自らに濟まし、其當座は悲しき顔付して、木綿着物にて通りしが、はやこの寒さ忘れて風をいとほぬ重小袖、雨降つて地固まると、長柄のさしかけ傘に竹杖の勿體らしく、紫の頭巾して「小判は賣旬か」と相場聞くななど、さながら除金のやうに思はれける。さても恐しの世や、うかと貸銀ならず、仲人まかせに娘もやられず、念を入れてさへ損銀多し。昔大津にて千貫目の差引を、世界になき事と沙汰せしに、近年京大坂に三千五百貫目四千貫目の分散も、さのみ大分といふ人なく、其時代にて物ごと手廣くなりぬ。以前に變り世間に金銀多くなつて、儲けもつよし損も有り、商の面白きは今なり。隨分世渡りに麁器をする事なかれ。或る長者の詞に、「ほしき物を買はず惜しき物を賣れ」とぞ。此心の如くかせぎて奢をやむればよきに極る事なり。されば商の心ざしは、根ををさめて太く持つ事肝要なり。この淀の人都の榮花を見ならひ、大川を泉水に仕かけ、京よりあまたの工を呼び

淀の南方の地名。
○松の尾―洛西松尾神社。俗に酒の神として崇ばれてゐる。
○安居の頭―安居は男山八幡宮の神事で、夏季九十日間參籠するこご。頭はその神事を世話する當番の者をいふ。
○むそくする―無駄になる。
○踊歌―元祿年間刊祇園踊口説、戀の車づくし「淀の川瀬のえい唐崎や、花は咲いた誠に水車さ、誰を待つやらくるくささ」。又其角の類柑子に「淀の川瀬の舟引歩みじたり(中略)。空しき車のみあるぞ與惣右が門に誰を待た者。―藝者―一藝に達した者。
つやらさうたひ出でらる」。

よせ、不斷の水車客を待つやらくるくくと、椀家具の音伏見までひゞき、濱焼のかをり橋本葛葉にかよひ、茶は宇治に人橋をかけ、酒のしたゝり松の尾まで流れ、此繁昌いつか盡くる世あらじと見しに、或る時石清水八幡宮を申しおろして、安居の頭を執り行はれ、目出度きこと山々なりしに、此行事はその亭主の心持大事なり、萬の義を惜しきと思へば、忽ちむそくする事なりしに、この家破滅御告にや、大釜の下より大東の霞燃えしさりしに、あまた人庭にありながら、是をさしくべる人もなくて、あるじ心にかけしより幾程なく此家絶えて、其名は踊歌に残れり。

智恵をはかる八十八の升搔

世界の廣きこと今思ひ當れり。萬の商事がないとて、我人年々くやむ事およそ四十五年なり。世のつまりたる云ふうちに、丸裸にて取付き、



○はし鹿の子—未詳。帯の兩端だけを鹿の子絞りにしたものが。

○猿松—腕白子供をいふ。

○共過—原本には「友すぎ」とある。

歴々に仕出しける人あまた有り。米一石を十四匁五分の時も乞食はあるぞかし。つらく人の内證を見るに、其家それ／＼に諸道具を次第に拵へ、昔よりはおしなべて物ごと十分になりぬ。尤も家を破る人もあれど、家調へる人まされり。其例は京に限らず、江戸大坂のはし／＼明地野原まで、少しの明所もなく人家に立ちつゞき、何して世を渡るとも見えねど、五人三人の子供に正月着物綿入れて、盆は踊ゆかたも拵へ、はし鹿の子の後帯ひとしほ見よげなり。亭主は日用とり、或は釣瓶繩屋、又は童子すかしの猿松の風車をするなど、やう／＼一日に丸どりにしてから、三十七八文四十五文五十迄の仕事するかせぬうちにて、四五人口を過ぎて、いづれも身の寒からぬは、これみな母の働きなり。同じ五人口にて一日に三匁五分づゝ入るも有り、又は六匁づゝ入るもあり、世帯の仕かた程各別に違ふものはなし。人の渡世はさまざまに變れり。漸う夫婦の共過しかねるもあれば、一人の働きて大勢をすすは、町人にて大かたならぬ出

○大織冠—藤原鎌足。○つり—系圖。血統。

○江戸酒—江戸へ賣出す酒。

○小早—速力の早い小形の船。

○三ヶの津—京江戸・大阪をいふ。

世其身の發明なる徳なり。一切の人間目あり鼻あり、手足もかはらず生れ付きて、貴人高人よろづの藝者は各別、常の町人金銀の有徳ゆゑ世上に名を知らるゝ事、是を思へば若き時よりかせぎて、分限の其名を世に残さぬは口惜し。俗性筋目にもかまはず、只金銀が町人の氏系圖になるぞかし。たとへば大織冠の系あるにしてから、町屋住ひの身は貧なれば、猿廻しの身には劣りなり。とかく大福を願ひ長者となる事肝要なり。其心山の如くにして、分限はよき手代ある事第一なり。難波の津にも江戸酒つくりはじめて一門榮ゆるも有り、又銅山にかゝりて俄分限になるもあり、吉野漆屋して人の知らぬ埋金ある人もあれば、小早作り出して舟問屋に名をとるもあり。家質の銀借して富貴になるもあり、鐵山の請山して次第分限の人もあり。これらは近代の出来商人、三十年このかたの仕出しなり。人のすみかも三ヶの津に極まれり、遠國に分限あまた有れど、其沙汰せざる人多し。尤も都の長者は、金銀の外世の寶となる諸道具を持

ち傳へたり。龜屋といへる家の茶人一つを、銀三百貫目に絲屋へもらふ事あり、二十萬兩の差引を年歩にて済ます兩替屋もあり。とかく都の沙汰は外にてなりがたし。昔の長者絶ゆれば新長者の見えわたり、繁昌は次第まさりなり。人は堅固にてその分際相應に世を渡るは大福長者にもなほまさりぬ。家榮えても屋繼なく、又は夫妻にはなれあひ、物ごと不足なる事は世のならひなり。爰に京の北山の里、隠れもなき三夫婦とて人の羨む人あり。そもく祖父祖母無事にして其子に姪をとり、又此孫成人して姪をよび、同じ家に夫婦三組、しかも幼馴染にてかたらひをなしける事、例もなき仕合なり。此親仁八十八、そのつれあひ八十一、男子五十七、其女房四十九、此子二十六、女は十八、一生少しのわづらひなく、殊更いづれも挨拶よく、其上身躰も百姓の願ひのまゝに、田島牛馬男女の召使者棟を並べ、作り取同前の世の中、萬を心にまかせ、神をまつり佛を信心ふかく、おのづから其徳そなはりて、八十八歳のはじめに、誰か云ひ出して升

○挨拶よく一睦じく。

○作り取一年貢を納めず、作物の収入を全部所得とする事。

搔を切らせけるに、すなほなる竹の林も切り絶ゆるばかり。京都の諸商人これを望みけるに、商賣に仕合有つて、いよくもてはやして、三女婦の升搔とて俵物はかるにこぼれ幸ひあり、上京の長者此升搔にて白銀を量り分けて、三人の子供に渡しけるとなり。金銀有る所には有る物語聞き傳へて、日本大福帳にしるし、未久しく是を見る人の爲にもなりぬべしと、永代藏にをさまる時津御國静かなり。

日本永代藏終

井原西鶴

浮世草子の作家として、西鶴の存在は我が國文學史上の一つの大きな誇であつた。しかもその個人的傳記については、從來殆んど知られる所がなかつた。只彼が大阪の生れである事だけは、自ら「俳諧團袋」の中に「ふるさと難波」と言つて居り、又其角の「句兄弟」に「西鶴は難波江に生れ」とあつたり、北條團水の編した西鶴十三回忌追善集「心葉」に、「攝ノ浪速ノ産ナリ」と述べて居るので明かである。即ちその歿年から逆算すれば、彼は寛永十九年難波に呱呱の聲をあげたのであつた。その外には出自や家庭の有様などは勿論、西鶴自身の俗稱すらも知られなかつた。然るに近時伊藤仁齋の第二子伊藤梅宇の筆録にかゝる隨筆「見聞談叢」中の記事が紹介された事によつて、些かその生活のさまが明かにされた。「見聞談叢」の傳へる所によれば、西鶴は俗稱を平山藤五といひ、かなり富裕な町人であつたが、妻に早く死別し、一女も盲目であつた上に早世した。それで名跡を手代に譲つて、自分は世を

自由に暮し、俳諧や小説に耽つてゐた。且つ常に行脚を事とし、半年程頭陀をかけて諸方を巡つては家に歸つてゐたといふ。この記事はすべてがそのまゝ信ぜられないとしても、彼が中流以上の町人の出で、自由な生活をしながら廣く諸國に遊んだ人である事は、彼の作品と照合しても首肯される所である。少くともこの新しい資料によつて、從來西鶴を武家の出であるとしたり、旅行を好まなかつたであらうなどと言はれた謬見は、全く改められねばならない。而してかうした經歷を背景として、彼の作品は更に深く味ははれねばならないであらう。

西鶴が藝術家として踏み出した第一歩は、いふまでもなく俳諧の世界であつた。延寶九年刊「大矢數」の跋に、自ら「予俳諧正風初道に入て廿五年」と言つてゐるのから逆算すると、十五六歳の頃からもう俳諧を始めたものと思はれる。かくて廿一歳の頃には早くも點者の地位に達して居た^石。彼は當時鶴永と號して西山宗因の門にあつた。宗因は談林派の首領として、俳壇に新風を鼓吹した人であるが、それは寛文末年から延寶初年にかけての事で、西鶴が初めて師事した頃は、まだ貞門の糟粕を嘗めてゐる時代であつた。西鶴の句の見える最初の文献は、寛文六年刊の「遠近集」で、その中に

御繩や内外二重御代の松

鶴 永

心こゝになきかなかぬか郭公

同

彦星やげにも今夜は七光り

同

の三句が載つて居る。三句ともまだ古風常套の手法から少しも脱してゐない。然るに師宗因が漸く新風を唱へるに及ぶや、彼はその急先鋒として最も目ざましく活動した。當時世人は西鶴等の一團を阿蘭陀流と呼んだ程である。しかも西鶴は寛文十三年(延寶元年)の夏、自ら「生玉萬句」(假題)を撰んで、「もしらば誹れわんざくれ、雀の千聲鶴の一聲」と、所謂阿蘭陀流のために大いに氣を吐いた。かくて延寶三年宗因が江戸に下つて、田代松意の一派と「談林十百韻」を興行し、新風の氣勢を盛んにして歸つて來た時、

西山梅翁庵にて

此度や師を笠に着て梅の花

(梅の牛)

と吟じて號を西鶴と改め、益々新風の鼓吹に努めた。随つて保守派の爲めには最も烈しい指弾を受け、中島隨流の「誹諧破邪顯正」^{延寶七年十二月刊}には、

當時宗因流を學ぶ弟子數多ある中に、殊更すぐれて相見えしは、江戸は知らず、大阪にて阿蘭陀西

と言はれた程であつた。實際延寶六七年の際に於ける西鶴の俳壇的活躍は、當時の文献に徴して、頗る目ざましかつたさまが窺はれる。恐らく彼の俳諧生活を通じて、この頃が最も油の乗切つた時代であつたらう。

天和二年三月西山宗因は七十八歳で歿した。時に西鶴は四十一歳であつた。宗因の死は談林一派にとつて、かなり大きな打撃であつたらうが、西鶴自身にとつても、彼の生活に一轉機を齎らすべき一つの機會となつた。即ちこの年十月、彼は「好色一代男」を世に公にして、俳諧師から小説家に轉すべき第一歩を印したのである。茲に彼が創作の方面を轉換した動機については、師宗因の死も確かにその一つの原因と見られるであらう。その他種々の考察も試みられて居る。しかしこれは要するに彼の内部に潜んでゐた小説創作の要求が、師の物故といふ偶然な誘因を得て、急に外部へあらはれたに外ならない。元來西鶴の藝術家としての素質は、芭蕉などの如く沈潜苦吟して、十七字の間にも自分の深い主觀を寓しようとするやうなものではなかつた。鋭く機敏に動き、強く奔放に湧き出るのが西鶴の詩である。彼が俳諧に於いても、發句の数が比較的少くてしかも優れた作に乏しいのに比して、連句には大作

が多く且つ最も特色に富んでゐるのも、全くこの素質によるものである。殊に彼は連句でも速吟達吟にかけては、非凡の手腕を持つて居た。當時俳諧大矢數と稱して、一日に多數の句を獨吟する事が流行したが、その流行の勢を作つたのは實に西鶴ともいふべきで、彼は延寶五年初めて一日千六百句の獨吟を興行し、ついで延寶八年には五千句の獨吟に成功した。然るになほ世に五千句七千句など獨吟したと稱する者があつたので、彼は貞享元年六月五日大阪住吉神社の神前で、一晝夜二萬三千五百句獨吟といふ破天荒な大興行をやつて、世人を驚倒せしめ、遂に永久に矢數俳諧の記録保持者たる榮譽を贏ち得た。この二萬句獨吟は人間業としては殆んど信ぜられぬ事であるが、その事實たる事は、門人北條團水が「心葉」の序文に明記してある所で、その他傍證とすべき資料が多く、全く疑ふ餘地がない。天才の仕事は往々にして人力を絶する。矢數俳諧の藝術的意義などについては、今多く問ふを要しない。とにかくかうした非凡の能力を、西鶴の中に認めればよい。

この神速奔放な西鶴の天才は、彼の藝術にどういふ強味を與へ、又いかなる弱味を齎らしたらう。一卷の展開と變化とに機敏なはたらきを要する連句が、彼に最もふさはしかつたのは言ふまでもなかつた。前句の要點をすぐ捉へて、次から次へとす早く句境を進展させて行

く事は、彼のやうに明敏透徹な頭腦の持主には、實際何でもない事だつたらう。それが僅かに十七字の間に限られては、かすかな機智の仄めきを見せる外には、殆んどその特色を發揮する事が出来なかつたのである。否連句でさへ實は全く彼を束縛しないとは言へなかつた。談林があまり法式に拘泥しなかつたとはいへ、少くともリズムからの制限は儼存した。差合去嫌も全く無視したのではない。題材としてはすでに當時の世相を縦横に取扱つて居た西鶴が、この形式的制限から脱れて、もつと自由に奔放に現實の世相を剔抉して寫して見たいといふ事は、自然の要求であつたらう。俳壇的活動の烈しかつた事は、この要求のあらはれを寧ろ遅からしめたと思はれるが、しかし一度は小説へと辿るべき運命を持つてはゐたのである。そして遂に小説として描き出されるやうになつた彼の作品は、彼の天賦と連句における修養とが相俟つて、益々その特色を深くして行つた。あの晦澁ともいふべき程極端な省筆法を用ひて、事件の推移をぐん／＼寫して行く迅速な筆致、一瞥して直ちにその人物の髮の結び振りから足の爪先までも見逃さず、さては人心の底に潜む機微までを洞察したやうな鋭い描寫、それは彼の作品に全くユニツクな特色といはねばならぬ。だがさうした素質は、部分的に偽敏奇警な觀察と描寫とを擅にするには適して居るが、全體としての構成上に統制の力を

缺く恨みが少くない。動もすれば筆が主題の外に逸して、全篇の構想に統一を破らうとする。西鶴自身もまた恐らくこの弊は自覺して居たのであらう。彼が淨瑠璃や長篇小説に手を染めないで、主として短篇の創作に向つて進んだのは、實に自ら知るの明があつたのである。實際彼の作として唯一の淨瑠璃とされてゐる「曆」を見ても、その結構は頗る散漫たるを免れて居ない。否彼の得意にした短篇すら、その短かい話の間に早くも全説話の統一を破らうとする傾向を屢々見るのである。例へば「日本永代藏」でいふと、才覺を笠に着る新六の話の中で、東海寺の門前に一夜を明した時の乞食の話が、寧ろ興深く語られてあつたり、或は廻遠きは時計細工の條の如き、大體長崎での唐物商の話をしてゐるのかと思ふと、手代共が主人の金儲けした種を話合ふ筋が取入れられてあるし、また胡麻粒をもとにして金米糖を作る工夫を始めた事も長々と描かれてある。あまりにも彼の興味と筆とは八方に走りすぎるのであつた。そこには恰も俳諧の附合に似た文章の進みが見られるのである。所詮かうした西鶴に、纏まつた大きい作品を望む事は無理といはねばならない。急所々に鋭い皮肉な筆の冴えを見せながら、自由にしかも深刻に人生の諸相をそれからそれと描いて行く、そこに彼の藝術家としての生命は見出されねばならなかつた。

天和二年始めて小説に筆を執つた西鶴は、その作品が世に迎へられると共に、彼の創作欲も益々小説へと動いて行つた。貞享元年には「一代男」の後をついで「好色二代男諸艶大鑑」を出し、三都の遊廓を主に描いたが、翌二年にはやゝ筆を轉じて「大下馬」(「西鶴諸國咄」)の如き奇事異聞を題材とした。しかも所謂浮世の姿を描かうとする彼の興味は、やはり好色の世界に求められねばならなかつた。貞享三年には「好色五人女」「好色一代女」を相ついで出し、翌四年には多少目先を異にした「男色大鑑」の作を公にした。この頃になると、彼は好色生活の享樂相から更に深く人生の觀照へ徹して、人間本能の悲哀と寂寥とを諦視した。そして一作毎に新たな創作の世界へと、心境の推移を示して行つた。彼は決して一所に久しく停滞する事の出来ない作者であつたのだ。彼は「男色大鑑」から更に轉じて、「武道傳來記」(貞享四年刊)・「武家義理物語」(元祿元年)の如き所謂武家物に筆を執るに至つた。しかし武士の生活は畢竟彼の體驗からは頗る遠いものだつた。ともすれば皮相な事件的推移の描寫にとゞまつて、空疎な義理の概念のみが取扱はれてゐる形があつた。それは決して西鶴のために少くとも有利な題材ではなかつた。聰明な彼がそれに氣附かぬ筈はない。「武家義理物語」を出した同じ年、彼は「日本永代藏」に町人の經濟生活を新しい題材として選んだ。

町人の生活は彼自らが親しく體驗し見聞して來た所である。彼はそこに最も正しく深い理解をもつ事が出來た。金をめぐる人間の喜劇と悲劇、金に動かされて行く世の中の淺ましさと悲しさ、それは色欲の世界にもました複雑さと深刻さがある。西鶴の筆はこの現實相を端的に寫し、しかも晩年の落着いた人生觀照の態度から、一味の餘裕をさへ湛へながら深く描いて行つた。「世間胸算用」(元祿五年刊)「西鶴織留」(元祿七年刊)等はこの種の所謂町人物に屬するもので、彼の作品中最もすぐれたものは、是等の中に求められなければならないであらう。

西鶴は好色物・武家物・町人物等の外にもなほ種々の作を試みて居る。例へば諸國の奇事異聞を録したかの「大下馬」に類したものに「懷硯」(貞享四年)があり、又「新可笑記」(元祿元年)の如きも普通武家物に數へられてゐるが、實は寧ろこの種のものといふべきである。なほ「本朝二十不孝」(貞享三年刊)・「本朝櫻陰比事」(元祿二年刊)等も全篇同種の小話を集めたもので、前者は廿四孝の裏を行つて因果應報の雜談を、後者は棠陰比事に倣つて裁判の話を輯録してある。又彼の歿後「西鶴置土産」・「西鶴織留」・「俗徒然」・「西鶴名殘の友」等が出版されたが、その中には多少門人の加筆したものもあらうと言はれてゐる。その外彼の作か

と疑はれてゐるものはなほ多くあるが、その確定は今後の研究に俟つ外はない。

西鶴は小説に轉じて後も、全く俳壇と關係を絶つたのではなく、特に元祿四五年の交には、「石車」を出したりしてやゝ活躍したが、要するに全く餘技にすぎなかつた。なほ近時眞山青果氏の説によれば、西鶴傳記のうちに「貞享三年の頃江戸淺草の僑居に移住し、爾後三四年間門を鎖して各種の著作に耽る」の數行を加へねばならぬといふ。(中央公論、昭和四年三月號)この江戸居住説は彼の作品を考察する上に、傾聴すべき新説であらう。かうして延寶期の俳壇と元祿初頭の文藝界に大きな足跡を残した西鶴は、元祿六年八月十日五十二歳で歿した。

浮世の月見過しにけり末二年

といふのがその辭世である。(昭和四年六月廿三日)

昭和四年七月廿五日印刷
昭和四年七月三十日發行

校註日本永代藏

定價金八拾錢



不許
複製

著者	穎原退藏
發行者	東京市神田區錦町二丁目十番地 三樹退三
印刷者	東京市神田區雉子町三十四番地 綾部喜久二
印刷所	東京市神田區雉子町三十四番地 宮本印刷所

發行所

東京市神田區錦町二丁目
振替東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田 (25) 二二一六四九一六五四番番

校註國文學叢書

本叢書は我が國文學上に有名な著作物につき、各專攻の學者に委嘱して、本文には嚴密な校訂を施して古典の定本としての權威を備へしめ、又難語難句には明快にして要領を得た註釋を施し、本文を讀破するに遺憾無きを期した。既に刊行したるものは孰れも好評を受け、一般人士の讀書的渴望を滿たし、且つ學生の好參考書であると共に、高等學校程度の學校の教科書として續續採用せられて居る。

▲既刊書目左の如し其他續續刊行す

- 次田 潤先生著 ○校古事記 定價壹圓五拾錢(送料)
- 次田 潤先生著 ○校祝詞宣命 定價壹圓拾錢(送料)
- 吉川秀雄先生著 ○校落窪物語 定價壹圓五拾錢(送料)
- 久松潛一先生著 ○校堤中納言物語 定價壹圓(送料)

校註國文學叢書

- 金子元臣先生著 ○校枕草子 定價壹圓五拾錢(送料)
- 佐藤 球先生著 ○校大鏡 定價壹圓五拾錢(送料)
- 和田英松先生著 ○校増鏡 定價壹圓五拾錢(送料)
- 石橋尙寶先生著 ○校十訓抄 定價壹圓五拾錢(送料)
- 鳥野幸次先生著 ○校保元平治物語 定價壹圓五拾錢(送料)
- 内海弘藏先生著 ○校平家物語 定價貳圓貳拾錢(送料)
- 内海弘藏先生著 ○校徒然草 定價八拾錢(送料)
- 佐藤仁之助先生著 ○校雨月物語 定價八拾錢(送料)

校註國文學叢書

鳥野幸次先生著 ○校註 土佐日記 定價七拾五錢(送料)

關根正直先生著 ○校註 更科日記 定價六拾五錢(送料)

鳥野幸次先生著 ○校註 十六夜日記 定價六拾五錢(送料)

鳥野幸次先生著 ○校註 東關紀行 定價六拾五錢(送料)

鳥野幸次先生著 ○校註 奥の細道 定價六拾五錢(送料)

金子元臣先生著 ○校註 古今和歌集 定價壹圓參拾錢(送料)

尾上八郎先生著 ○校註 新古今和歌集 定價壹圓八拾錢(送料)

佐佐木信綱先生著 ○校註 金槐和歌集 定價壹圓貳拾錢(送料)

終

